麻原彰晃の世界 PART16

麻原彰晃 方便品

ほうべんぼん

麻原彰晃の世界 PART16

麻原彰晃
方便品

ほうべんぼん

「お経はありがたいものかもしれないけれども、何をいっているのかわからない」――こういった声をよく耳にする。

確かに既存の経典は難解で、ごく一部の学者やマニアを除いては、経典を読んだことさえないという人が圧倒的な多数を占めている。

その原因の一つに、日本の経典に、インドの言葉であるサンスクリット語を中国語に訳した言葉や、言葉の響きを単に音写しただけの中国語などを取り入れてしまっているため、文字を見ただけでは何を意味しているのかとらえられなくなっているということが挙げられよう。

この点に関しては、オウム真理教では麻原彰晃尊師のご指導のもとに、サキャ神賢（釈迦牟尼）直説のパーリ聖典をパーリ語からダイレクトに翻訳することによって、わかりやすい現代語による経典の編纂を進めており、その成果は徐々に

実を結びつつある。

もう一つの、経典をわからなくさせている要素、それは、経典と修行とが切り離されてしまっているということが挙げられるのではなかろうか。

お経とはただ唱えるものではなく、読んで考え、実践するためのものだったはずである。しかし、現在の日本で、経典にのっとった修行をしている者が果たしてどれだけいるだろうか。さらに、それを極めている人となったら、わたしたちの知る限りは麻原尊師をおいてほかにない。

そして、厳しい修行によって最終解脱を果たされた尊師だからこそ、覚者サキャ神賢の教えを、現代の人にもわかりやすく説くことが可能となるのである。

麻原尊師はこのようにおっしゃっている。

「原始仏教の比喩というは、あくまでも二千六百年前の比喩であり、あるいは、二千五百年前の比喩であり、現代の比喩ではないと。この比喩というのはね、仏教的言葉を使うならば、『方便』ということです。…(略)…方便というのは、実際は嘘ではなくて比喩だね。で、この比喩を現代語的に説き明かしている、これ

がわたしの説法であると。だから、この両方を併せ持って初めて、仏典の真の意味合いというのをあなた方は理解できるわけです」と。

本書は、『経典』を題材にした麻原尊師の説法集である。

この書を手にされた方々が、尊師の巧みな方便によって現代に甦ったサキャ神賢の教えを読み、考え、実践してくださることを願ってやまない。

一九九二年三月

オウム出版広報編集部

※オウム真理教で進めているパーリ聖典の翻訳による訳語と従来の仏教用語の比較については、本書の巻末にある言語対比表をご覧ください。

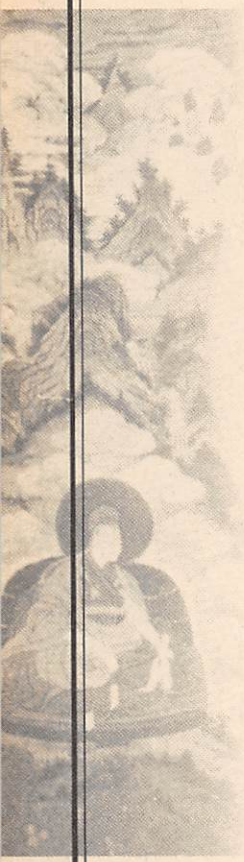
麻原彰晃の世界 ❖ PART16

麻原彰晃 方便品

——目次——

はじめに——1

◆第一話 公開！ 遠大なるオウム真理教の救済計画
「在家から出家、そして解脱へ」——10



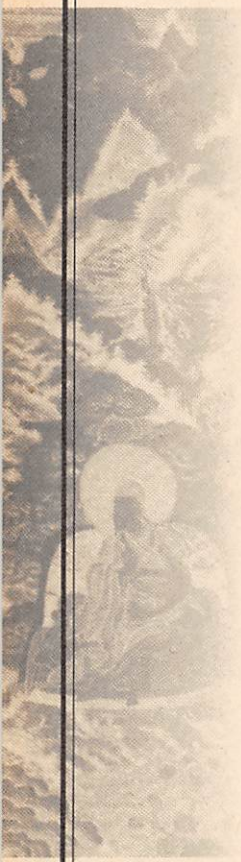
◆第二話　砂漠の中の一粒の砂にも似て……
「修行者の偉大な功徳」——26

◆第三話　こんなにも少ない、真理に巡り合う確率
「最高のチャンスを生かせ」——40

◆第四話　楽しみの裏側を直視して
「四つの食——外的な喜びを捨てよ」——52

◆第五話　他の苦しみを自己の苦しみとせよ
「利他の心がもたらす幸福」——72

◆第六話　尊師が語る「本生経」、そしてカルマの法則
「自由・幸福・歓喜の世界へ」——82
◆第七話　修行を失敗しないために
「修行者の四つの心得」——110
◆第八話　すべては無常、すべては苦
「真の菩薩の道」——134
◆第九話　苦しみを打ち破る原動力
「布施と持戒の恩恵」——146



◆第十話　すべての苦楽を超越するために
「煩悩の破壊――本当の自由・幸福・歓喜を目指して」――162

◆第十一話　悪業が尽きたときに得るものは
「五蘊の浄化がもたらす幸福」――174

◆第十二話　確信をもって未来に向かえば……
「悪因を滅する八つの功徳」――190

◆第十三話　これが〝逆説の幸福法〟
「八つの功徳の果報」――208

言語対比表――218

麻原彰晃　方便品

◆第一話　公開！　遠大なるオウム真理教の救済計画

「在家から出家、そして解脱へ」

◉ありのままに見つめるために

今日は皆さんにとって、最も益になるね、ためになる話を一つします、先に。これはね、心というものの働きについて、皆さんに話したいと思うんだけども、まあ皆さんもよく知っている、『阿含経典』の中にね、お釈迦様がこういうことを言っていらっしゃる。「わたしたちの心というものは、水にたとえることができる」と、ね。もし、わたしたちが、嘘、ね、つまり、この嘘ということを比喩的には苔というふうに表現していらっしゃるんだけども、その透明な水の上が苔で覆われたらどうなるかと、ね。その水にもし、他の人がだよ、顔を映したとき、

その水面には正確に相手の顔が映るだろうかと、ね。

同じように、例えばここに透明な水があって、これに絵の具を何種類か入れたと。要するに、色つきの水です。この場合はどうだろうかと。この場合、これはとらわれのことですね。執着のことです。そして、もう一つは沸騰したお湯に、もしだれかが顔を近づけて、そのお湯の沸騰の状態でね、自分の顔を確認したとしたら、いったいその人は、自分を正確に見ることができるだろうかと。これは怒りのことです。

つまり、何を言っているかというと、わたしたちの心というものは、水にたとえることができると。そして、わたしたちが、この世の状態を正確に見つめるためには——いいですか、正確に見つめるためには、まず、タマスね、嘘で覆われた生活をしちゃいけないよと。それから怒りの想念を持ってはいけないよと。それからとらわれてはいけないよということを言っていらっしゃるわけだ。

これはね、簡単な理論なんだけども、みんなが知らないこと。そして、もしわたしたちがこの三つの要素から離れたならば、わたしたちの心は透明になります、

ね。それによってだよ、どういうことが起きるかというと、まず、非常に記憶力が良くなると。記憶力というものは、要するにここにわたしたちの心があって、ね、外的情報が入ってきて、ね、それを単に反射したにすぎない状態。

それからもう一つは、他人を正確に見ることができるから、人生において狂いがないと。これはわかるね。つまり、透明な鏡だから、今の自分の状況、他人の状況というものを、ね、正確に見つめることができると。だから人生において狂いはないと、ね。

もう一つは、恋愛なんかについてもそうだね。愛着していないから、相手のいい点悪い点を正確に映し出していると。だから、将来において「しまった」ということはないと、ね。つまり、わたしたちは心さえ浄化すれば、心さえ透明にすれば、幸せな人生というのを歩くことができるんだってことなんだ。これが、今日のね、わたしの、あなた方に対するプレゼントです。

◉末法から正法へ

釈迦牟尼が入滅なさって二千五百年になります。そして、五百年区切りで、今、末法の時代だといわれています。五百年区切りで末法の時代ということはどういうことかというと、そろそろまた正法の時代が来なきゃいけない。そしてこれが五百年続いて、また二千五百年後には、末法の時代が来るということになるわけだね。

で、なぜ正法から末法に至るのかということについてみんな疑問を持つかもしれない。例えばだよ、今オウムというものは社会的に信用がありますか、といったら、信用はない。そうですね、まだ。ところが、これがね、成就者がどんどん出てきて——成就者が出てくるということは、それは灯明となるわけだから、つまり、あなた方の苦悩の原因というものを照らしてくれて、苦悩を取り除くわけだから——いいですか、当然オウムという組織は大きくなっていくでしょう。

そして、これが五年、十年と経つうちに、おそらく日本でも一、二を争う教団になるだろう。二十年、三十年と経つうちに、おそらくオウム以外の宗教はあり

えないという形にまでなるかもしれない。いいですか。

そうなった段階で、次にオウムに入信してくる人たちは、オウムに対しての信用はもちろんあります。しかし――いいですか、例えば、今、あなた方みたいに、真剣さはあるだろうかと考えたらないだろうね、当然。そして、オウムを動かしている人たちも、例えばわたしが死んだ場合、その後の継者たちはどうかというと、もう、あぐらを組んでても生きていけるから、そして真理だといって、例えば、わたしの書いた『イニシエーション』（オウム出版刊）あたりを振り回して、これが真理だよと言っていればいいわけだから、修行もしなくていいということが出てくるわけだね。そして、正法は廃れていって末法になると、ね。で、当然、末法になったならば、また正法を展開しなければならないわけだ。

まず、今集まっている皆さんは、ほとんどが前生で縁のある方だと考えてよろしい。そして、それは何のための縁かというと、正法を流布するための、展開をしていかなければならない人たちだね。

今、それぞれがそれぞれの個人的な悩みを持っている。それはそれで、ね、大

変なことだと思う。しかし、あなた方が、あなた方の悩みに対して立ち向かえば立ち向かうほど、あなた方は解脱に近づくわけだし、あなた方が解脱した後に、あなた方は苦しんでいる人の気持ちがよくわかるはずだ。そのために、あなた方は苦しんでオウムに飛び込んできたんだとわたしは考えている。そして、それがわたしのいうところの「苦ありて信あり」だね。いいですか。

◉在家修行者の役目――ピンディカ長者の功徳

そして、まず在家の修行から入ろうかね。というのは、在家の修行からオウムの修行、オウムの修行から解脱、そして解脱後の救済という展開になるだろうから。

在家の修行者には二つのパターンがあると思います。それは、今生で既に社会的にね、かなり信用を得ていて、そして、その信用から抜け出せないと。抜け出すと周りに多大な迷惑をかけると。そういう人は、おそらく今生で解脱をする機会に恵まれないだろう、ね。しかしだよ、それに対して、例えば在家の修行者は

悲しんではいけないし、それに対して、ね、卑屈になる必要もない。

それはなぜかというと、『阿含経典』にはこのように載っている。釈迦牟尼の一番の在家の信者であるピンディカ長者ね、ピンディカ長者とは何かというと、要するに祇園精舎をお建てになったお金持ちの方だ。この方は、釈迦牟尼に会うまでは大変豪華な生活をしていらっしゃった。ところが、釈迦牟尼に会われて、釈迦牟尼の説法を聞かれて、ぼろ布をまとうようになられた。しかしだよ、仕事は仕事として続けてられた。そして、それは仏教教団を支えるということが一つであるということと、それから、自分についてきている人たちを、ね、豊かにすることが、わたしの使命であるというふうにお考えになったわけだ。いいですか。

そして、お釈迦様がね、彼に与えた持戒ね——持戒というのは、殺してはいけないよと。盗んではいけないよと、ね。あんまりたくさんの女性とセックスしてはいけないよと。それから、嘘をついてはいけないよと。お酒を飲んではいけないよと。そして、あなたは、わたしに布施をしなさいと、ね——それを実践なさった。そして彼は、あなた方が知っている祇園精舎をお建てになって、ね、そして

天界に行かれた、ね。それが『阿含経典』第四巻の「天子相応」の中に出てくるわけだ。

いいですか。そして、そういう人がいなかったならば、逆にいえば正法の展開はあり得ない。みんなが修行者になってごらん、今の日本で。だれが修行者を助けるんだ。そうでしょう。だから、在家の人たちは在家の人たちの、今生での役目がある。そして、それをわたしは素晴らしいことだと考えてるね。

逆に、お釈迦様の弟子たちをね、分析すると、だいたい二つのパートに分かれるわけだ。一つは、大金持ちのお坊ちゃん、お嬢さん。これは「良家の子」という言葉で表現されている。もう一つは悪党だ、ね。良家の子というのはもう、カルマがよすぎて、これ以上何もやることがないと。だから解脱できると。今度は、悪党はね、どうかというと、要するに縛り首に遭うわけだ、修行しないと。だから必死になって修行すると。そして解脱したと。

両方とも解脱してしまえば、ま、仏陀とはいわないね、阿羅漢だね。アラハット、ね。しかしだよ、悪党が成就しても、あんまり大して供養は受けられないと。

ところが、良家の子が成就したら、供養は受けられるわけだ。解脱しても、ね、真解脱しても供養というのは残っているわけだね。で、それじゃあかわいそうだといって、悪党たちを供養なさったのが、先程言ったピンディカ長者なんだよ。そして彼は、その功徳によって天界に行かれたわけだ。兜率天という天界ね、これは。

だからね、何も無理をして解脱する必要はない。もちろん、解脱できるチャンスのある人はやるべきだ。そして、わたしは在家の修行というものは素晴らしいと思う。それはなぜかというと、まず心を透明にしてくれる。言い方を換えれば心を豊かにしてくれると言った方があなた方の知っている言葉だね。正確にいうと、透明にしてくれると。そして、周りを豊かにする。それは物質的にも精神的にも豊かにすると。これが、オウムの、いや真理を実践する者の、在家の修行者の生き方だ。そして真理を学ぶ。真理を実践する。瞑想できる人は、瞑想する、ね。これが在家の修行者のあり方です。

◉在家の修行から出家、解脱へ

そして、それではもの足りなくなった人は、もしだよ、例えばここに奥さんがいて、奥さんを捨てても奥さんは生活できると、例えば子供さんはきちんと教育できるという条件があるならば捨てればよろしいと、ね。そうじゃなくて、周りに対して苦を生じさせるようだったら、捨ててはならない。いいですか。

もし仮にだよ、捨てたとして、その上に解脱できなかったらどうなるかわかるか。来世はだいたい逆転します。来世は妻として生まれて、夫が捨てます。これは間違いがない、ね。しかもだよ、この世は嫌だから、解脱の修行の方が楽だからといって修行に入った者は最悪だ、これは、ね。

そして、そうじゃなくて、ちゃんと解脱のプロセスに入れる人が解脱のプロセスに入って解脱したら、これは最高だね。というのは、先程言ったとおり、解脱というものはサットヴァのエネルギーなんだね。つまり、いろんな人の苦しみを照らし出してあげて、あなたの苦しみの原因はこうですよと、ね、そして結果はこうですよということを教えることができる。そうすると、世の中の苦しみとい

うものは、一つずつ一つずつ消滅していくわけだ。どうなるかな、そうすると。この世はどんどんどんどん透明になっていくね。

そして、今はオウムでしか真理じゃないといわれているものが、ね、例えば日本中で真理だといわれるようになってくるだろう。ねえ。そうなったらしめたものだ。そうなったら、例えば高級車を一台買うのと、ね、例えば修行するのと、ね、あるいはお布施をするのと、どっちが価値があるかといって、

「いや、わたしは高級車に乗って楽々の方がいいんだ。」

という人はいなくなる、ね。そうすると、逆に少し怠け者の人間は、ま、結婚前のだよ、もちろん条件つきでね、修行してやろうと。そして俺も供養を受けて、一つ安穏に暮らそうじゃないかと考え出す。それが、第二期の釈迦牟尼の弟子たちなんだよ。

この第二期の釈迦牟尼の弟子たちについて、お釈迦様が亡くなった後、ね、釈迦牟尼の弟子の一人が嘆いている。

「今から数十年前の、釈迦牟尼の生きていた時代は素晴らしかった」と。

「今の弟子たちは何だ。」と、ね。

おそらくオウムもそうなるだろう。でも、それはね、時の流れなんだ。だから、その時の流れというものを否定してはいけない。逆の言い方をすれば、それぐらいの組織力、それぐらいの真理が展開できないようだったら、オウムの救済活動は失敗するだろうね。

◉三万人の解脱者が世界を救う！

じゃあいったい、オウムの救済活動とは何かといったら、まずは真解脱者、アラハットを三万人出すことだ。この三万人という数字は、直感的なものであって、ね、証明のできる数字ではない。なぜ三万人かという数字は、非常に説明しづらい。しかし、わたしは三万人必要だと考えている。

そして、三万人が世界に散ったならば、そのサットヴァのエネルギーによって、ね、例えば核兵器を持つことが無意味であるとか、例えば他の、ね、宗教理論の中に矛盾があるだとかいうことがどんどんどんどん暴露されてこよう。そしてつ

ぶされよう。そして真理は一つになるはずだ、ね。

そうなったらしめたもんだ。みんなが同じ宗教を学んでいるのに、同じ宗教を学んでいる者たちが、核戦争をするわけはない。そうでしょ。つまり、心の寄りどころが一つしかない国同志がだよ、戦争するわけないんだよ。だから、そこまでいけたらなあというふうに、わたしは夢想している。

これは今、わたしにとって幻影だよ。なぜ幻影かというと結果が出ていないから。しかし、可能性はあるなと考えている。それはもう既に、二人の真解脱者が出て、オウムの修行システムも変わりつつある。それは、わたしがそれを読んで、三つのコース、ヨーガタントラ、シッディ・コース、それから、ポア・コースとつくったと。

で、今サマナたちも、その二人の成就者のサットヴァのエネルギーによって、自分たちを理解し出している。自分たちの長所と欠点を理解し出している。そして、性格を改造して、早く解脱しようとし出している。だから、今後の解脱のスピードというものはアップするだろうから、三万人は夢じゃないと考えている。

そうすると、三万人解脱者がいれば、サットヴァのエネルギーも、今の三万倍なんだから、ね。三万倍の光の量になるから、当然真理というものはどんどんどん出てくるだろう、ね。

そうするとどうなるかというと、ね、核を打ち込むようなバカなことはしない。そして、個人的な問題でいうならば、怒ったり、嫉妬したり、妬んだり、ね、あるいは独占したり、こういうバカなことはしなくなる。素晴らしい世の中ができるんじゃないかとわたしは考えているんだよ。それが、わたしの遠大なる計画だね。

◉オウム真理教の解脱システム――「六つの極限」

じゃあ、どのようにしたら解脱できるんだという問題が出てくるね。まず、在家の人たちは今言ったとおり、「布施」の実践から入ると。そして「持戒」の実践から入ると、ね。それができたら、次は「忍辱」の実践に入ると。忍辱の実践とは、例えば人に悪口言われてもじっと耐えるとか、例えば一つのことをし続け

るとか、そういう実践に入っていくと、ね。

で、例えば、その後の「精進」に入った段階でオウムに来たとしよう。オウムに来たならば、わたしがいろんな人に対して、これはやっちゃいけないよ、これをやりなさいよという指令を出す。そうすると、それはあんまり楽しいことじゃないから、ストレスになる。そのストレスに対して戦いが始まる、ね。なぜストレスになるかというと、エゴというものは拡大欲求があるわけだね。先程言ったとおり、あれも欲しいこれも欲しい、怒りたい、愛情も欲しい、ね、気持ちよくなりたい。こういうのがだいたいエゴだ。そうすると、オウムに来てからの修行というものは、それを封じ込められ出す。つまり、内側に向かえという指令が出てくるわけだ、ね。

そうすると、外側に向かうエネルギーと内側に向かうエネルギーが拮抗しているときはいいんだけども、内側に向かうエネルギーが強いときは、その人はもうおかしくなってくる。で、おかしくなった段階で〝個室〟に入れるわけだ。そうすると、外側に向かうことが物理的にできなくなるわけだから、ね、極厳修行と

いうものは、例えば飴が食べたいといっても飴はないし、ね、例えば愛する人に会いたいといっても愛する人はいないし、ね、怒りたいといっても、その対象物はないと。そうなると、どんどんどんどん内側に向かってくるわけだ、ね。

そして最後は、セルフ、つまり真我（しんが）を知ると。それはヴィジュアル的に知った場合、見た場合は「解脱」というし、あるいは、直感的に悟った場合「悟り」という、ね。それがオウムの解脱のシステムだ。そして、その人たちが三万人になったならば、先程も言ったとおり、そのサットヴァのエネルギーによって、地球を照らし出して、煩悩を滅して、ね、戦争をもちろん回避するだけではなくて、みんな仲よくやろうよと、そして、本当の意味での真理の道場を築こうよと、ね。これがわたしの計画です。

一九八七年七月二十六日　東京本部にて

◆第二話　砂漠の中の一粒の砂にも似て……

「修行者の偉大な巧徳」

◉修行者として生まれ変わる確率

今日はまずね、いかにあなた方が功徳が高いかという話をしたいと考えている。

一つの魂が修行者としてね、生まれ変わる確率を仏典ではこういっているね。ここに輪廻の大海があると。この輪廻の大海というものは、まあ宇宙だと考えましょう、ね。そして、そこにいろんな生き物がいて、ね、もがき苦しんでいると。この海を想定しますよ。そして、ある一つの魂がだよ、この世は苦しいから修行でもしてみようかと、一つ心を解放してみたいと考える時期というものは、だいたい三百年から五百年に一回だそうだ。

そして、この三百年から五百年に一回頭をもたげたときにね、そこに真理があるかどうかというのは、ちょうど地球全体の砂の中からだよ、一粒の真理という砂を得るに等しいと。

だから確率としては、まず要求する側が三百年から五百年に一回要求すると。そのときに地球規模の砂漠があってね、その砂漠の一粒の真理という砂を、ね、その三百年に一回登場した段階でだよ、探し出した段階で得る確率に等しいと。

あるいは、二千五百年前の釈迦牟尼はこう言っていらっしゃるね。ここに大きな海があると、ね。そして海底には盲の亀がいる。この盲の亀というのはわたしたち凡夫を指している。そして、その盲の亀が、数百年に一度海上に頭をもたげて呼吸すると。そのときちょうど牛のくびきがね、流れて来てだよ、その亀の頭にポコッとはまる確率と。これがわたしたちの救済される確率だと。

もちろんわかるよね。その亀は何を隠そうわたしたち凡夫だ。そして、海というものは輪廻の大海だ。その海にはたくさんの生き物たちが浮沈している。そして、牛のくびきというのはね、何かというと、真理だ。本当だろうかとあなた方

は考えるかもしれない。

◉人間界以外の欲六界

今からわたしはあなた方にね、修行者として生まれ変わるための条件を一つずつ提示するからよく考えてごらん。まずだ、わたしたちがもし地獄に生まれ変わったならば、そこに真理はあるだろうか。地獄という世界は最も感情の波の激しい、ね、極限の寒さと極限の暑さの世界だ。ここで苦しんでいる者たちは、その苦しみから早く逃れたいということだけを考えている。当然真理を実践する、あるいは真理に目を向ける心のゆとりなどない。そうすると、まずわたしたちは地獄に生まれなかったことを感謝しなければならない。

次に餓鬼はどうだ。餓鬼の世界というものは、貪っても貪っても、ね、満足できない世界だ。当然、心はその飢えや渇き、あるいはいっさいの執着というものに心が縛られている。真理があったとしても、それに目を向けることはしないだろう。だから、わたしたちは次に餓鬼に生まれなかったことを喜びとしなければ

ならない。

じゃあ、次に動物はどうだ。もちろん、ペットはね、例外だけども、ペットではない動物は、絶えず動物連鎖、ね、つまり、いつ強い敵が現われて自分が殺されてしまうかもしれないという恐怖におののかなければならない。周りに気を配ることによって、その生を終わってしまう、ね。そうなると心は真理から閉ざされてしまう。そうでしょう。生きるためだけにその生はある。殺されたくないためだけにその生はあるんだよ、ね。

じゃあ、ペットはどうかと。ペットは確かに動物連鎖から外れてはいるよね。しかし、そこには真の自由はないね。ただ、一時的な食物と、そしてあとは飼い主のエゴしか存在しない。もちろん、ペットを飼わなければならないほど苦しんでいる人は当然真理においても離れているだろうから、このペットが真理の法を聞く機会もない。じゃあ、まずわたしたちは、地獄、餓鬼、動物に生まれ変わらなかったことを感謝しなければならない。

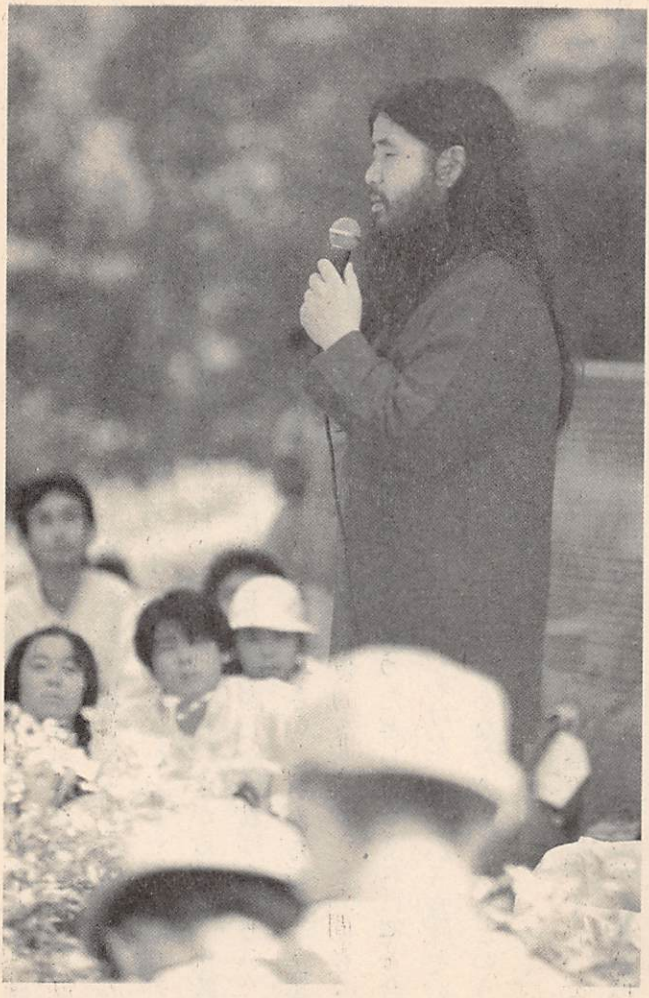
次に阿修羅はどうだと。阿修羅の世界は、絶えず闘争本能から来る努力という

ものに追い回されている、ね。神々を追い越すために、天界の住人を追い越すために、ただひたすら働いている。よって、心は解放されるどころか、真理に向かうどころか、闘争だけに集中しているわけだ。当然、阿修羅の世界に生まれた者もね、心の解放を得るチャンスというものはなかなかない。

もちろん、天界の住人というものは一種の瞑想状態にいるわけだから、ある程度の瞑想状態にいるわけだから、それは気持ちがよかろう。しかし、彼らはその神々という状態に満足しているがために、本当の意味での真理の法というものを、ね、見ようとしなくなる。ま、せいぜい神々が生を受けて生きられる期間というものは数千年だ。もちろん仏典にはね、数百年ということになってるけども、わたしは数千年だと考えている。

◉人間界に生まれた中でも

そうするとだ、わたしたちはまず、この地獄から始まり天界に終わる欲六界の第四位の人間界に生まれたことを感謝しなければならない。しかしだよ、人間界



に生まれたとしても、まず条件としてだ、真理の法というものに巡り合える確率は非常に少ないことになる。例えば、日本においては神道があるね。あるいは、アメリカ、ヨーロッパにおいてはキリスト教がある、ね。こういう供犠を中心にした、しかも単なるお祈りだけの宗教しかない国に生まれたとしたならばだ、わたしたちは本当の意味で心を解放することはできない、ね。だからまず、仏教国に生まれたことを、真理の法の国に生まれたことを感謝しなければならない。

次にだ、もしだよ、真理の法があったとしても、小さいころから殺生、偸盗、邪淫、そして大嘘と酒、これに翻弄されて、心の本質的なありようというものを見ることができなかったならば、目の前に真理があったとしてもそれに巡り合うことはできないし、手に取って味わうことはできないわけだ。そういう意味でいったならば、過去世から偉大な功徳を積んできた、ね、あなた方のカルマというものに、あなた方は感謝しなければならない。

まだまだ条件は、これから出てくるよ。見てごらん。今言っただけでも、これを対等に考えただけでも、ね、もう七分の一だとか、八分の一だとか、九分の一

だとかの確率になる。そうだろう。まず、わたしたちは地獄ではなかったと、餓鬼ではなかったと、動物ではなかったと、阿修羅の世界ではなかったと、天界ではなかったと、ね。

次にだ、そこに真理があることはわかったと、ね。しかし、いろんな社会的条件によって修行のできない人もいる。ところが、あなた方はこうやって法を聴き、そして日常の生活以外に修行することができるという、ね、時間、偉大なる宝物である時間を持っているわけだ、あなた方は。考えてごらんなさい。これほど偉大な功徳があるか。

まだあるぞ。国によっては、確かに真理の法、書物はあるかもしれない。古典的な仏教、あるいは古典的なヨーガという、ね、真理の法はあるかもしれない。しかし、その真理を本当に理解し、あなた方に教える、ね、教師だ、グルだ、これに巡り合う確率を今度は考えてごらんなさい。そうしたら、あなた方は今ここに集い、実践していることが、いかにね、素晴らしいことであるか、そして偉大であるか理解できるはずだ。

◉数千年に一度の真理との巡り合い

ヨーガの経典や仏典にはね、こう載っている。一国の王になるよりも、修行者として生まれ変わる方が難しいと。わたしはね、それはまさにそのとおりだと考える。例えば動物の世界にも王はいる、ボスはいる。辺境の地、ね、仏教やあるいはヨーガや真理というものの到達していない辺境の地でも、王になることはできる。

しかしだ、わたしたちが真に自由、真に幸福、真に心の解放というものをね、得るためには、まず真理の教えというものが必要である。そして、それを実践している団体が必要であると。それを率いているグルが必要であると、ね。それに会う確率とだ、王様になる確率を考えてごらんなさい。

今まで、いろいろな、ね、仏陀、あるいは成就者、あるいは阿羅漢が現われた。そして、一群を率い、ね、この地球というものを救済しようとした。その仏陀、阿羅漢、あるいは成就者の数とだ、いろんな国における王様の数を比較してごらん。当然前者の方が少ないし、それに、その真理に追随し、成就していった人の

数を比較してごらん。いかに希有な、いかに稀なチャンスによって、あなた方が真理というものに、今ね、巡り合っているか、よくわかるはずだ。そして、真理というものは、ひとたび離してしまうと、また、ね、あなた方の心に曇りが生じ、数百年に一度というね、機会を通じてしか、あなた方の心の本然というものは真理を求めようとしなくなるんだ。

「じゃあ、この数百年に一度とは何からきているんだ」と、「どこから出しているんだ麻原」と考えるかもしれない。

ま、これは数千年に一度という考え方をわたしは提唱してもいいわけだけども、それは神々の心の状態からきているんだ。わたしたちが最も徳を積み上げたとき、それを現世的に還元したときに、わたしたちはデーヴァとして生まれ変わる。天界の住人として生まれ変わる。そして、偉大な功徳はわたしたちに長寿を与える。それは数百年、あるいは数千年という長寿を与える。しかし、その長寿は、功徳が消えた段階で、やはり死という結果を招くわけだ。それはこの人間界と同じだ。

そして、神々は死ぬ直前になって初めて後悔する。わたしは今までいったい、

ね、楽しみの世界にあったと。しかし、わたしは死というものから逃れることはできなかったと。この心の状態が凡夫にとって、一般の人にとって最高の状態なんだ。もちろん、地獄や餓鬼や動物に生まれ変わる魂というのは苦しいから、それから逃れようとする。当然、真理に巡り合うチャンスは多いかもしれないね。

あなた方はこういう疑問にね、ぶつかったことがあるかもしれない。例えば入会案内を勧めていて、「あの人はすごくいい人なのに、このオウムの真理がわからないんだ」ね。それは、今日の説法でわかっただろ。つまり、そういう方々は必ず天界へ生まれ変わる。そして一種の、その人たちは瞑想状態にあるわけだ、徳による。だから、その人たちを真理に導き入れることは、なかなか難しい。

◉最高の薬——真理の法

話を元に戻そう。だから、わたしたちはこれだけの悪条件を乗り切って、今ここに修行するチャンス、最終的な真理に到達するチャンスに巡り合えたわけだから、わたしたちの生き方には一つの道筋しかないわけだ。それは、何だ。真理の

実践だ。そして、真理から離れないように、真理を手放さないように努力するしかないんだ。

今日のこの話を聴いている人の中で、ピンとこない人もいるかもしれない。それはこう考えなさい。わたしたちは猛毒に侵された患者であると。なぜ猛毒に侵された患者と言い切れるんだ。それはこの粗雑次元の人間の世界の中で、わたしたちは喜びと苦しみを味わっている。その喜びの本質というものが、幻影ということに気づかず、わたしたちはその喜びにうつつを抜かしているわけだ。

じゃあ、なぜそれは幻影なんだと。それは前提条件に無常というものがあるからだ。無常というのは、情けがないという意味じゃないね。常ではないということだ。必ず変化するということだ。

例えばここに、ね、素晴らしいカップルがあったと。その男性と女性は愛し合っていたと。しかしだよ、この二人が深く結ばれれば結ばれるほど、情によって結ばれれば結ばれるほど、一方が亡くなったときの苦しみは膨大だろう、ね。あるいは、今まで豊かな生活をしていたと、何の不自由なく、金は使いたいとき使え

る状態にあったと。しかし、必ずその状態というものは崩れるわけだ。あるいは、死ぬときに持っていけないわけだね。そのときの苦痛というものは異常であると。

ところが、わたしたちは本来それに気づいているはずなのに、心が病に冒されているためにだよ、わたしたちはその実際の状態というものをありのままに見ることができないわけだ。そして、わたしたちは病に冒された病人であると気づいたとき、そこから本当の意味での修行が始まるんだね。

じゃあ、真理の法というのはいったい何だと。真理の法というものは何だと。これは、妙薬だ、秘薬だ、最高の薬だ。そしてグルはね、最高の名医ということになる。

例えばだよ、一つここで考えなければならないことがある。どんなに偉大な医者がいたとしても、どんなに素晴らしい薬があったとしてもだよ、例えば患者がその薬を飲まなかったらどうなるか、ね。当然、病は治らないということになる、ね。あるいは、その薬を飲んだとしても、名医が与える他の注意を守らなかったらどうなるか。つまり、単に一部分に取り入れた場合だ。それは病の治りが遅く

なる。あるいは治らないかもしれない。

ここで大切になってくることは、その名医に対する信だ。だから、修行の根本は信であるといっているわけだね。例えば、真理に対する信、グルに対する信、ね、そしてグルのお手伝いをしている人たちに対する信だね。これを言い換えると、仏陀とそれからサンガとね、それから法、ダルマね、真理に対する帰依、信、これを最も大切な要因としている理由がここにあるわけだ。

もう一度繰り返すよ。わたしたちの心は病んでいる。いや、病んでいないと考えるかもしれない。しかし、それは真実の世界から見たら、明らかに一つの偏見なんだね。それで、その病んでいることを謙虚に受け止め、それを克服し、ね、このいっさいの世界を真実の眼差しで見ようではないか。

はい、では今日の説法を一応これで終わります。

一九八八年一月十六日　大阪支部にて

◆第三話　こんなにも少ない、真理に巡り合う確率

「最高のチャンスを生かせ」

◉修行者の徳の高さ

今日はね、皆さんがいかに徳の優れた方であるかという話をしたいと考えている。こういうと「狂気の集中修行」に出られた方はね、また麻原が冗談を言っていると考えられるかもしれないけども。実は、今日の話というのはね、修行者が、いったいどれぐらいの確率で修行できるかという話なんです。どういう条件を備えたら修行できるかと、どういう条件を備えたら高い世界へ上がれるかという話を今日はしたいと考えています。

まず、仏典ではこういっているね。ここに輪廻の大海があると、ね。この輪廻

の大海に、盲の亀が一匹住んでいた。その盲の亀は、三百年から五百年に一度、呼吸をするために海上に出て、外の空気を吸うわけだ。そして、その輪廻の大海に牛のくびき――くびきといって、要するに牛の首にね、輪っかをつけるわけだけど――そのくびきが、何の条件もなく漂っていたと。で、三百年から五百年に一度、海上に頭をもたげた亀の頭と、そのくびきがぴたっと一致する、この条件が解脱の条件だと。これは釈迦牟尼の話だね。

じゃあだ、その盲の亀って何だというと、わたしたちの魂が、真理に対して、あるいは解脱に対してね、欲求するバイオリズムみたいなものだ。だから、わたしたちは今生でのチャンスを逃すと、また三百年から五百年ぐらい先に、やっと修行でもしてみようかという気持ちになると。

じゃあ、その海というのはいったい何だというとね、これは、六道の輪廻に苦しんでいる生き物たちの世界だというふうに考えたらよろしい。また、大宇宙だと考えてもいいね。そして、くびきというのは何だと、ね。これは真理だ。だから、たとえ三百年、あるいは五百年に一度ね、真理を実践してみたいと、心の解

放を達成したいと考えたとしてもだよ、そこに牛のくびきがなかったならば、わたしたちは真理に巡り合い、実践することはできないわけだ。そうすると、真理に巡り合うチャンスなんてものはね、無限大分の一ぐらいの確率しかないわけだね。

◉三悪趣——心の解放とは無縁の世界

また、別の条件の解析をしているよね。それは何だと。まず、わたしたちが感情の波に翻弄されたならば——怒り、ね、殺生、こういう感情の波だ。殺すということは悪感情から出てくるからね——翻弄されたならば、必ず地獄へ落ちようと、ね。そして地獄の世界というものは、熱さと寒さの世界、あるいは苦痛の世界です。この苦痛から逃れたいと思っている心というものは、当然、真理を実践したいなんていうことは考えないわけだね。そうなると、地獄の住人に生まれた人にとって、心の解放はあり得ないということになる。つまり心の解放ということは、絶対に自由であると、絶対に幸福であると、絶対に歓喜であるということ

はあり得ないということになるわけだ、ね。

次に、自己の欲求するがままに生き、ね、煩悩の世界に没入している、貪っても貪っても飽き足らない世界に没入している魂――つまり、これは餓鬼だね――餓鬼の世界に安住している魂は、おのれの欲求する事柄に心が束縛されている、縛られているわけだ。だから、当然、その貪りから解放されない限り、真理の実践というのはあり得ないわけだ。

そして、動物はどうだと。ペットは例外にして、ね、動物の心というものは、絶えず自然連鎖、ね、生物連鎖の恐怖におののいているわけだ。それは、この地上というものは、どんな生き物においても、天敵というものがある、ね。いつ、強いものに殺されるんではないかと、あるいは、あした食べる食物はあるかということに心は翻弄されているわけだ。そうすると、どうだ。その恐怖におののき、脅え、心をブロックしている魂はね、心の解放を願うチャンスに恵まれないわけなんだね。そうでしょ。生きるということ、生き続けるということだけに心を縛られているわけだから。

じゃ、ペットはどうだと、ね。ペットもこれは同じだね。動物連鎖はないけども、与えられた条件で、食物、水と、あと単にかわいがられるという、一種のデーヴァの環境に近いんだね、神々の環境に。しかしだよ、ペットには他の動物と違って、少しの時間的ゆとりというものがあるわけだね。もちろん、真理を実践している人がペットを飼うわけがないから、よこしまなデータしか入れられないだろう、そこで。そうなると、ペットにおいても、心の解放はあり得ないということになる。

◉阿修羅・天界——闘争・満足の世界

じゃあ、阿修羅はどうだと。まあその前に人間について話さなければならないわけだけども、あなた方は一応人間界に生まれ、今真理というものを、目の当たりにし、それを得、実践しようとしている。この人間界は、簡単に説明すると、人間界におけるしがらみだけに引っかかっている人は、やはり先程の条件と同じで、心は、その情に縛られている。心の解放はあり得ないということになる。そ

れはあなた方が経験していることだから、ここで改めて言う必要もなかろう。

じゃあ阿修羅はどうだ。阿修羅の心というものは向上心なんだよ。まあ他の宗教ではね、向上心というものは最高の美徳であるといっている。確かに、今生を生き抜くためのパートとしては、ね、必要なことかもしれない。しかし、向上心の背景にある嫉妬心、あるいは闘争心というものが、阿修羅の本質です。阿修羅は絶えず、天界にいる神々と、ね、争っているからね。

じゃあ、この阿修羅の心というものは、自分より目上をいかに蹴落とそうと、目上をいかに越そうかということしかないわけだね、心が。そうすると、その闘争心に心は縛りつけられてるわけだから、当然、心の本質である純粋な智性、あるいは先程言った三つの条件だね、絶対幸福・絶対自由・絶対歓喜という世界に没入することはできないだろう。

じゃあ、最後に来る、ね、六道の最後に来る天界はどうだと。天界の神々はどうだと。これは仏典ではね、数百年の生があるといわれているわけだけども、わたしは数百年から数千年あると考えています。彼らは、一様に、ね、ある程度の

瞑想状態に入っている。そして、「ああ幸せだ、幸せだ」と思っている。そこでは、ある程度の楽というものが享受されている、ね。それゆえに、本当の意味での心の解放から取り残されていくわけだね。

そうすると、まずだ、わたしたちがこの人間として生を受け、真理というものに巡り合い、実践しているということを、ね、大変な喜びとしなければならない。

◉真理を実践できる確率は?

はい、次は条件設定を人間の世界に戻そう、ね。もしだ、わたしたちが、まだ真理の伝播していない、文化程度の低い辺境の地に再生していると考えてごらん。そこには真理はないよね。そして、親や、あるいは政府は、殺生することを奨励するだろう。これは、真理というものは文化の程度の高いところにしか降りないし、発展しないわけだから、そうするとだ、わたしたちは、そういう文化程度の低い、辺境の地に生まれなかったことを大変な喜びとしなければならない。

例えばだよ、火を拝み、殺生した供物を捧げるといった類いの宗教が結構ある。

だから、あなた方がそういう正しくない宗教に巡り合わなかったことに感謝をしなければならない。

もちろん、そういう宗教でもだよ、それを担当している神々がいて、あなた方を一時的には幸福にしてくれるかもしれない。しかしそれは、あなた方の欲望を一時的に満足させてくれるものであって、あなた方の本質的な、心を解放させてくれるものではないんだ、ね。

次に、たとえここに真理があったとしてもだよ、いろんな社会的制約によって、いろんな家族の関係によって、真理を実践できないという人もいる、ね。例えば、周りが他の宗教に属していて、自分が真理を実践しようとすると排撃されると。見てごらんなさい。これだけの条件がまず必要だ。

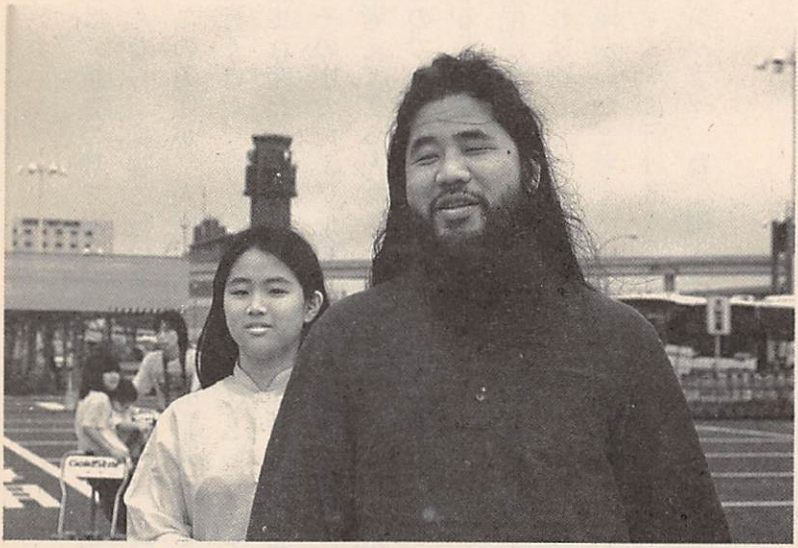
次にだ、真理に巡り合うことはできたんだが、その法を展開している人――ここでいう真理というのは、一応正しい経典ということにしておこうね。正しい教えということにしておこう。つまり、仏教でいうところの法だ――もし、ここに正しい経典があったとしても、それをきちんと理解していないグルについたなら

ば、これは最悪だ、ね。日本にはたくさんの仏教がある。まあ、この中で一番次元が高いのは真言密教だとわたしは考えている。しかし、その真言密教ですら、釈迦牟尼の教えを正確に理解はしていない。これは、わたしの弟子の中には、真言宗の僧侶もいるからね、何名も。

そうすると、単に、わたしは仏教に帰依していますよといっている人たちの中でだ、真に、真理を体現したグルにつきだ、その団体に所属しだ、そして、真理を実践できるという喜びの確率を考えてごらんなさい。気の遠くなるような、ね、低い数字になるね。

◉徳の高さを胸に、真理の実践を

はい、次は六道の話にちょっと戻すよ。わたしはよく、六道を砂漠でたとえるけども、仏典ではこういう表現も使っているね。今空気が汚いから、なかなか夜空の星というものを見ることができないけども、まあ九州辺りだったら大丈夫だろう。夜空にまたたく星、ね、見える星を、地獄の住人の数だと考えたならば、



昼間に見える星の数は、餓鬼の数であると。同じように、餓鬼の数を、夜空にまたたく星の数と考えたなら、動物の数はね、昼間にまたたく数であると。昼間に見える数であると。この条件が、人間、あるいは阿修羅、あるいは天界といくわけだね。上に行けば行くほど、だから確率が少ないということになる。

しかし、天界に生まれ変わったとしても、わたしたちは、六道を輪廻しなければならない。だからその中のだよ、地獄を避け、餓鬼を避け、動物を避け、人間界に生まれる確率を考えてごらんなさい。そして、たくさんの宗教のある中で、真理に巡り合うことのできる確率を考えてごらんなさい、ね。あなた方が、いかに徳の優れた人であるか、理解できよう。

仏典では、釈迦牟尼が登場した時代、五百人の阿羅漢が誕生したといっている。しかし、わたしはそれは正しくないと考えている。もう少し数字は多かったと、二千人ぐらいの阿羅漢がいたと考えているね。阿羅漢というのは三明六通を持った神通力者、ニルヴァーナに行ける人だ。そしてその後、例えばティローパ、ね、例えば大聖パドマサンバヴァ、ね、例えばゴーラクシャ・ナータといったような

成就者の数とだ、それから、世界にいろいろ展開した世界史の中での王の数とを比較してごらん。いかに成就することが、あるいは悟りを開くことが、阿羅漢になることが、偉大なことであるかがわかるだろう。

だから、あなた方は、そのチャンスに恵まれている魂の持ち主であるあなた方は、わたしはね、偉大な功徳の持ち主であると言っている。そして、今のチャンスを逃したならば、次にいつまた真理に会えるかわからないよね。

はい、今日はね、一応、あなた方がいかに功徳のね、大きな功徳の持ち主であるかという話をしました。そして、それを心に踏まえて、真理の実践に励んでください。

一九八八年一月十七　日福岡支部にて

◆第四話　楽しみの裏側を直視して

「四つの食――外的な喜びを捨てよ」

◇八十九年一月二十五日

◉四つの外的な喜び

今日はね、『阿含経典』から一つの引用、そして、それに対する、まあ、解釈をね、しようと考えています。これは、特に修行者に必要な考え方だから、よく理解するようにしなさい。

まず、わたしたちの欲望を満足させてくれる、四つのものがあると。それは何かというと、一つは、ね、色における喜びであると。これは、例えば物を食べたり飲んだりする喜びだと。これはいいね。

それから、もう一つは接触における喜び。これは異性とのセックス、ね、あるいは母親が子供を愛撫する、こういうものすべてが接触による喜びであると。これもOKだね。

そして、意志を達成するとき、欲望を満足させるときの喜び。これもOKだね。

そして、もう一つはデータとしての喜び、意識としての喜び。これはどうだ。例えばこういう状況で楽しみたいとかいうときの状況。こういうふうになったならば、これは恋愛であるとか、こういうふうになったならば、これは恋人であるとか、すべてデータだね。これはどうだ。ちょっと今日の説法は難しいからね。もし、そのデータがなかったならば、それを恋人とはいわないだろう。どうだ。

◉荒野の旅――食欲の本質

そして、わたしたちは、飲んだり食べたりすることによって喜びを感ずると。それゆえに苦しみが生じるというのはわかるか。そして、飲んだり食べたりすることが、わたしたちの、ね、本当の意味での意志の力によってなされてないとい

うことは、君たちはわかるか。

「いや、そんなことはない」と、「おなかすいたから食ってるんだ」と、「食えばうまいんだ」と。どうだ、これは。

まず、釈迦牟尼はこういう表現をしていらっしゃる。ここにね、すごく子供をかわいがっている父母がいて、そして、そこには子供が一人いると。その子供を連れて、ね、荒野を歩かなければならないと、ね。そして、目的地に着かなければならないと、ね。そして、目的地に向かって歩いたと。そして、食糧はある程度持っていってたんだけども、それを少しずつ食べていって、食べ物がなくなったと、ね。そして、そこで父母は考えたと、ね。「わたしたちはこの荒野を越えて、目的地に達しなければならない」と。そのためにはどうすると思うか。どうだ。三人のたれ死にするか。どうだ。どういう心の状態になると思うか。

そして、その当時のインドでは子供を殺して食うわけだ。もちろん、現代でもわたしはそうするだろうと思う。なぜならば、いざとなったらね、間引きを行なったぐらいだからね。堕胎だってそうだろう。都合が悪いから殺すと。これが人間

の本性だ。しかし、殺したいから殺しているわけか。どうだそれは。条件が合わないから殺しているんだよね。未来において苦があるから。しかし、生かしたいと考えてるわけだよね。どうだ。

同じように、子供に対して、その両親はそう思いつつも、わたしたちはこの荒野の旅を完成しなければならないと、行き着かなければならないと。そして、その自分のかわいがっていた子供を殺して、ね、焼いて食ったと、ね。

まあ、経典ではここからこうなっている。「いったいわたしたちの子供はどこへ行ったんだろうか」と。しかし実際は、それは増谷さんの多分間違った見解、あるいは仏典の間違った見解であって、実際にはこうだ。

「なぜ、わたしたちは子供を食わなければならないんだ」と。「なぜ、空腹というものがあるんだ」と。「なぜ、食べなければ生きていけないんだ」と。どうだこれは。これが食欲の本質だ。どうだ。君たちはこれに対してどう考えるか。

◉色のカルマの消滅——苦楽を超える

食欲というものは、例えば自己が欲求したものを食べるとき、喜びを与えてくれるよね。それはどうだ。しかし、そのように、例えば自分たちが食べられないとき、それを得られないとき、そしてそれを食べない限り生きていけないとき、それはどうしても食べるだろう。しかし、そのときどうだ、苦が生じないか。どうだ。

ね、今君たちの返事を見ていると、おなかがすいたとき、食べたいとき食べると、喜びが生じるよねと。「はい」と、たくさん返事すると。で、苦が生じるでしょと。沈黙と。これは君たちが偏ったね、ものの見方をしている証拠なんだね。で、どうだ君たちは。これを、食欲と知り、これを色を貪ることと知るならば、それから、それは本質的には自己を苦しめるものなんだと厭い離れることができるよね。どうだこれは。

そして現に、こういう例があるだろう。アフリカで物を食べられないで——まあ、難民救済のために食糧が送られてくるけども、ね、結局大人の食べる分はな

いと、ね。あるいは、自分の子供が食べる分はないと。そして、子供はやつれて自分の見ている前で死んでいくと。あるいは、昨日までニコニコしていた、じっと耐えていた人が、ね、同じように死んでいくと。食べられないで。

もしわたしたちが、色におけるカルマというものを切ったならば——色というのはわかるね。物質におけるカルマというものを切ったならば——この苦しみが生じると思うか。どうだ。生じないということは、わたしたちは苦楽を越えたということになるな。それを理解することのできる弟子は、真の聖なる弟子だということができる、ね。

◉接触と食の喜び——その裏にあるもの

では次にだ——はい、今日は仏典から引用するからね——ここに一頭の牛がいたと。その牛の皮はむけてただれているとしようね。そして、ね、かなりの部分がただれているとしよう。

はい。この牛がだよ、例えば虚空に浮いていたとして、虚空のウイルス、細菌

はそれを食らうと思うか、食らわないと思うか。どうだ。食らって当然化膿するよね。わかるね、これは。どうだ。

じゃあ、陸で生活したらどうだ。当然同じように食らうよね。わかるね、言っていることは。

じゃあ、木にもたれたらどうだ。そのただれている部分を、皮がむけてただれている部分を木にくっつけたらどうなるか。木にいるウイルス、細菌が当然食らうよね。あるいは虫が食らうよね。どうだこれは。

じゃあ、川の中はどうだ。水にいる細菌、ウイルス、あるいは虫が食らうよね。どうだ。

どこにいたって食らわれるよね。じゃあ、なぜ牛はこれだけ苦しまなければならないのかと。

接触の喜びは、例えばセックスの喜びは、例えば抱擁される喜びは、ね、わかるかな、みんな。この抱擁される喜び、あるいはセックスの喜び、これと、それからもう一つ、外的接触によって苦しむということは、どうだ、表裏一体か。そ

して、聖なる弟子は、ね、楽の裏には苦があるんだということを理解できるわけだ。

じゃあだ、現代に当てはめてみて、この接触の苦しみには何があると思うか。まず、淋病、梅毒、エイズと。どうだこれは。あるいは、毛じらみ。どうだ。すべて、接触によって生じるよね。どうだ。

しかし、ね、凡夫は何を見つめるか、そして何を見つめないか。そうだ、楽しみだけを見つめ、苦しみを見つめない。

先程も言ったとおり、例えば牛のたとえ、あるいは子供のたとえにもあるように、わたしたちが煩悩（ぼんのう）に支配されている限り、どうだ、喜びも強い。しかし、苦しみも強い。これを理解しなければならない。

これはね、波を考えなさいと。低い波の、平面からの距離が長ければ長いほど、高い波は、どうだ。当然高いだろ、長いだろ、平面から見て。どうだこれは。それが波の特徴だよね。どうだ。

そしてこの低い部分、これはわたしたちの苦しみを表わしていると。高い部分、

これはわたしたちの喜びを表わしていると。よって、ね、偉大なる聖者釈迦牟尼はわたしたちの心を平らにしなさいと、心を清透にしなさいと言っていらっしゃるわけだ。いいですか。ね。

次回は、意志の喜びね、それから意識の喜びについて話します。

今日わたしが話したことをよく繰り返し、ね、頭の中に入れてみなさい。そして、この瞑想というのは、君たちが望んでいるマハー・ムドラー、あるいはジュニアーナ・ヨーガの瞑想の基礎であり、応用であると。いいね。そして、少なくともわたしの弟子は、ね、ラージャ・ヨーガ、クンダリニー・ヨーガ、ジュニアーナ・ヨーガ、あるいはマハー・ムドラーを成就しなければならないわけだから、そういうことに心を集中するようにしなさい。いいね。

◇八九年一月二十七日

◉断ち切られた望み——意志を阻まれたときの苦

前回は、わたしたちのね、食欲について、そして、接触についての話だったと思うんだけども、これは記憶しているね、みんな。どうだ。

今日はね、欲求、ね、まあ『阿含経典』では意志というふうに訳されているけども、わたしはこれを欲求と考えているね。欲求、そして次にコーザルのデータ、意識についての話に移っていきたいと思う。

どうだ。例えば、君たちみたいに、まだ人生の半ばにして、わたしはこういう生き方を行なうぞと、ね。こういう人と結婚して、あるいはこういう家庭生活を営んで、ね、あるいはこういう仕事をして、あるいはこのように名誉を得て、ね、まだ今から人生は、ね、どんどんどんどん開拓できると、そう考えている人がここにいたとして、ね、その人が、例えばだよ、何かのぬれぎぬによって、あるいは真実の罪によって死刑を宣告され、そして死刑台に赴くときの気持ち、これを考えてみよう。

仏典ではこうなっている。わたしは、未来においてお金をたくさん得て、あるいは美しい妻、あるいは夫と結婚をして、快楽を貪り云々と意識をしているね、ここに一人の凡夫がいたと。その凡夫が、ね、――いいかな、ここは大切なとこだよ、無理やり両腕をつかまれて、ね、穴の中に赤く焼けた炭が入っていると、ね、その炭の入っている穴の所に連れていかれて、そして放り込まれるときの心の状態を考えてみようか。どうだ。

「ああ、わたしの人生はこれで終わった」と。「わたしは、このような生き方をしたいと思わなかったのに、わたしの意志に反して苦しみを受けなければならない」と。そこで生じる苦というのは、肉体的な苦だけではなくて、もう一つどうだ、自己の意志を、ね、自己の意志どおりに生きることのできなかった苦しみが待っているよね。

◉欲求の正しい理解――ヒナヤーナの成就

サマナの生活はどうだ。ね、こうやってサマナをやめていった人がいると。

「何でわたしはこんなところにいるんだ」と、ね。「わたしは、もっと楽しい人生がある」と、ね。しかしだよ、今わたしたちは、わたしたちの意志によって生きていると感じているけども、実際はそうじゃないよね。わかるよね、それは。意志どおりにならないことはたくさんあるでしょ。

例えば、もっと生きたいと思いながら死んでいくときの心の働きはどうだ。例えば、あの人とおつきあいしたいのにと思いながら、おつきあいできないときの心の働きはどうだ。あるいは、お金をもうけたいのに、お金をもうけることができなくて苦しみを味わっているときの心の状態を考えたらどうだ。あるいは、プライドを満足させたいのに、それをつぶされるときの心の働きを考えたらどうだ。どうですか。

よって、わたしたちは、意志の本質というものを知らなければならない、ね。欲求の本質というものを知らなければならない。

はい、欲求の本質とは。達成されたとき、あるいは意のままに生きるとき、それは喜びであると。しかし、もしその意志、あるいは欲望というものが、あるい

は欲求というものが、満足できなかったときはどうなる、それは。苦しみとなるよね。

そして、この欲求の方向性には三つあるね。まず、欲に対する欲求。そして、ね、美しいものに対する欲求。そして、生命に対する欲求と、ね。そしてこの欲求の方向、三つの方向に対して正しく理解し、それを嫌がって離れることができる者は、ヒナヤーナで成就することができると、ね。

みんなはね、よくこう考えるかもしれない。俺は大乗だと。俺はタントラだと。ヒナヤーナなんていうのは、小乗なんていうのはくそっくらえだと。しかし、君たちが考えているほど、ね、真理の道というのは、仏陀の道というのは甘くないと。本当の意味での大乗が始まるのはいつからだったかな。マハー・ムドラーを成就してからだ、ね。

◉意志——ひたすら集中し続ける

だから、まずあなた方が達成しなければならないのは、ね、食に対して、ある

いは接触に対して、あるいは欲求に対してね、理解することが必要なんだと。そして、その理解をするならば、例えばワークに対して好き嫌いを言う人もいるけどもね、それが実際は正しいことではないと。自己の欲求ではなくて、ただひたすら集中し続けると、ね。

なぜわたしが意志という言葉を欲求という言葉に置き換えたかというと、わたしのいう意志というのは、ただひたすら集中し続ける心の働き、これを意志といっているからね。ま、仏教ではこれを念といっているわけだけども、意志といっているから、ここでは意志という言葉を使うよ。ただひたすらね、集中をし続けると。そういう心の働きをね、訓練すると、ね。

それは、例えばグルに対して意志をし続けると。あるいは、シヴァ神に対して意志をし続けると。あるいは、真理に対して意志をし続けると。このようになすことのできる人がいたならば、ね、その人は必ずや解脱すると、ね。

だから、意識する対象、それからもう一つは、意識する意味合いというものを理解して、もし先程言ったとおり意志の実践を続けるならば、それだけでもかな

りのステージが約束されると。

◉識の苦悩――苦しみのデータの発現

そして、釈迦牟尼は第四のマーヤ、食、喜び、これを識――これは色、受、想、行、識の識だね――コーザルのデータだといっていらっしゃると。これは、釈迦牟尼はこういう形で表現していらっしゃると。

ここにある悪党がいて、ね、その悪党が捕まったわけだ。そして、それが王様のもとに連れていかれて、

「こやつをどうしましょうか」と、ね。

そしたら、王様は――これ、ちょうど朝方なんだけどもね、

「百鉾（ひゃくほこ）の刑にしなさい」と。

つまり百回鉾で突くわけだね。で、昼になって、ね、その百鉾の刑をなす者が、ちょうど王様のそばに来たときに、王様は、

「あやつはまだ生きているか」と。

「生きています」と。
「よし、わかった。昼間にまた百鉾の刑を加えろ」と。
そして同じように、
「夕方にも百鉾の刑を加えろ」と。
　このとき味わう苦痛というものはどうだ。大変なものだと思うか、大変じゃないと思うか。つまり、日に三百回、鉾で突かれたらどうだ。確かにわたしたちは、わたしたちの心の中に、喜びというデータを持っているよね。どうかな、これは。しかし、わたしたちは苦しみというデータも持っているよね。どうかな。そして、わたしたちは苦しみというデータのもとに苦しんでいるよね。どうだ。
　そして、そのデータは、今そのデータが発現しようとしまいと、どうなる。いずれは、発現するよね。どうだ。そして、その苦しみのデータが発現したとき、わたしたちは苦悩を味わうよね。どうですか、これは。いいかな。そうすると、わたしたちが、本当の意味で苦から解放されるためには、その苦悩のデータをどうしたらいいかな。どうですか。消滅したらよろしいと。

◉高いステージ——心の働きの静止

そのためには、二つの方法がありますよと。一つは、前もって過去世からの苦悩をすべて消してしまうと。消してしまうということは、経験してしまうと。それは、瞑想によって、あるいはこの現象界によって経験してしまう方法がありますよと。それからもう一つは、そのデータの起き上がってこないように、苦楽から離れる方法がありますよと、ね。

これは、みんなは経験したことがあると思う。それは、喜びの感情の多い人は、悲しみの感情も多いと。つまりオーバーなんだね、アクションが。そして当然、苦しみの感情は多いよね。それはちょうど、ここに湖面があって、ね、この湖面が大きく波打っている状態だ、ね。

しかし、高いステージに上がっていくと、徐々に心の働きというものは、静止してくるよね。どうだ。そうすると、心の働きが静止すると、現象的には苦だと見えていても、実際はそれほど苦じゃないと、ね。どうですか、これは。

だとしたら、例えば最も苦しい状態のとき、心が平静でいられなければならな

いと。最も楽しいとき、心が平静でいられなければならないと。わかるね、これは。その訓練をしていくこと、つまり、苦楽から離れることがサマナである君たちの第一条件であると、ね。いいですか。

ということは、サマナが一見苦しそうに見えるワーク、あるいは自分の欲望というものを満足させられない環境というのは、どうだこれは、素晴らしい環境だと思うか、それとも大変損失の多い環境だと思うか。どうだ。

なぜ素晴らしい環境か。それは、一日中意志し続けることができると。でしょ。そして、心を平らにしていって、苦楽から離れることができると。そして、苦楽から離れたならば、どうなるかな。その人の見ている目というものは、純粋になるか、ならないか。少しずつ少しずつ純粋になっていくよね。いいですか。

◉最高の智慧者の目的――カルマの消滅

はい。これで一つの講話を終わるけども、大切なことは何かというと、わたしたちは四つの食に支配されていると、ね、四つの外的な喜びに支配されていると。

それは何かというと、第一は、飲食による、固形物・液体による喜びであると、ね。第二は、接触による喜びであると。第三は、欲求を満足する喜びであると。あるいは、満足するだけではなくて、欲求を持つ、つまり、わたしにはこんなに素晴らしい未来があるんだと欲求を持つ喜びであると。いいかな。ただこの、釈迦牟尼は、そしてわたしも、この欲求を持つ喜びすら苦の原因だといっているよね。そして、第四は、意識に存在している、データの中に存在している喜び、ね。この四つの外的喜びがあると、ね。いいですか、ここまでは。

そして、この喜びの背景には、どうだ、苦しみもあるということを考えなければならない。いいね、これは。

そして、もう一つ大切なこと。それは、この固形、あるいは液体の食物、あるいは接触、あるいは欲求、あるいはデータ、意識というものは、わたしたちの本来のものではないと。いいかな。これはカルマによって生起するものであると。わかるね、言っていることは。

その理由は、例えばわたしたちはわたしの意志によって、立位礼拝を始めたと

しようと。しかし、Aという人は三日でつらくなると。Bという人は一時間でつらくなると。Cという人は楽しいと。なぜだと。わかるよね、言っていることは。その条件とは何かといったらこれはカルマだ。いいですか。

そして、わたしたちがカルマを超越すること、それは、何だ。解脱。わたしたちがカルマを消滅すること、それはわたしたちにとって大きな恩恵があるよね。そのために人生を懸けることは、最高の喜びであると。最高の智慧者の目的であると、ね。なぜ最高の智慧者といえるか。それはこの一生だけの利益ではないからだ。いいね。

一九八九年一月二十五日・二十七日　富士山総本部にて

◆第五話　他の苦しみを自己の苦しみとせよ

「利他の心がもたらす幸福」

◉大乗の発願――四無量心をベースに

まずね、オウムのベースはマハーヤーナ、大乗です。そのためにここに集っている方が、今生あるいは未来生において真の救済者、あるいは大乗の仏陀になられるために、初めに「大乗の発願」を十三回、そして、大乗仏陀イニシエーションの中の「苦の詞章」を十三章唱えることにしましょう。

大乗の発願を知らない方もたくさんいらっしゃるだろうから、まずわたしが音頭を取りますので、一緒に唱えてください。

「ホー、湖面に映る虚像のような

様々な幻影に引きずられ
輪廻の大海を浮沈する生き物たち
彼らすべてが絶対自由・絶対幸福なるマハーヤーナにて
安住することができるよう
四無量心（しむりょうしん）込めて
大乗の発願をいたします」

これはね、「ホー」というのは呼びかけ。ホーリーな、神聖なヴァイブレーションなんだね、これは。「湖面に映る虚像のような……」というのは、湖の滑らかな面に、透明な面に映る影のような、様々な幻影によって、わたしたち、あるいはわたしたちの周りの人は苦しんでいる。その苦しみから解放されるのは、ラージャ・ヨーガ、クンダリニー・ヨーガ、ジュニアーナ・ヨーガ、あるいはラージャ・ヨーガ、クンダリニー・ヨーガ、マハー・ムドラーという三つのヨーガを終わって、マハーヤーナのヨーガ、大乗のヨーガに入ったときである。そのとき、わたしたちは本当の意味で、他の苦しみに対してそれを取り除いてあげられるように

なっている。

そして、すべての人が、そのステージに到達できますようにと、平等心、相手を慈しむこと、そして相手の苦しみを、あるいは相手の悲しみを一緒に感じてあげて相手の苦しみを半減させること、そして相手のすべての善行に対して誉め称えるという、四つの素晴らしい、最高の心というものを供養する。そして、大乗の発願をすることによって、すべての人たちが絶対的な自由・幸福・歓喜という、マハーヤーナに入れますようにというのが今の詞章の意味合いです。

◉大乗仏陀イニシエーション——すべての苦を内在するために

そしてね、もう一つ、これはオウムのサマナに唱和が義務づけられている「苦の詞章」というのがある。これは何かというとね、「自己の苦しみを喜びとし、他の苦しみを自己の苦しみとする」という素晴らしい教えなんだけども、それをここでね、皆さんと一緒に十三回唱えましょう。まず、音頭を取ります。

「自己の苦しみを喜びとし、他の苦しみを自己の苦しみとする」

意味がちょっとわかりづらいかもしれないけど、唱えているうちに、意味を考えているうちに、この深遠な教えというものが、仏陀釈迦牟尼のお説きになった最高の教えであることに気づくはずです。

この意味合いというものを説明すると、修行が進んでくると、他の人の苦しみに対する許容量に比べて、修行者の苦しみに対する許容量というものは、どんどんどん大きくなっていくわけだね。そして、すべての人の苦悩が自己の内側に内在されたとき、そのとき本当の意味での大乗の救済者となれるということなんだよ。

それはなぜかというと、自己の苦しみが幻影であることに気づいた者にとって、他の苦しみをどれだけしょったとしても、その苦しみそのものが幻影なんだね。例えば、仏陀釈迦牟尼の最期の瞬間は、君たちも知っているよね。ものすごい腹痛を起こされて、下痢になられて、そして入滅なさったと。しかし、現代の宗教家たちはその意味合いがわからないよね。よくこういう質問を受ける。

「なぜ、仏陀釈迦牟尼ほどの人がそういう下痢によって、あるいは病気によって、

あるいは食あたりによって死ぬのか」と、ね。

しかし、これは小乗的な考え方を基本としているからこのような問題が出てくるんだね。本当は仏陀釈迦牟尼は三乗――ヒナヤーナ、マハーヤーナ、そしてタントラ・ヴァジラヤーナ、つまり、小乗、大乗、真言秘密金剛乗という三つの乗を修めていらっしゃったわけだ。そして、この話は、釈迦牟尼が大乗の修行をしていらっしゃったことの一つの証明といえると思うんだよ。

釈迦牟尼がいろんな弟子たちにイニシエーションを与え、いろんな信徒の苦悩を取り除いたわけだけども、その苦悩というものは消滅したわけではないんだね。この現象界における苦の総量は一定だから、当然その苦悩のデータというものは、釈迦牟尼の中に内在して釈迦牟尼は入滅することになる。だから、釈迦牟尼の末期がだよ、心は全く苦しまない状態で、肉体が苦しい状態で入滅なさったということは、仏陀釈迦牟尼が本当の意味で大乗の如来だったんだなという確信を得る根拠になっていると考えているんです。

◉本当の幸福――愛に満ちた心の中に

現代の仏教だけではなく、いろんな宗教というものはね、自己の喜びだけを求めるために展開しているように見える。もちろん、自分が幸福でなければ、他の幸福というものはなかなか思いやることはできない。しかしね、ここでよく考えなければならないのは、いったい幸福とは何なんだろうかということなんだよ。

例えば、お金持ちになることが幸福なのかなと。例えば、立身出世をすることが幸福なのかなと。もちろん、お金持ちになり、立身出世をし、あるいは素敵な恋人と結婚をし、あるいはいい大学に通りと。これは確かに個人的には、瞬間的には幸福かもしれない。

しかし、わたしはそれよりももっともっと幸福なことがあるよと言いたい。それは何かというとね、生きている間、あなた方自身の周りにあなた方を本当に理解し、あなた方が本当に苦しんだとき一緒に苦しんでくれてね、そしてあなた方がうれしいとき一緒に喜んでくれる。こういう人たちがたくさんいることじゃないかな。そして、それは現代のわたしたちが忘れがちな、親であり、兄弟であり、

妻であり、あるいは友人なんじゃないかなと思うんだ。

ではね、なぜ現代は、確かに妻はいる、子供はいる、夫はいる、あるいは両親はいる、あるいは友人はいるといってもだよ、打ち解けられなくなってきたんだろうね。これはね、一言でいうならば、物質、あるいは外的なものに、あまりにもわたしたちが重きを置きすぎて、本当のわたしたちの内側にある安らぎ、幸福といったものに目を向けなくなったからじゃないかと考えるんだ。

そしてね、それは、例えばオウムの師をはじめとするサマナがよく示していると思うんだね。もちろん彼らだって、たくさんの情は持っているよね。しかし彼らはその情、自分たちの喜びというものをグルとシヴァ大神に捧げ、そして多くの人たちの苦悩を取り除くために、二十四時間修行に励んでいるんだ。

そして、北陸にはね、例えば、Oさん、あるいはMさん、ね、あるいは今日わたしにレイをかけてくれた信徒の方ね、あるいはAさん、こういうもう既に菩薩の道をね、歩き出している方がたくさんいらっしゃる。こういった多くの人たちが本当の幸福というものを自己の内側に見いだし、実践しているんだね。

そして、わたしはこの北陸の地、この金沢というものとすごく縁を感じているんです。実際、まだ信徒数は少ないけども、その少ない信徒の中からわたしの直弟子になり、そして二十四時間の奉仕修行あるいは瞑想修行に入っている方がたくさんいるんだね、この地には。

もしだよ、わたしたちがわたしたちの本当の喜びを求めるとするならば、次の、仏陀釈迦牟尼とマッリカーというインドの国の女王様の会話を君たちがよくかみしめて考えれば、ヒントが与えられると思う。

女王マッリカーは夫であるパセーナディ王にこう問うたわけだ。

「わたしはあることに気づきました。この世で一番大切なのはわたし自身じゃないでしょうか」と。

そうすると、王パセーナディは、

「そうか、確かにそうだ。わたしもわたしが一番かわいい。お前もそうか。しかし、どうも腑に落ちない。一つ、仏陀釈迦牟尼の所に行って、このことを問うてみよう」と。

そして、仏陀釈迦牟尼のもとに至った二人は、仏陀釈迦牟尼に問うたわけだ。

「実は如来よ。わたしたちはこのように考えました。この世で最も愛するもの、最も大切なものはわたしたち自身である」と。

釈迦牟尼は、

「なんじらは素晴らしい。よくそれに気づいた。しかし、なんじらがなんじらを最もかわいいと思うように、なんじらの周りにいる人たち一人一人が、自分たちが最もかわいいと考えているんだよ。だとするならば、どのようにしたら本当に幸福になれるのだろうか。

自己がかわいい、自己が最高にかわいいと思うだけの心の量を他に向けてごらんなさい。そうすることによって、本当に心が豊かになり、そして、他も自分を思いやるようになり、本当に幸せになれますよ」と。

仏陀釈迦牟尼は、出家した弟子に対しては、「サイの角のように一人行け」と、つまりただひたすら解脱、悟りを目指してね、突っ走れと言っていらっしゃる。そして、在家の修行者に対しては、「木と木に絡む蔓のように絡んでいけ。絡め

ば絡むほど、心から互いに愛すれば愛するほど幸福になれるんだよ」と言っていらっしゃる。

一九八九年二月十九日　金沢支部にて

◆第六話　尊師が語る「本生経」、そしてカルマの法則

「自由・幸福・歓喜の世界へ」

◉地獄に至る三つの道

一つ君たちに、君たちが聞いて得になる話を二つ、三つ、四つとね、今日は少し話をしたいと考えています。

まず、『阿含経』の中に、地獄に対する描写があると。これはみんな知ってますか。この『阿含経』の描写の中で、まあ例えば、三つの使いとかね、あるいは、まあ金持ちが地獄に至った話とか、いろいろあるわけだけども、この中でね、まず君たちが聞いて即理解できるような話をね、したいと考えます。

ここに、極悪非道の者があり、その人は真理、これを否定し、そして、例えば

修行者を罵り、そしり、そして、口には悪口をなし、多くの生き物を殺し、そして盗み、ね、盗みも人のいないときの盗みだけではなくて、暴力を使っての盗みをなし、多くの快楽を貪り、そして心には、よからぬことを絶えず思い、死んでいったと。

もちろん、この死んだ魂というものは、当然地獄に落ちるわけだから、まず第三天界の夜摩天（やまてん）で裁きを受け、そしてカルマによって地獄へと転生すると。地獄に対する落ち方というのは、三つあると。

第一の地獄に対する落ち方は、エネルギーによって落ちると。これは、煙、黒い煙が射し込んできて、それに愛着している者。だからカラーとしては、黒色が好きな人、この人は地獄に落ちる確率が高いと経典でいわれていると。

第二の条件というのは、ヴィジョンであると。それは、例えば嫌悪の想念の強い人ね。エゴがものすごく強い人というのは、その嫌悪によって相対する世界、反対側の世界、例えば暑さに対して嫌悪するならば寒さの世界、寒さに対して嫌悪するならば暑さの世界、あるいは単に多くの者に、例えば快楽の一部である異

性に対して愛執が強ければ、その世界へと落ち込み、その世界の地獄が待っていると。

そして、第三の地獄に至る道、これは裁きであると。このとき登場するのが、仏教の言葉を使えば閻魔天（えんまてん）、ヨーガの言葉を使えば夜摩天であると。そして、今日のこの話は、夜摩天の話であると。

◉老い——第一の御使い

死後、中間状態に入ったその魂は、夜摩天の裁きを受けなければならないと。そこで夜摩天が、このように問うたと。『阿含経』ではね、三つの御使いというふうになっているわけだけど、わたしはそれを四つの御使いと置き換えて、ここで話をすることにしよう。

夜摩天は、その地獄へ至る魂に対して、次のことを問うたと。

「お前は、わたしの遣わした第一の御使いを見なかったか」と。

はい、君たち、君たちは第一の御使いを見ましたか。この人間の世界において。

どうだ。ねえ、これは君たちが裁きを受けるとき、もし、わたしに帰依ができていなかったら、わたしに帰依ができていたら、わたしがそばにいて君たちの弁護に立つかもしれない。しかし、帰依ができていなかったら、君たちが自分で答えなければならないことだから、よく聴かなければならない。ねえ、そして理解しなければならない。

「お前は、第一の御使いを見たか」と。

どうだこれは。沈黙をしてるということは、見ていないということになるよね。どうだ。本当に見ていないかと。

君たちは、人が年を取り、ね、そして体には皺ができ、ね、体には斑点ができ、腰が曲がり、頭がはげ上がっていくと、ね。このような状態を見たことはないかと。どうだ。これが第一の御使いであると。

そして、智慧ある者は、ここで気づかなければならないと。この人間の世界というものは、変化するものなんだと。そして、徳のあるとき、エネルギーの強いときには、それに対して、ね、興味を示さないけども、いずれ自分はそのような

形になるんだということに気づかなければならないんだと。もし気づくならば、いずれわたしはこの肉体が滅び、そして死んでいくんだから、ここでよきことを行ない、ね、正しいことを行ない、きちんとした生き方をしようと考えると。どうだこれは。

ところが、もしそれに対して、わたしたちが興味を持つことができなければどうなるかな。ね、年を取った人は年を取った人であると、わたしはわたしであると考えるだろ。どうだ。これが、第一の御使いであると。

じゃあ、わかるね。第二の御使いは何だ。はい、そこで、閻魔大王は、ねえ、夜摩天はこうその魂に叱咤したと。

「お前が、もしこの老いというものを知っていたならば、老いは当然死につながるわけだし、善行をなしたはずである」と。

「わたしの遣わした、お前は第一の御使いのサインを読み取れなかったな」と。

そして、

「お前はたくさんの悪業を積んだ」と。

「お前はこれから、拷問に遭わなければならない」と。

じゃあ、なぜこれが第一の御使いなんだと。ここは経典に載っていないとこだけども、どうだ。

「色」と「空」とは同一であると。これはいいね、まず。そして、――いいかな、この人間界は六道を映し出している。これはどうだ。だとするならば、当然この人間界の苦しみをもっともっと大きく投影した世界があってもおかしくないな、どうだ。例えば君たちはおなかをすかすと。そうすると、例えばアフリカでは、食べられないで餓死していく人たちもいるわけだよね。どうだ。これは、君たちの空腹の投影じゃないか。どうだ。空腹という苦悩を増大した状態じゃないか。どうだ。よって、これが御使いなんだよ。

つまり、言い方を換えるならば、この老いというのはわたしたちに対する愛なんだね。いいですか。わからないだろ。わかるか。つまりどういうことかというと、わたしたちは老いるよね。老いるという恐怖があるからこそ、善行が積めるよね、言い方を換えれば。どうだ。もし老いなければどうだ、悪いことやったっ

て、いいことやったって、全然変わらなければどうだ。わたしたちは、自分のエゴを満足させるために、煩悩のために、ね、悪いことだけをするんじゃないか、どうだ。これがまず、第一のね、御使いであると。

◉病——第二の御使い

では、

「お前はわたしの第二の御使いを見たか」と。

はい、これは何だ、第二の御使いというのは。病、あるいは死だね。わたしたちは病にかかると、それまでは元気ハツラツだったのが落胆するよね、まず。意気消沈するよね。そして、今までの生の喜びが一転して、ね、このわたしたちを楽しませてくれた肉体のために、わたしたちは苦しまなければならない。どうだ。つまり、このわたしたちの肉体そのものは無常であるということがわかるわけだよね、どうだ。それに気づいていれば、わたしたちは善行をなし、智慧を磨き、ね、そして高い世界へ生まれ変わろうとするだろう。どうだ。

ところが、もし無智であるならば、それに気づかず、一時しのぎの、例えば薬を飲み、注射を打ち、あるいは、念力その他によって病を治してしまうと。そうすることによって、わたしたちは、第二番目の御使いの意味合いというものを見失うことになるよね。どうだ。つまり無常であればあるほど、わたしたちは苦を味わうわけだよね。そうでしょ。その苦から脱却したいと考える。どうだ。ところが苦のない世界に、もしわたしたちが生まれていたらどうなる。わたしたちは煩悩を満足させ、悪いことを行ない、落下してしまうと。

そこで、夜摩天はその魂に対して、ね、

「お前は善行を積まず、智慧を磨かず、悪行をなし、心にはよからぬ思いをいつも生じさせていた」と。

「よって、お前は大いなる裁きを受けなければならない」と。

◉死――第三の御使い

はい次。そして、第三の御使いの話が出てくるわけだね。第三の御使いは、当

然、死だ。これはわかるね。

「お前はわたしの第三の御使い、これを見たか」と。

当然、愚者だから——君たちは智慧の修行をしているから、わかるだろうけどもね、ある程度。一つ聞けば、あとの二つは当然出てくるよね。ところが、その愚者は、

「見ていません」と。

「お前は死人を見たことがないのか」と。

あるいは、

「人が死んだという話を聞いたことがないのか」と。

この人間の世界で生きていて、人の死というものを知らないで、ね、この世から去るということは、まあ生まれて五歳とか、あるいは十歳ぐらいまではあるかもしれないけど、ほとんどの場合は、それ以上の場合、不可能に近いよね。どうだ。

そして、この死というものは、わたしたちの欲望に対するストッパーの役割を

演じているね、当然。どうだ。なぜならば無常だから、死の世界があるにしろないにしろ、そこでトランスフォームされると。いったん、変形が起きるよね。どうだ。

そして愚者である、その魂は、ね、足、手、それから胸の中心という五つを突き刺されたという話だね。それから、体を縛られて、もうものすごい炎熱の中を走り回されて、そして、最後には、ね、鉄の家というのがあって、その鉄の家の床は、もう煮えたぎっているというよりも、ものすごく燃えていてね、そこを、とめどなく歩かなければならないと。行けども行けども歩かなければならないと。しかも、——ここがポイントです。今日わたしがなぜ君たちに、この話をしたかというとね、いいですか、わたしの言っていることと、この閻魔天、夜摩天の言っていること、仏陀釈迦牟尼の言っていることが同じだからなんだよ。地獄の世界においては、その地獄のカルマが落ちるまで、わたしたちは、死ぬことができないんだよ。傷ついたとしても死ぬことができないんだ。どうだこれは。

◉苦痛——第四の御使い

はい、そしてもう一つ。わたしは第四の御使いがあると考えていると。それは何だと思うか。現代の感覚と昔の感覚の違いだから、実際には、病のカテゴリーにね、病というものの中に入れることはできるわけだけども、苦痛だね、これは。肉体的苦痛。例えば針を刺せば痛いと。しかし傷はないと。例えばね、残らないと。例えば電気ショックを受ければつらいと。しかし、傷も残らなければ、ね、現象としては何一つ変わらないと。どうだ。

だから、わたしたちの中には第四の御使いが存在しているんだよ。そして、その第四の御使いこそが、地獄の原型だと考えていいんじゃないかなと。ねえ、わかるかな、言っていることは。

例えば、わたしたちが死なない程度に苦痛をずーっと味わい続けると。これは当然、ね、可能性としてあるわけでしょ。どうだ。例えば、一日針を百本、千本と刺していけば、そのとき当然苦痛はあるわけだよね。どうだ。しかし、わたしたちは死なないよね。どうだ。苦痛だけがあって死なないよね。その延長上に地

獄はあると考えた方がいいと、ね。

◉最高のカルマ――カルマからの脱却

そして、この夜摩天はこう考えたと。「わたしは今、夜摩天界の王である」と。「そして、多くの魂を裁いている」と。「しかし、わたしですら輪廻転生するんだ」と、ね。「わたしはこういう拷問を受けたくない」と。「だからもし、仏がおられ、そして真理があり、その真理の実践できる場があったならば、ぜひとも、そのカルマから脱却したいものだ」と。「そして、そのカルマから脱却できることこそ、最高の素晴らしいカルマであり、生き方だ」と。わかるかな、言っていること、わたしが。

そしてここにいる、君たちは出家をし、ね、ある程度の悪業をなし、もちろんある程度の善業をなし、ね、その善業によって出家をし、今修行をしている、ね。そして、小乗のニルヴァーナ、大乗のマハーヤーナ、そして、大乗の最高点であるマハー・ニルヴァーナに君たちは到達することができるんだ、ね。その世界に

は、当然地獄も、餓鬼も動物も人間も阿修羅も、天界もない。絶対的な平安、安らぎの世界であると。今君たちは、その世界に到達のできる希有のチャンスに恵まれている。

しかし、君たちが比較しているもの、その世界と比較しているものは、あまりにも小さすぎるんじゃないかと。どうだこれは。『阿含経』においても、仏陀釈迦牟尼の経験としてその世界が存在していると。わたしにおいても、この現象界でわたしはそれを経験し、そして瞑想の中でもね、おろし金地獄というものを経験していると、ね。ということは、当然、その世界はあるんだということだ。そしてそれは、わたしの説いている法と、仏陀釈迦牟尼の法のカルマの理法が、全く同一であると。そのカルマが切れるまでは、ね、そこから脱出することはできないんだということだね。それをよく考えて、君たちは選択をしなければならない。

◉煩悩が幸福を砕く

次に、煩悩について少し述べよう。わたしが、人間界の王であったころ、人の寿命というものは数万年、あるいは、長生きをする人は数十万年の寿命を得ていた。これは、わたしがね、聖転輪王、まあ、聖転輪王という読み方をしているみたいだけども、実際には聖転輪王だったころの話だ。

わたしは素晴らしい部下に恵まれ、そして、わたしの民は善行をなし、その心は反映し、殺生、偸盗、邪淫といったね、こういうものがいっさい行なわれない世の中であったと。わたしには、妻が三百人、そして八百人の恋人がいたと。ねえ、今のサマナ諸君から見たら、うらやましい立場だね、すごく。どうだ。そして、わたしには三千人の息子と、それから二千人の娘がいた。その三千人の息子は大変優秀で、その子たちが国を守っているから、もちろんどこも攻め込んではこなかった。

そして数万年の統治の後、わたしは、東にね、なかなか素晴らしい王国があることを聞いた。しかし、まだそこは真理というものからはね、ほど遠い国であっ

たと。わたしは、そこへ一部のわたしの部下たちを引き連れて征服に行った。ところが、そこの民はわたしの名声というものを聞いていて、戦うことなく、わたしはその国の王として君臨することができた。そして、その国の民も喜び、ね、わたしに対して絶大なる敬愛の念を持ち、素晴らしい真理の国ができた。

しかし、わたしの——慢だね、要するに。統治する、真理をね、広めなければならないんだという慢は、尽きるとこなく、次は、ね、南の国へ行ったわけだ。そして、そこでも同じように戦うことなく、わたしは王として君臨することができた。

そして、北の国では、もっとね、わたしが初めに治めていた西の国より、もっともっと素晴らしい条件の民が存在していたわけだけども、そこでもわたしは王として君臨し、統治することができた。

そしてわたしは、次には天上の民、忉利天（とうりてん）の民を支配しようと考え出した。というのは、忉利天というのは功徳は優れている、智慧も優れているけど、まだ真理に到達しているわけではない。そしてわたしは忉利天へ上り、そこで、忉利天

の王インドラとね、会ったと。ところが、インドラは素晴らしい神だから、わたしの徳を認め、一緒に統治しましょうとおっしゃってくださった。そして、わたしはインドラと一緒に忉利天で統治をした。

ところがだ、いまだ完全なる真理に到達していなかったわたしの心の中に、慢、それから征服する欲求というものがあったわけだね。そして、わたしはその忉利天を亡きものにして、わたし一人でね、その忉利天をね、支配しようと考えたわけだ。そして、実行に移そうとした瞬間、わたしは地上界に叩きつけられた。

なぜだかわかるか、君たちは。なぜだかわかりますか。今の話を聞いてわかるとおり、もともと、前生のわたしが、ね、聖転輪王として降りたときのこの生は、徳によって、わたしはすべての人たちを統治したわけだね。どうだこれは。ということは、その心の背景には救済の、ね、心、そして、すべての人に対しての愛、これが当然存在していたわけだよね。どうだ。

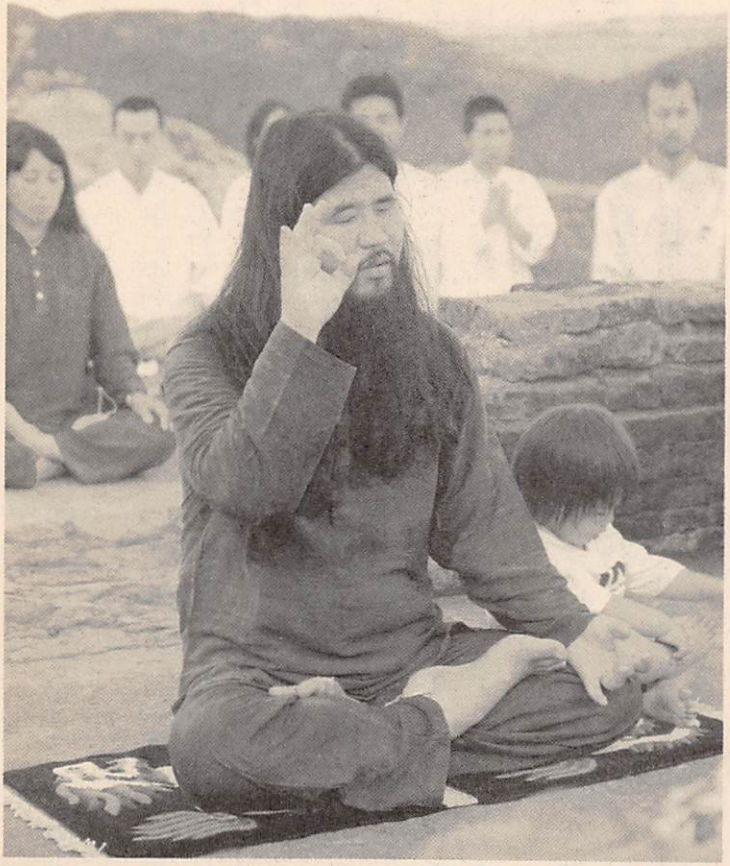
ところがわたしが忉利天に上り、そこでインドラにね、なしたことといったら、非礼極まりないと。わかるか。つまりインドラの方が心が豊かだったわけだ。そ

して、わたしの中に殺意が生じたとき、わたしは天界の王としてのカルマが一挙に、――どうなる、一挙に切れたんだね。そして、地上界に叩きつけられたわけだ。

◉インドラ神、阿修羅王の前生――こうして輪廻を繰り返す

もう一つのね、わたしの前生を話そう。わたしが忉利天の王であったころ――つまり、インドラ神だったころだ――わたしは智慧の修行をしていた。そして、あるとき戦いが起きた。何に対する戦いかというと、それは天界に存在している、ね、わたしたちを幸福にしてくれる、木の実がたくさんなっている如意樹をめぐっての、阿修羅との戦いであったと。

阿修羅は武力、あるいはエネルギーにおいてはね、天界を上回っているんだ。しかし、三十三天というのは、智慧に優れているわけだね。そしてわたしは、そのとき阿修羅王を捕えたんだよ。そして、そのときの阿修羅王の息子が、今のわたしの弟子であるマイトレーヤ、それから、パタンジャリ（現在のカンカー・レー



ヴァタ師）なんだね。それから、阿修羅王の参謀、これは今のミラレパ師（現在は正悟師）なんだよ。

この話はね、サマナの中に少し伝わっているかもしれない。どうだこれは。聞いたことがある人はいるんじゃないか。そして、阿修羅王に改心を求めたけども、阿修羅王は屈辱に耐えられなくてね、自殺をした。

そこでわたしは、今のマイトレーヤ師（現在は正悟師）、パタンジャリ、これを引き取って育てることになったわけだ、わたしの息子として。その縁によってね、今彼らがオウムで活躍しているわけだけど。これは、ミラレパ師の見たヴィジョン、あるいは、そのころわたしの侍者であったラーフラ師が見たヴィジョン、ね、あるいはわたしの見たヴィジョン、これがね、同一であるということから、今日話をしたわけだね。二番目のわたしの前生に対してはね。

ということは、わたしたちは輪廻転生を繰り返しているということになるよね。どうだ。しかも、二人の師とわたしの見た師が、同一であると。

あるときわたしは、阿修羅の王であった。そのときの参謀は、今のマンジュシュ

リー師（現在は正悟師）なんだよ。このときは、あまり戦いもなく、忉利天との闘争もなく、安穏とした生で終わってしまっている。つまり、あるときは、敵であったはずの阿修羅の生としての前生をわたしは持っているわけだ。どうだ。

だとするといったい何を敵とし、何を味方とするか、すごく難しい問題になるよね、これは。そして、エネルギーの引っかかりによって、ね、特にわたしの場合は、エネルギーの引っかかりによって次の転生が決まるからね。例えばアナハタで引っかかるならば、人間界へ転生するだろうと。

今、わたしがここで命を断ったとしたら、おそらく阿修羅の王として君臨することになるだろう。なぜならば、今わたしのエネルギーは喉で引っかかっているからだ。これはシャクティーパットによって、マニプーラまでいったん落ちたエネルギーが、少しずつ少しずつ回復している証拠なんだけどね。もちろん意志の力によって、人間界に戻すと、あるいは天界へ生まれ変わることができないわけではない。しかし、放っておけば、間違いなくわたしは次の生、阿修羅の王として生まれるだろう。

◉転生を決定するカルマ

そして、わたしが今日ね、君たちに話したかったことは、君たちがきちんとワークを行ない、瞑想修行を続けていけば、納得のできる君たちの、ね、未来に対する答えというものが出てくるんだよって。そして、それを今生で達成するしないというのは、今からの君たちの大きな魂の流れにとって、ね、大きな意味合いがあるんだよということ。もちろん、今生で涅槃（ねはん）するということは、それはそれで素晴らしいだろうと。ね、そこですべては止まってしまうから。そして、ある程度の幸福・歓喜の状態に包まれるからね。

そうではなくて例えば、凡夫的な、君たちが思考をし——というのは、君たちがどの世界へ転生するかというのは、君たちの持っているデータ、つまりカルマによって決まるんだよ。だとすると、君たちがそのカルマを滅却しない限り、君たちは救済のされようがないわけだ。わかるかな、これは。

◉心の働きがすべて

最後にもう一つ、『阿含経』から引用しよう。ある金持ちの長者がいたと。その長者は子供がなく、ね、亡くなったんだよ。で、子供がなかったと。で、インドのしきたりによって、子供がない場合はその財産はすべて王のものになると。その当時の王はパセーナディ王であると。で、パセーナディ王はどうも納得できなかったと。というのはその長者は、ヴァッパ師みたいにね、自分はお金を使わず、古着を着て、ね、とにかく貧しい生活をしていたわけだよ。そしてこつこつこつこつとお金を貯め、大金を持っていたと、ね。ところが没収されてしまったと。

で、納得できなかったパセーナディ王は、仏陀釈迦牟尼のとこに訪れられたと。で、ね、

「仏よ。いったいこの長者は、どこへ次の転生なさったんだろうか」と。

「それは地獄ですよ」と。「間違いなく地獄である」と。

「なぜでしょうか」と。

「彼は、仏を供養せず、仏の法を信ぜず、そして、仏の弟子を供養しなかったからである」と。

「ではなぜ、そういう供養しなかった人が、今金持ちでいるんだ」と。

そこで、お釈迦様は得意の神通力を発揮なさって——宿命通だね——彼の前生についてお話しなさったわけだ。実は、前生において、彼は農家の子供であったと。そして、そこへ身清らかな、礼儀正しい修行者が来たと。そして、その修行者に対して、彼は食物をふるまったわけだ。いいですか。よく聞きなさいよ。その食物をふるまわれた、身清らかで礼儀正しい修行者は、木の下で、ね、ただ、供養を受け、そして供養が終わった後、空中へ飛び去ってしまったんだ。それを見た農家のその息子は、「わたしのこの功徳によって、わたしは将来において絶えずお金に恵まれた人生を送りますように」と念じたわけだ。そして、それによって、彼はその次の生から、いつも豊かな家庭の子供として生まれることができたと。

では、なぜ彼はお金を使うことができなかったのかと。楽しむことができなかっ

たのかという問いに対して、彼はそのとき、こう念じたそうだ。その後ね、「しまった」と。「修行者なんかに供養するんだったら、召使いに食わせてやればよかった」と。「惜しいことをしたな」と。「ああ、惜しかった、惜しかった」と、ね。それによって、彼は何をするにも、惜しいな、もったいないなという気持ちだけが先行して、結局お金を使うことができず、結局彼は、ね、彼のなした善業のすべてを使い果たして——はい、善業を使い果たしたらどこへ生まれ変わるか。——地獄へ生まれ変わったわけだ。

もちろん、君たちはサマナとして修行しているわけだし、功徳を積んでいるわけだから、来世地獄ということは、ね、よっぽどの悪業をなしていない限り、ないだろうと。しかし、いずれは落ちるよと。

これが、わたしがね、初めて君たちに明かした「本生経」、わたしの前生の話の一部です。

◉サインを読み取れ

今までの説法と少し内容が違ったけども、理解できたかな。そして君たちも輪廻転生を繰り返すんだよと、ね。そして輪廻転生において、この生というのは本当に短い生なんだよと、ね。そして、わたしたちの老死、あるいは苦しみというものは、わたしたちに対する最高のサインなんだよと、ね。そしてそのサインを読み取り実践するなら、わたしたちは、ね、本当の意味での幸福・自由・歓喜の世界へ、いずれは導かれるんだよと、ね。

それはわたしの言っていることでもあるし、あるいは、仏陀釈迦牟尼のおっしゃっていらっしゃることでもあると、ね。そしてわたし、あるいは仏陀釈迦牟尼がもし嘘をつくとするならば、それはわたしたちは、ね、真理の体現者であるというふうにいっているわけだから、逆に大変な地獄へ落ちることになるだろうと、ね。いいですか。

だとするならば、修行者は何を考えなければならないかと。今の君たちのステージで安定させることを考えるのかと。それとも、先へ進むことを考えるのかと。

どうだ。

君たちの目の前にぶら下がっている餌、これは性欲であったり、あるいは食欲であったりすると、ね。

これはちょうど、『阿含経』に載っている、猫のたとえにたとえることができると。あるとき、おなかをすかした猫がここにいたと。いいですか。その猫は、「ああ、おなかがすいたなあ」と、今のキタロウ君みたいにニャンニャン鳴いていると。で、目の前をね、満足した丸々肥えたネズミが通り過ぎたと。ということは、この猫はメスだったんだろうね。オスはネズミを捕らないから。いいね。そして、それをじっと追いかけていったら、そのネズミは巣に入ったと、ね。巣のそばにはゴミためがあったと。そこで、猫はね、一計を案じたと。「よし、ここで、待ってやろう」と。「必ずネズミが出て来るはずである」と。「たらふく食ってやるぞ」と、そのネズミをね。「あのネズミは丸々肥えているから、きっとわたしのおなかを満足させてくれるだろう」と。どうだこれは、君たちの今の心じゃないか。「ああ、ご飯がたくさん食べたい」と。「オウム食をたくさん食べたい」

と。

そして、そのくさい、ゴミための中で、じっと猫は待ち続けたと、ね。猫は考えたと。「おなかはすくし、くさいし、必ず食らってやるぞ」と。「これだけの悪条件でいるわけだから」と。そうこうしているうちに、そのネズミの入り口からネズミは出てきたと。ネズミはちょうど消化し終わったぐらいで、元気ハツラツのときであったと、ね。猫は、爪を出し、さっとネズミを押さえ、飲み込んだと。おなかすいてるから、生飲み込みであったと。生のまま飲み込んだと。

さあ、ネズミは大変であると。胃の中に到達したネズミは、ねえ、当然ネズミにだって生命欲があるから、一生懸命爪を立て、歯を使い、胃袋を噛み破ったと、ね。胃袋だけではないと。次の内臓を噛み破って出ようとしたと。

それによって、猫はどうなったと思うか、君たちは。死んでしまったと。そして、猫の死というものは、単なる生命の終わりであると。しかし、修行者が出家し、真理に到達できる前に煩悩によって死んだ場合はどうだろうね、君たち。それは、魂の死であるということができると、ね。

今日は少しね、怖い話をたくさん行なったけども、この真意をよく理解し、考え、修行する者は、必ずやね、短い期間に真理の世界に到達することができるだろう。いいね。よく考えて修行しなさい。

一九八九年三月二十八日　富士山総本部にて

◆第七話　修行を失敗しないために

「修行者の四つの心得」

◉修行の障害、それは心に生じる魔

今日は、どのようにしたら君たちの修行が成功し、あるいは失敗するかについてね、まず第一にその話と。次は第二には、最も大切なものについての話と、ね。そして第三には、四つの善人についての話と。そして第四には、小乗から大乗、タントラ・ヴァジラ乗に至るための過渡的な思考をどのようにしたらいいかという話と。その四つについて、今から話したいと思います。

この一、二、三、四ともね、まあ『阿含経』の中からの抜粋と、それからそれに載っていない、ね、わたし独特の、現代的な比喩を交えながら、君たちに話し

たいと思います。

まず、修行者がここにいて、修行者が修行を成功するためには、どのようにしたらよろしいかと、ね。そのためには、まず求道心を持つことであると。いったい求道心とは何かといったら、この苦しみの世界を脱却し、そして絶対的な、自由・幸福・歓喜の世界に没入することであると、ね。ではそのための障害、これはいったい何かといったら、それは心に生じる魔であると。悪魔であると。例えば悪魔というものは、実際この三次元世界に登場して、わたしたちをどうこうするということは、まずない。たとえあったとしても、それは、大してわたしたちに影響を与えるものではない。なぜだかわかるか、それは。

悪魔がここにいて、わたしたちの生命をもし奪ったとして、それはわたしたちの単なる肉体を、彼が奪ったにすぎない。わかるね、これは。しかし、わたしたちの心というものに対しては、いっさい影響を与えないということになる。いいかな、まずこれは。ところが、わたしたちが、もし心を悪魔に明け渡したならば、わたしたちは取り返しのつかない迷いの生を繰り返さなければならないというこ

とになる。

◉甲羅を射られた亀——悪魔にとりつかれた修行者

『阿含経』では、ここで、亀のたとえという、ね、詩でそれを表現していると。

ここに、亀の集団があったと。その中央には、ね、年老いた亀がいて、その亀は、大変賢い亀であったと、ね。そしてその亀は、周りの亀たちに、「決して、岸辺の近くにある岩に近づいてはいけない」と、ね。「その岩に近づくならば、生命は奪われてしまうんだよ」と、ね。そして、すべての亀は、その教えを守り、そして、その岩場には近づかなかったと。

ところが、ある一匹の亀が、「わたしは、敏捷である」と、ね。「わたしは素早い動きをなすことができるから、岩場に近づいても、漁師に捕らえられることはない」と考えたと、ね。そして、亀は、その若い亀はね、その岩場に近づいたと。そこに待ち受けていた漁師がいて、銛に縄をつけて射たと。亀は素早く逃げたと。

しかしその銛は、確実に甲羅を貫いたと。しかし甲羅は厚いと。だからその若い亀は、自分が射られたことを知らず、また元いた自分たちのすみかの方に泳いでいったと。

年老いた亀は、その若者の亀が、若い亀がね、岩場に行ったということを聞いて、様子を見に行ったと。そして、若い亀が泳いでくるのを見たと。で、「お前どうだったんだ」と。「わたしの注意をなぜ守らなかったんだ。」という話を、その若い亀にしたら、若い亀は、「いや、わたしは岩場に行ったけども、漁師に捕まることなく、このようにして帰ってきた」と。「そうか」と。「それはよかった」と。

ところがどうも泳ぎがおかしいと。老いた亀は、その若者の亀の後ろに回ったと。そしたらちょうど甲羅がね、銛で射られていたと。そこで老いた亀は、「お前はもう自由ではないんだ」と。「漁師のものなんだよ」と。「お前がいくら泳いで逃げようとしても、きちんと縄がつながっているから逃れることはできな

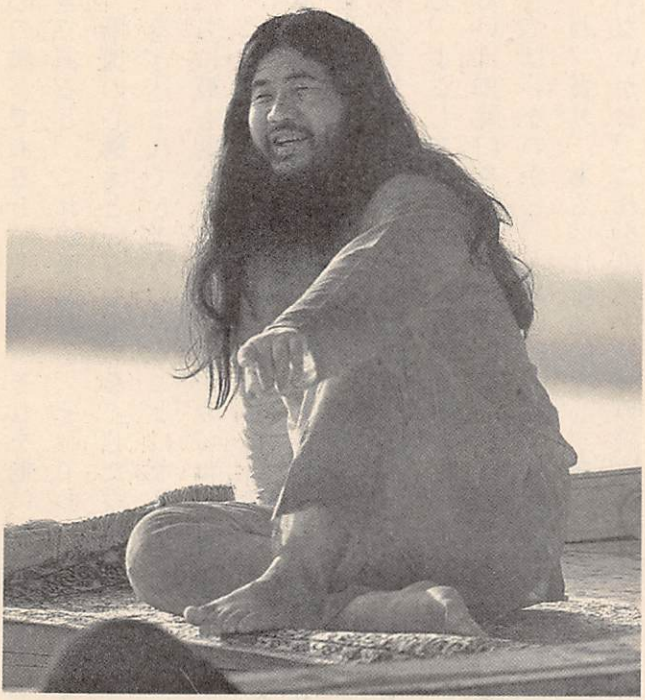
いんだ」と。

そして、漁師、これはわたしたちの心の中に住んでいる悪魔であると。では、いったい悪魔とは何かと。もちろんヴィジュアル的に見ることもできると。しかしそれは、一般的には、わたしたちの修行を妨げる眠気、あるいは貪り、あるいは怒り、あるいは真理を否定したくなる気持ちと。これが悪魔であると、ね。

そして、最もわたしたちが修行者として陥りやすいもの、それは利得と供養であると、ね。特に修行が進んでくると、わたしたちはえてして慢に陥りやすい。俺は偉いんだと。俺は素晴らしいんだと、ね。俺は賢いんだと。しかし、もしその修行者が、俺は偉い、俺は賢い、俺は素晴らしいと思い出したならばだ、あるいは自分だけは特別だと思い出したならば、そのときもう既に悪魔の罠にかかっている、射られた亀と同じだということを考えなければならない。

◉慚愧こそ修行の第一歩

そして、修行の第一歩は慚愧（ざんき）であると。慚愧とは何か。これは自分の内側、自



分自身を反省する心の働きであると。そして、それを他に恥じる、特にグルに対して恥じる心の働きであると。これが慚愧だと。そしてわたしたちが、この慚愧の修行というもの、慚愧の心構えというものをなくした段階で、わたしたちは、また迷いの生にね、巻き込まれてしまうということになるんだよ。

これが、今日君たちに最も話したかった、第一の、ね、君たちに対するプレゼント。ではどのようにしたら、その悪魔から、自分自身を守ることができるかと。

それは、まず先程も言ったとおり、絶えず自分の内側におごりはないかと、高ぶりはないかと、傲慢さはないかと考える気持ちであると。そして第二に、戒はきちんと守られているかと。生き物をいじめないで慈しんでいるかと、盗みを行なってはいないかと、よこしまな愛欲にふけってはいないかと、嘘をついてはいないかと、ね、あるいは無駄口をたたいてはいないかと、あるいは仲たがいさせるような言葉を話してはいないかと、あるいは大声で人を罵ってはいないかと、あるいは心の中に、ね、貪り、あるいは排他的な心、あるいは真理を否定したくなる心が働いてはいないかと。これを絶えず見つめ続けなければならない。

いかに高いステージに立ったとしても、その功徳がね、自分の煩悩を満足させるための方向に働くのではなく、自分の精神的な成熟、心の成熟、あるいは霊的な成熟に働くように、絶えず思念しなければならない。

では、そのためにはどのような生活が必要なんだと、ね。できるだけ粗末な寝具に寝ると。そして、できるだけ粗食で生きると、ね。できたら一日一食、あるいは二食がよろしいと。二食ではちょっと食べ過ぎだけどね。そして、できるだけ高いものに対して布施の実践を行うと。このような思いをなして修行している者は、決して利得、あるいは供養というものに対して、興味を持たなくなる。これが、一番目の話だ。

◉法友――最も大切なもの

では第二番目の話。最も大切なもの。わたしたちにとって最も大切なもの、それはいったい何だろうかと考えるならば、それは法友ということができると。ね、いったい法友とは何かと。君たちにとっての最高の法友、それはだれだと思うか。

そして法友というものは、君たちが今までおつきあいした恋人、あるいは父親、母親、兄弟、あるいは親友と比較して、どの程度の価値の違いがあるか、ね。君たちが、もし法友を最も大切なものと考えるならば、君たちは修行が完全に完成していると、あるいは完全に完成するだろうと、そういう条件を持ったといってもいいとわたしは思う。それはいったいなぜであろうかと。

結局わたしたちの修行というものは、この現象の肉体、あるいはアストラル、あるいはコーザルのデータを入れ替えることがわたしたちの修行だね。どうかなこれは。そしてこの、データを入れ替えるためには、多くの法話を聴き、ものの考え方をその法話にのっとって考える訓練をしなければならない。どうかな。もし、その法話が単なる記憶であってはどうしようもない。しかし、法話をたくさん聴くうちに、その記憶が自己の思考に影響を与え、そして、法話のとおりにもし生きることができるならば、わたしたちはこの迷いの生から脱却することができるんだ。いいかな。

◉法の相続者となれ

よって、わたしたちにとって最も大切なもの、それは法友であると。そして、君たちはわたしの法の相続者とならなければならない。わたしの教えの相続者とならなければならない。わかるかな。君たちがわたしの法の相続者となるならば、君たちは、未来際において大きな利益を得るだろう。たとえ今生で最終の解脱をしないとしても、ね、大きな大きな利益を得るはずだ。しかし、もし君たちが、ね、この現象界の、人間界のちっぽけな、ね、利益というものをね、法の財産より価値があると考えるならば、それは君たちがまた迷いの生に生まれ変わっていく、苦しみの生に生まれ変わっていく、大きな材料となるだろうと。いいね。

だから二番目の今日の話は、最も大切なもの、それは法友ですよということだ。

◉四つの功徳の持ち主

三番目は？　四つの善人。

この四つの善人というのは、言い方を換えるならば、四つの功徳の持ち主とい

うふうに言い方を換えることができるだろう、ね。これも出典は『阿含経』だ。

ここに四頭の馬がいたと、ね。そして調教師が、――いいか、鉄線の首輪を持ってきたわけだ。知っているね。鉄線に釘がついている首輪、知っているか。鉄線に釘がついているの知っているよね。立入禁止のときに使う鉄線だ。その首輪を持ってきたわけだ。そして初め、馬は、――いいか、その鉄線の首輪を見て驚き、恐怖したと。「いったい、調教師は何をこれからするんだろう」と。「いったいわたしにどういう恐怖を与えようとするんだ」と、恐怖したと。いいね。

で、第二番目の馬は、その首輪がはめられたとき、ね、恐怖したと。「いったいこの首輪は何だ」と。「これからどれほどの苦痛を、味わえばいいんだ」と恐怖したと。

そして、三番目の馬は、ね、その鉄線の釘が皮膚を貫き、肉に刺さったとき恐怖したと、ね。「これは痛い」と。「恐怖だ」と。「いったいこの後わたしはどうなっていくんだ」と、ね。

そして、四番目の馬は、それが骨まで貫いて恐怖したと、ね。「いったい、こ

の先どれほどの苦しみがあるんだ」と。「これからどうなっていくんだろうか」と。

実際経典では、この釘がイバラになっているけども、イバラというより、釘の方がね、君たちのイメージにはっきりと焼きつくだろうから、内容を少し変えましたと。

でだ、第一の馬は、人から苦というものを聞き、それは老い、病、そして死というものを聞きね、いいかな、その死に恐怖し、恐怖するだけではなくて、死に対して対処しようとする、そして真理の実践をしようと行なう者、これが第一の馬に相当する。

そして第二の者は、自分の家族ではないけども、同じように周りにいる人の中で、老い、あるいは病、あるいは死を見て恐怖し、そしてそれから離れようと、それを超えようと思ってね、真理の実践を行なう魂と。

そして第三の魂は、今まで周りに死人も出なかったと。あるいは、老死、病というものを、ね、聞いたこともないと。しかし自分の身内に、病、あるいは死と

いうものを見たと。そしてそれを見、恐怖し、ね、真理の実践を行なうと。

そして四番目の馬は、自分自身が死にかかったり、あるいは病んだりしながら、ね、それまでは病について、死について聞いたこともないと、ね。自分自身が病み、あるいは死にかかって、ね、それからはたと気づき、「これは大変だ」と、「真理の実践を行なわなければならない」と思って、真理の実践を行う魂と。この四つの魂を、仏陀釈迦牟尼は善なる魂と、善き魂と、徳のある魂といっていらっしゃるわけだ。

◉徳のない現代人

では、現代がどれほど徳のない人が多いかというと、どうだ、現代人で病にかかってない人いると思うか。あるいは、老いを知らない人がいると思うか。あるいは、人が死ぬという事実を知らない人はいると思うか。であるにかかわらず、死のための準備を行なわず、わずか八十年、ね、長い人でだよ、九十年と。この短い生のために一生懸命、どうだ、生きることだけを考えていると。生きるとい

うのは何かというと、安楽な生活、そして、快をね、心地よさを求める生活、これだけを追求している。どうだ。もちろん、安楽な生活、そして快楽だけを追求しているわけだから、しかも死の準備をしていないわけだから、真理の実践をしていないわけだから、当然、三悪趣に生まれ変わると。いいね。

そして君たちは、その四つの魂と巡り合わなければならないと。それは、君たちが支部活動を行なうとき、あるいは師になって人生の悩みを聞くとき、ほとんどの人の悩みが病、あるいは死、あるいは心の苦悩だ。その人たちを励まし、真理に導くこと、これが君たち菩薩（ぼさつ）の役割であるということを意識しなければならない。いいね。

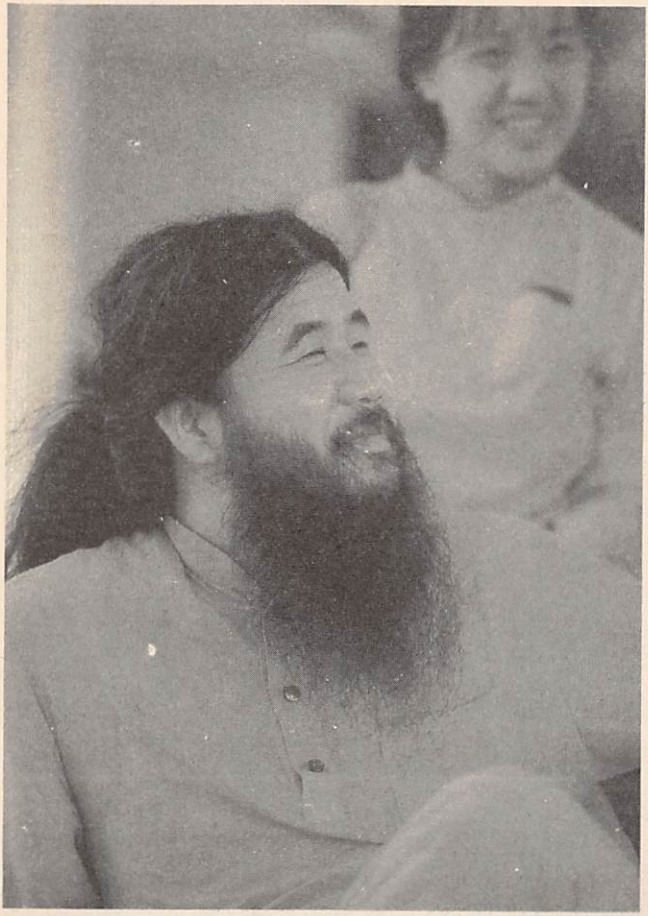
◉心は無常である

そして、ついでにね、人の心というものは無常だから、例えば、今はよき心の持ち主であっても、未来において悪しき心を持つ人もいると。今は悪しき心を持っていても、未来はよき心を持つ人もいると。今は悪しき心を持っていて、未来も

悪しき心を持つ人がいると。今は、よき心を持っていて、未来もよき心を持つ人がいると。いいかな。この、心の無常性についても、君たちは考えなければならない。いいね。そして、今のシチュエーションにこだわることなく、君たちは法を依処として、法を根本として生きなければならない。いいね。

そしてついでにね、ここに貧しく生まれた人がいたと。この人は生きるために盗み、あるいは生きるために殺し、あるいは邪淫をし、嘘をつき、悪口を言い、心には貪り、あるいは嫌悪、あるいは生きるために真理を否定すると。そして、行き着く先はどこだ。完全に地獄だな、これは。地獄であると。これを、〝闇から闇へ至る魂〟というと。

ではここに、悪しき生まれの人がいて、ね、貧しき生まれの人がいて、あまり食べるものもないんだけども、一生懸命善行をなし、生き物を慈しみ、そして盗みをせず、邪淫をせず、嘘をつかず、そして心には、ね、貪りの心なく、あるいは嫌悪の心なく、あるいは真理を探求しようとする心だけが生じ、そして、真理に対して布施をなすと。この人は、来世天界へ生まれ変わると。いいね。これを、



〝闇から光へ生まれ変わる〟というと。いいね。

では次は、ここに金持ちに生まれた人がいて、その金に飽き足らず、もっと金を欲しがると。そして奪い取ると。そして多くの生き物を殺し、邪淫を行ない、嘘をつき、そして死んでいくと。この人は、次の生は地獄へ落ちると。これが、〝光から闇へ転生する〟と。いいね。

はい次。あと一つのパターンしかないね。そしてよき家に生まれ、ね、豊かな家に生まれたがために財を持ち、その財を施し、ね、多くの人に施し、そして、生き物を慈しみ、殺さず、盗まず、邪淫をせず、ね、嘘をつかず、悪口を言わず、心には貪る心なく、嫌悪する心なく、そして真理を実践したいと考えると。真理を求めたいと考えると。この人は、次の生は当然、天界へ生まれ変わると。これを、〝光から光へ生まれ変わる〟というと。ここまでは『阿含経典』の内容だと。

そして君たちは、『マハーヤーナ・スートラ』（オウム出版）を思い出さなければならない。闇イコール地獄、光イコール天。あるいは闇イコール悪行、光イコール功徳であると。いいね、言ってることは。わたしが何を言いたいかわかるね。

これは、仏陀釈迦牟尼の世界観と、わたしが今君たちに話している世界観とが同じであるということを話しているんだ。いいね。そして、君たちは、必ず次の生では光の最も強い世界へ生まれ変わりなさい。いいね。

◉法に執着してはならない？

はい。次は、第一、第二、第三、第四だね。最後だね、今日の。大乗。

これはね、わたしの最も好きな比喩の一つです。しかし、この比喩というものは、よく考えてみないと誤った見解、怠った見解に陥りやすいから、よく注意して聞きなさい。いいね。これはどういうことかというと、人間というものは、修行者というものは執着をしてはいけないと。これはわかるね。では、法はどうなのかと。ダルマはどうなのかという問いに対して、仏陀釈迦牟尼が答えた内容であると。いいか。

ここに旅人がいたと。この旅人は、どうしても到着しなければならない、至らなければならない、ね、場所があったと。そこへ向かって歩き出したと。ちょう

どそのとき、川にぶつかったと、ね。ところが、彼はね、選択を余儀なくされたと。それは、岸を渡るか渡らないかと。岸を渡って行かなければならないと、ね。もちろん、川だから、その川伝いに歩いて、いい場所を選んで渡ることもできると。しかし、こちらの岸は、ね、大変滑りやすく、しかもこちらの岸を歩いて目的地に向かえば、絶壁になってくると、ね。今ここで岸を渡ると、大変便利だし、しかも向こう岸は草原だから歩きやすいと。そこで、彼は近くの木を切り、筏(いかだ)を作り、渡ったわけだ。いいかな。

そこまではよかったと。しかし、旅人はそこでこう考えたと。「この筏は大変便利である」と。「だから、ぜひともこの筏をしょって歩くか、あるいは引っ張って歩くかして持って行きたい」と。君たちはこれをどう思うか。目的地まで大変遠いと。

当然、昔の筏だろうから、壊れやすいし、そして重たいし、ね。確かに、激流を渡るには効果があるけども、それを持って歩くということは、旅にとってはマイナスだよね。どうだ。

で、ここで問題だと。法もこれと同じであると、ね。いったい、この法とこのたとえというものは何を表わしているんだろうかと。どうだ。法も、都合の悪いときは捨てなさいと、そういっているかのように見えるよね。執着すべきではないといっているよね。どうだ。ところが、一方では法を依処としなさいと、法を根本としなさいといっているよね。どうだ。この二つには大きな矛盾があるよね。どうかな。さあどうだ。

◉ステージによって異なる教え

そして、わたしがね、君たちに、勝手に仏典を読んではいけないよと言っているのはそこにあるんだ。なぜかというと、仏典ではここまでの内容しか書かれていないんだよ。そうすると、とり方に大きな間違いが出てくる可能性があると。もちろん、ここで、旅人は使った筏を岸につないで、他の人がまた利用すればいいやということで、つないでおくということが最もいい答えになるわけだね。

ではだ、法を依処としなさい、法を根本としなさいという内容と、この、法に

執着をしてはいけないという内容との矛盾はいったい何だと考えるならば、いいかな、ここに小乗の教えがあると。そして、小乗の教えが完成し、彼岸に到達したと。はい。この小乗の教えによって彼岸に到達するということは、小乗の教えイコール、この話の筏になるよね。どうだ。わかるか。

では、小乗の教えと大乗の教えとは、全く同じであろうかと。もちろん小乗の教えを根本としていると。いいか。それはちょうど、小乗の教えを使って、対岸に渡ったときの意味と同じなんだよ。わかるかな、言っていることは。つまり、ここで筏がなければ、この激流を渡り、対岸に渡ることはできなかったわけだ。いいか。しかし、対岸に渡った以上、そこから大乗の教えになると。そうすると、この小乗の教えにこだわっていては、大乗の教えが受け入れられない場合があるわけだね。

わたしはそのときに、ピンときたと。やはり、仏陀釈迦牟尼は大乗の教えを説いていたんだなと。わかるかな、言っていることは。そして、ね、ブラフマンの世界、あるいは光と音の世界、あるいは、まだわたしが『阿含経典』を読み進め

ていないから、実際には言えないけども、闇で音だけのある世界、あるいは音が消滅して光だけの世界と、いろんな世界が出てくるわけだけど、ね、欲界を超越した状態、これをヒナヤーナを超越した状態と考えればよろしいと。そして、欲界を超えたならば、次は上位アストラルに入っていくよね。どうだ、オウムのシステムでは。これが大乗であるとオウムではいっているよね。どうだ。

そして、その三つ目のヨーガが終わった段階で教えは変わるんだと。変わるといってももちろんベースになっているもの、通過点として小乗の教えを使っているわけだから、それを否定するものではないけども、それにこだわってはいけないんだよということだ。いいか。そして当然、大乗の道を歩くんではなくて、タントラという乗り物に乗るとするならば、また教えは変わってくると。わかるね、わたしの言っていることは。

◉智慧ある修行者となれ

今日は、たくさんの話をした。そしてこの中で智慧ある者はメモをとり、また

復習しようとすると。ところが、無智なる者は右から左へこの話を流し、「あー大変だったな」と考えると。そしてそれは、君たちの一週間後、一カ月後、二カ月後に、「あーわたしは、つぶれそうです」と、「わたしはサマナをやめます」という結果になる。そして、迷いの生に入り、三悪趣に生まれ変わると。一方は、一生懸命記憶しようとすると。そして一生懸命メモをとると。そしてその話の真髄というものを、一人また帰ってね、考えてみると。あるいはワークで疲れたとき、メモを見ながら考えてみると。そして、前者を愚か者であると、愚者であると、徳のない者であるということができると。後者を智慧者であると、未来において仏陀になる人であるということができると。

今君たちは、君たちの一番いい徳が発現し、そして未来において仏陀となるための条件を得たということになると。そして因を得たことになると。その因とはここにいること、条件というのは、つまりはぐくみ育てるものは何かというと、わたしの法話であると。そして、修行の実践であると。

ところが、例えばここにどんなにいい種があったとしても、ね、それを焼いて

しまえばどうなる。芽が出ると思うか。ここに種があったら、豊かな土壌にその種を植え、それが修行の場だ。そして、養分を与えると。あるいは、必要なね、水分を与えると。これが法だ。そして、その種が養分、あるいは水分を求めれば求めるほど、その種の成長は早く、そして綺麗な花を咲かせ、ね、仏陀として多くの人を喜ばせることができるだろうと。しかしここにどんなにいい種があったとしても、その種が養分を嫌い、水分を嫌い、そして、その土壌すら嫌ってしまったならば、その種は滅びてしまうと。これは、君たちの二つの道であると。

そして、智慧ある者は、今までそれに気づかなかったけども、それに、今日、この瞬間に気づき、そしてあしたから努力しようとすると。智慧なき者は、今日の話を聞いても、まだ、愚鈍で努力しようとしないと。その選択は君たち次第だ。

一九八九年四月二日　富士山総本部にて

◆第八話　すべては無常、すべては苦

「真の菩薩の道」

◉ただ一つの世界観

それではね、今日は、仏陀釈迦牟尼の世界観、そしてもう一つね、在家の修行者がいったいどのような心構えで修行したらいい結果が招かれるのかということと、そしてあなた方に備わっている功徳というものについてお話ししたいと考えています。

まず、仏陀釈迦牟尼は、今のオウムの『マハーヤーナ・スートラ』に書かれている三つの世界観をお持ちであったと。いきなりね、この話をするならば、「えっ」と思われる方がいらっしゃるかもしれない。それをどのようにして麻原は証明す

るんだとお考えになるかもしれない。

実はね、経典にこのような内容が載っているんだね。まず、わたしたちは六つの苦しみ、六つの欲望の世界からなかなか脱却できないと。これは何かというと、あなた方も知っている地獄、餓鬼、動物、人間、阿修羅、それから天界だね。この六つの世界。そして、この六つの世界を欲六界、欲望から生じる六つの世界といっているわけです。

そして、その欲六界の上に梵天の世界があると。で、この梵天をオウムの言葉を使うならば、上位アストラル世界だとか、あるいは純粋アストラル世界だとかいっている世界、ここにブラフマンね、梵天は存在していると。

◉輪廻転生の真実

そして、経典を調べていくと、このような言葉があるんだね。仏陀釈迦牟尼が菩堤樹のもとで悟りをお開きになって、ね、そしていろいろと瞑想をしていらっしゃったと。で、梵天の中にバカというものがいて——これは、バカという名前

だね――バカという梵天がいて、その梵天が――この梵天というのは梵天の中の梵天、つまり梵天の王なわけだけども――他の梵天に対して、自分は最高に素晴らしい悟りを開いたと吹聴していたと。それはこの世は常であると。常というのは、決して変わらないと、ね。

で、それを瞑想中見ていらっしゃった仏陀釈迦牟尼は、これはまずいとお思いになって、そこから梵天の世界へお飛びになったと。そしてバカに対して、

「あなたの考え方は正しくない。梵天の寿命というものはものすごく長いから、あなたは生まれたこと、そして滅することをご理解おできにならないんだ。しかしあなたは、確実に死ぬんですよ」と。

バカは、

「そんなことはない」と。

そこで、論争と神通力合戦が始まるわけだけども、それはよしとして、その後仏陀釈迦牟尼がお勝ちになって、そのバカに対して、こうお説きになるわけだね。

「梵天よ。あなたはあなたの前生である光音界をご存じか。」

光音界というのは何かというと、光と音の世界。これは、わたしの体験、『マハーヤーナ』（当時の教団機関誌）だとか、あるいは『イニシエーション』だとか、『生死を超える』（共にオウム出版）だとかね、そういうものをお読みの方は理解おできになると思うけども、このアストラルよりももっと高い世界、それが光と音でできている世界があるんだと、ね。

「そこからあなたは生まれ変わったんだ。そして、その世界は梵天よりももっと高い世界で、寿命はもっともっと長いんだよ」と。

すっかり忘れ去っているバカは、それが理解できなかったと。しかし、その後仏陀の巧みな説法と、それから神通によってバカはそれを理解できたという話がある。

で、この光と音の世界、これをオウムの教義では上位アストラルだということになっている。そして、それよりも、ね、高い世界、純粋な光の世界――これを純粋コーザル世界といっている――があるんだよと。

ということは、わたしが書いた『マハーヤーナ・スートラ』の世界観と、それ

から仏陀釈迦牟尼が、やはり同じように経験でお感じになった世界観とは、全く同じだということになる。そして、それ以外の世界観はないんだと。そして、わたしたちは、ね、その世界を輪廻転生し続けているんだよということだね。

◉劇的な真理との出会い

では、どのようにしたら、わたしたちは高い世界へ生まれ変わることができるんだろうか。

ある大金持ちの長者がいた。長者というのは、今の事業家、あるいは商売をやっていらっしゃる方ということができる。この長者は大変徳のおありになる方で、暇をみてはね、林に女性をたくさん連れていって、お酒を飲んで戯れていらっしゃった。しかし、心はいつも空しさで満ちあふれていた。

その日も、その長者はたくさんの女性と、そして酒、ね、これを持って林に行かれた。そして戯れていらっしゃったが、ふと空しさが襲ってきて、その女性たちをおいて、

「ちょっと散歩に行ってくる。」と言って、林の奥へ奥へと入って行かれた。そこには、ちょうど瞑想中の仏陀釈迦牟尼がいらっしゃって、その仏陀釈迦牟尼の黄金色の輝き、これを見てね、その長者は「なんと素晴らしい聖者と巡り合うことができたんだろう」ということで、仏陀釈迦牟尼を礼拝した。そして、礼拝したその長者は、教えを請うた。

その教えというのは、五戒、ね、五戒というのは殺生をしてはいけませんよ、盗みをしてはいけませんよ、邪淫をしてはいけませんよ、そして、嘘をついてはいけませんよ、それから、酒を飲んではいけませんよ、という五戒を授かるわけだ。

そして、もともと徳の高かった長者は、ね、この世の無常、ね、すべてのものは変化するんだということを聞いて、家へ帰った。そして、自分の妻たち、四人いたわけだけど、その妻たちに宣言した。

「わたしは、今日から完全なる禁欲の生活に入る。よってお前たちは、例えばここに残る者は残ってもいいし、あるいは、他の人と結婚したい人は結婚しても構

わない」と。

すると、第一夫人は申し出た。

「わたしは結婚しとうございます」と。

まあきっと第一夫人には性欲があったんだろうね。それで、その長者は、

「わかった。では、どのような人と結婚したいか」と。

「いや、それはあなたの推薦なさる、あなたの信頼なさる、最も優れた方と結婚しとうございます」と。

「わかった」と。

ということで、自分の右腕として働いていた人を呼んでね、で、

「わたしの妻と結婚しなさい。」

という話をしたと。

当然、右腕だった彼は恐怖した。「いったい、わたしのご主人は何を考えていらっしゃるんだろう」と、ね。しかし、もう既にそのときには、この長者には煩悩はなかったわけだね。だから長者は、

「いや、何も恐れる必要はないんだよ。あなた方が、二人がね、一生暮らしていくだけの財産をあげるから、とにかく幸せに結婚しなさい」と。

で、今までの経緯を、その右腕として働いていた侍者にね、説明をして、侍者も納得して結婚した。

◉欲界を超える

そして、その彼は、その後もその長者に尽くすわけだけども、その長者自身はそれから莫大なる布施をね、仏陀釈迦牟尼の教団になした。そしてその後、釈迦牟尼の教団だけではなくて、昔のインドというのは大変貧しかったから、貧しい人に対してどんどんお布施をなした。

そして、あるときね、実はその長者というのは宝石商、外国から船でね、宝石を買ってきて、それをインドの国内で売るという仕事をしていたわけだけども、その船が沈んだ。それにもかかわらず、布施をやめなかったと。

そこで、仏陀釈迦牟尼の高弟たちは心配した。あのように布施を続けていれば、

いつかは貧乏になってしまうと。食べられなくなってしまうと。そこで、その長老を代表してアーナンダがその長者と会って、

「布施をおやめください。このまま布施をお続けになると貧乏になってしまうから」と、ね。

そこで、長者は何と言ったか。

「アーナンダ様がそうおっしゃるのは不思議でなりません。わたしは、いっさいを布施したいと考えているんです。それはなぜかというと、人の魂というものは、まずは貧しい状態から豊かになりたいと考える。そして豊かになったならば、次はもっともっと豊かになりたいと考える。そして、一国の王になり、一国の王になった後は、次は聖天輪王、徳によって治める王になりたいと考える。

そして、それを達成したならば、次はもうこの世で何もなすことはないから、髪を切り、そして僧となって出家し、解脱をしたいと考えるようになるんです。そのためのお手伝いが今生でできればいいんだ。そのための自分の財産なんだから。」

ということで、すべてを布施してしまう。

「それがわたしの発願なんだ」と。

「ああ、そうでございましたか。あなたのその崇高な心を、わたしは理解できずに。」

と言って、まあ、アーナンダは赤面したわけだけども、で、それに対して仏陀釈迦牟尼はどのようにお考えになったかというと、

「彼はもうこの欲界に生まれ変わることはない。なぜならば、欲望をすべて断じ尽くしたからである。それは、貪りもなければ、嫌悪もなければ、あるいは執着もない。あるいは無智もない。よって、彼はこの六つの苦悩の世界、欲界に生まれ変わることはないんだよ。」

というふうにお説きになったという話があるわけだ。ここまでなせば欲界から脱却できると。

ところが、まだまだ欲望のある人は、例えばお布施をすると。そうすると、現世的に幸せになりたいんだと。あるいは来世、ね、欲望の満足できる高い世界へ

生まれ変わりたいんだと。この背景にあるものは当然欲だから、ね、当然欲だから、欲界へ生まれ変わると、ね。すべては、原因、それから条件によって決まるんだということ。これが真理の理論の背景となっているもの。

◉真の菩薩の道とは

仏陀釈迦牟尼も四つの真理をお説きになったと、ね。それは、この世はすべてが苦であると。そしてその苦しみというものは、条件によって必ず成立するんだと。そして、それを滅するための方法があるんだと。それが八つの正しい道であるという四つの真理なんだけども、その真理を根本として修行するならば、例えば先程の長者みたいにね、在家にいたとしても、本当の意味での高い世界へ生まれ変わることができるんだと。そして、天界、ね、この天界もたかだか天界であるということを、あなた方は意識しなければならないと。

実は、わたしもある発願をしている。それはまだね、今あなた方に明かすべきときではないから明かさないけども、おそらくこれは現象化し、そして、すべて

の魂のためになるんではないかなと考えています。そして、先程の長者の生き方、これがわたしは真の菩薩の道だと考えているわけです。そしてこの中から、一人でも二人でも三人でも、ね、できるだけ多くの人が、その真の菩薩の道を歩いてほしいなと考えています。

一九八九年四月八日　金沢支部にて

◆第九話　苦しみを打ち破る原動力

「布施と持戒の恩恵」

◉布施・奉仕――高い世界への唯一の道

いったい、どのような修行を行なったら、わたしたちは幸福になり、どのような修行を行なったら、わたしたちは不幸になるのであろうか。

これについてね、面白い説話がある。それは、「ディーガ・ニカーヤ」の中にあるお経なんだけれどもね――これはお釈迦様のお経なんだけれども――昔、今から二千五百年前だね、仏陀釈迦牟尼の高弟にクマーラ・カッサパという人がいた。

そのクマーラ・カッサパが、ある都に行ったときね、そこを統治している、今

でいう、司令官みたいな人だね、その人と論争が起きた。

その司令官は、現代人と同じように、死後の世界はないんだということを信じていた。ま、それに対してクマーラ・カッサパは、いろいろな比喩をもってそうではないよということを教え諭した。そして、最終的にはその司令官は、クマーラ・カッサパの教えに帰依し、そして布施を行なった。しかし、それは、もともとね、あまり質の良くないものの布施であったと。

で、その布施を任された部下は、そこで独り言を言った。

「わたしは来世、わたしの将軍とは一緒に転生しないだろうな。」

それを聞きとがめた将軍は、その部下を呼んだ。

「なぜお前はそういうことを言うんだ。」

「いや、将軍、それは簡単でございます。将軍は、今布施されているような物をお食べになるでしょうか。あるいは、お召しになるでしょうか。」

そうすると、将軍は答えた。

「いや、わたしはああいう物は食べないし、着ない。」

「では、どうして自分で食べないようなもの、あるいは着ないようなものを布施するんですか。」
「ではお前は、お前の身分で、納得できるような布施ができるのか。」
「もちろんできます。」
そこでその部下はね、膨大な自分の財産をはたいて、膨大な供物を用意し、そして、あちこちの人に大いに布施をした。
それによって、その部下は天界へ生まれ変わった。そして、その将軍は、鬼神に生まれ変わったんだね。鬼神というのは鬼の神様と書いて、要するに、人食い鬼みたいなものなんだけどね。そういう逸話がある。
この説話はなかなか興味深い。なぜ興味深いんだろうか、ね。わたしたちが、本当に幸福になるためには、わたしたちの最も大切なものを布施する、あるいは奉仕をして、徳を積まなければならない。そして、それによってのみ、わたしたちは高い世界へ生まれ変わることができるんだということを表わしている、ね。

◉真理への帰依と実践――培われる真実の力

近ごろ、オウム真理教も大きくなってきて、いろいろなレベルの信徒さんがいらっしゃる。で、質問される。

「わたしは、入信して半年になるんですけども、一向に事態が好転しないんですよ。どうしてですか」と。

わたしは、その人にこういう質問をする。

「あなたは、師の指導、あるいはわたしの指導どおりの行法、あるいは功徳を積んでいますか」と。

「いや、それが積めないんですよ。」

「なぜ積めないのですか。時間がないのですか。」

「そうではありません。」

「なぜですか。」

「いや、何となく積めないんです」と、ね。

功徳というのは、教学の進んでいる人はよくわかるとおり、車にとってはガソ

リンみたいなものだよね。どうだ、これは。どんなにいい車があったとしても、ガソリンがなければ走ることはできない。そうでしょう。どうだ。そして、この信徒さんもね、そのガソリンを入れることを忘れて、「わたしの車が走らない、走らない」と言っていらっしゃるわけだ。

ではいったい、なぜ功徳を積むことができないのだろうか。これは、勇気なんだね。これは仏典にしろ、それからわたしの教えにしろそうだけど、自分自身が追い込まれたとき、自分自身が本当に苦しいとき、いったい何に頼るのか。それは自分自身なのか、それとも真理なのか、それともね、正しくない一時逃れの法なのかということになると。

もし、自分自身だとするならば、自分を磨き上げるようなね、それまでの意志の訓練というものが必要である。もし、真理、あるいはグル、あるいは師に対して帰依をするんだったら、普段からその実践を行ない、特に追い込まれたときにこそ言いつけを守り、実践するということが必要である。もし、正しくない法に帰依をするんだったならば、それは、そのときは仮に逃れることができたとして

も、その後、より多くの苦しみが返ってくるよということを理解しなければならないと。

ところが、人間はそうではないんだね。例えば、今まで正しくない法を実践していて、一時的に恩恵を受け、その後ひどいことが返ってきたときにね、教団を恨む。自分自身の無智を恨むのではなくて、教団を恨む場合が多いと。

ではいったい、正しくない法というのは、何にたとえることができるのだろうか。これはヤクザにたとえることができる、ね。ヤクザというものは、一時的にお金を出してお願いをすれば、ねえ、必ずそれをかなえてくれる。しかしそこでね、ヤクザとの正しくない関係ができる。それによって、その後はもっと大きな苦しみに至ると、ね。

ところが、真理というものは、自力的な要素が強い。つまり、帰依をするときにはその帰依の印として、布施だとか、あるいは法施だとか、十の戒めを守るとかいった教えを実践しなければならない。それは、なかなか大変である。しかし、真理というものがあなた方の心の中に根づいたならばね、いかなる魔でも、ある

いはいかなる苦しみでも打ち破るだけの原動力を、あなた方に与えてくれる、ね。果たして、そのどの道を選ぶのか。

そして、これからの話はね、「わたしは真理の実践をしていくぞ。わたしは正しい法の実践をしていくぞ」と思っていらっしゃる方だけが、よく集中して聴けばよろしい。

◉最高の財施——真理への導き

わたしたちを幸福にしてくれるもの、それは六つの極限である。あるいは出家した場合は、八つの正しい道であるということができる。

では、在家の中で幸福になるためには、いったい何を実践すればいいのか。それは、三つの布施と、それから十の戒めであるということができる。

では、三つの布施とは何か。それは、まず財を施す財施である、安らぎを与える安心施である、真理を流布する法施である。

では、この財施は、いったいどういう力があるんだ。財施には、三つの意味合

いがある、ね。弱い順にいくならば、まず学校とか、あるいは保育園とか、あるいは病院とかいうものに布施をする。つまり、社会的な事業に布施をする場合であると。

これは、現代においては真理の実践者などいないからね。例えば政治家だって、ね、例えば、今社会問題になっているリクルートでわかるとおり、ほとんどの大物政治家はそんな事件に巻き込まれている、ね。だから、その布施はそのオーナーの懐に入るか、あるいはその途中の経費として消えていってしまう。そして、例えば病院建設に役立ったとしても、それは真理を実践するための病院ではないから、結局利益を生むためのファンデーションになってしまうと。よって、この功徳というものは、その布施をした人が未来においてね、例えば病院の院長になるとか、あるいは学校の校長になるときにのみ、役に立つ布施であると。

では次に、現代ではね、アフリカ、あるいは東南アジアといったね、貧しい国々がある。そこで食べられないような人たちに布施をする場合は、いったいどういう効果があるんだと。日本の仏典はすごく曖昧だから、どんなものに対する布施

も同じように扱っているけど、実際はそうではない。もし、外国の貧しい人に布施をするならば、あなた方がね、本当に未来において食うや食わずで困ったとき、必ずやだれかが、あなた方のおなかを満足させるようなね、手の差し延べ方をしてくれるだろう。

そして、一番目の布施の功徳に比べたら、二番目の布施はね、百倍、つまり一番目の布施を一とするならば、二番目の布施は百のね、効果があるといわれている。

そして、第三番目の布施は、真理に対する布施であると。これは大変難しい。真理というのは、六つの極限を説き、それから実際に実践している教え、あるいは団体を指す。あるいは、正なる八種の道を正しく行じている団体を指す。このようなものに対する布施はね、真理の流布に使われる。そして、多くの人の煩悩を除去するために、あるいは高い霊性に導くための布施であるから、これは財施の中でも最高の布施といわれている。

そしてこれは、二番目の布施の百倍の効果があるといわれている。ということ

は、初めの布施から比べるならば、一万の布施ということになるわけだ。

では、この恩恵とは、いったいどのようなものがあるのだろうか。それは、あなた方をいろいろな角度から、未来において真理に導いてくれる、そういう恩恵である。そして、あなた方が人生において困ったとき、インスピレーションを与えたり、あるいはね、人の口を借りて正しい示唆を与えてくれるような結果が招かれると。よって、これが財施の中の最も大きな布施ということになる。

◉安心施、そして法施——もたらされる苦しみからの解放

次に二番目の安心施は、いったいどういう効果があるのだろうかと。これは、あなた方が未来際において苦しんでいるとき、だれかがあなた方に安らぎを与えてくれる布施である。これにも三つある。

最も効果のない布施は、あなた方が実際苦しくなくてね、あなた方の周りの人に、適当に安らぎを与える場合である。第二番目の場合は、あなた方も少しは苦しいんだけど、しかし、それよりももっともっと苦しんでいる人に対して安らぎ

を与える布施。そして三番目の布施は、あなた方が最も苦しんでいるとき、その状態で他に安らぎを与える布施である。

そしてこれは、初めの布施を十とするならば、二番目の布施は百であると、三番目の布施は、千の効果があるといわれている。それはなぜかというと、わたしたちが輪廻転生を繰り返すとき、その本質は心であるからだ。その心を豊かにする、成熟させるためにおいては、苦しければ苦しいほどその条件が整っていることになる。よって、自分たちが最も苦しいときの布施、これは最高の布施であるといわれている。

そして、三番目は法施である。これはね、真理の法施をする場合と、真理でないものを法施する場合がある。もし、真理でないものを法施するとするならば、それは未来において、あなた方が苦しんでいるとき、真理でないものの誘惑を受けることになるだろう。そして、正しくない道に入り、そして苦しみの世から逃れることができない。

もし、あなた方が真理の法施を徹底的に実践するならば、あらゆる角度からあ

なた方には、真理からの誘いがある。そしてそれによってね、いつの世か、あなた方は正しい悟り、あるいは成就といった状態に到達できるだろう。

これが、三つの布施である。

◉身の行ないの戒め——豊かで穏やかな生活のために

そして、十の戒めがある。

もし、生き物を殺さず、慈しむことができるなら、周りの人があなた方を好きになり、そしてあなた方も心穏やかになり、ね、そして長生きをする。で、未来において天界へ生まれ変わるだろう。

もし、あなた方が盗みをせず、人にものを施す布施の実践をするならば、いつしかあなた方は、物質的にね、豊かな人生を送ることができるようになるだろう。

それはなぜであろうか。貪りのカルマというものは、わたしたちに必要のない出費をさせる。そして、貪りの心というものは、とめどない欲求をわたしたちに起こさせる。得ても得ても足りない欲求を起こさせると。それによって、わたし

たちは少ない財産を、あるいは少ないお金を使い果たしてしまう。そして、サラ金やあるいは銀行から借りて、わたしたちはどんどん自分たちの首をね、絞めてしまうと。その結果として、わたしたちは物質的に不自由になってしまう。

ところが、人のものを貪らず、盗まず、施す訓練をしていれば、足るを知るようになる。少しのもので満足するようになる。そして、実入りは一緒である。そして、その中の一部を、例えばきちんと布施をする。そうすることによって、心は豊かになると、ね。それだけではない。当然、使わないわけだから、経済的にも豊かになってきてね、本当に必要なとき、大切なときに自由に経済を働かせるようになる。あるいは、人に好かれるわけだから、物も集まってくる。これが、「盗まず施せ」という理論である。

三番目の邪淫はどうだろうか。もし、結婚している者が、妻以外の女性、あるいは夫以外の男性と性的な交わりをしなかったならば、その人は別に、妻に対して、あるいは夫に対して後ろめたい心を持つ必要はない。よって、絶えず心は安定した状態になる。そして、夫は妻だけを見、妻は夫だけを見るから、当然夫婦

の仲は睦まじくなる。つまり、邪淫をしないだけで心は安らぎ、そして家庭も円満に収まる。これが、邪淫をしない効果である。

◉口・心の行ないの戒め——最高の安らぎを得るために

嘘をつかなければどうなるだろうか。この世界は、コーザル世界、アストラル世界、そしてこのグロス・ワールドね、現象界と三つに分かれている。そして、言葉というものはアストラル世界と関係があると。もし、わたしたちが絶えず嘘をつくならば、それはアストラル世界をけがす結果になる。それによって、この現象界で正しくない働きが生じ、そして結果的には何が真実で何が真実でないか、わたしたち自身見えなくなってしまう。

そして、もしわたしたちが嘘を実践しなかったならば、嘘というものを排斥したならば、アストラル世界のデータとこの現象界のデータは同一になる。そして、わたしたちの言ったことが現象化すると、ね。このような形で、綺語ね、それから悪口ね、そして両舌ね、そして貪り、嫌悪、そして無智といったものをね、わ

たしたちが完全に克服し切り、必要のない言葉を語らず、人に哀れみのある言葉を語り、悪口を言わず、決して仲たがいさせるような言葉を語らず、人と人とを和合させるような言葉を語る。そして、心には貪りを持たず、絶えず施す心を養う。心には、嫌悪する気持ちを持たず、絶えずすべての人の魂の成長を願う。そして、真理のみを淡々と見つめると。このようになったならば、わたしたちは最高の安らぎ、最高の幸福というものを手中に収めることができるだろう。

今日は時間がないから、全部は説明できないけども、最後にね、もし綺語をなさなかったならば、どのようになるであろうかと。必要以上の言葉を語らず、実践的な人だから、当然目上の引き立てにあうだろう。そして、周りもその人を信用するようになる。もし、悪口を言わず、ね、絶えず相手のいいところを見つけ、誉め称える訓練をするならば、すべての人から好かれるようになるだろう。そして、尊敬を集めるようになる。もし、仲たがいさせる言葉を語らず、和合させる言葉を語るならば、友がたくさんできるだろう。しかも、正しい友がたくさんできるであろう。

もし、完全に貪りを滅却するならば、すべての物質的願望がかなうだろう。もし、嫌悪の念を捨て切るならば、嫌悪から生じる怒りの念を捨て切るならば、間違いなく天界へ生まれ変わるだろう。もし、無智を否定し、真理の実践を行なうならば、いつしか最終的な悟りに到達するだろう。

このようにわたしたちは、簡単なね、三つの布施、十の戒めを実践することによって、大いに恩恵を受けることができるんだ。それをなすなさないは、あなた方次第である。

はい、では今日の説法を終わります。

一九八九年四月十六日　札幌支部にて

◆第十話　すべての苦楽を超越するために

「煩悩の破壊――本当の自由・幸福・歓喜を目指して」

◉満足という名の幻影

君たちは、アナータピンディカ長者の名前を知っているだろうか。彼は、初期のころから仏陀釈迦牟尼に仕えた在家信徒である。そして、それまで豊かな生活をし、何不自由なかった彼は、仏陀釈迦牟尼と巡り合い、そして、その満足そのものが幻影であるという教えを受け、そしてその幻影というものは無常というものを根本にしているという教えを受けた。

そして、仏陀釈迦牟尼の教えに従い、在家信徒として粗末な衣をまとい、在家において教学をし――これはまあ、担当はマハー・モッガラーナが中心に行なっ

たみたいだけどもね――そして、布施の実践、奉仕の実践を行なったと。彼の布施については、あなた方もご存じのとおり、例えば祇園精舎がその典型的なものである。そして、奉仕活動においては、朝夕と、その祇園精舎を掃き清めること、これに専念したそうだ。

◉迫られた選択

では、いったいこれだけの極限の修行を行なった人が、在家信徒において極限の修行を行なった人が、どこに生まれ変わったのだろうか。それは君たちもよくご存じのとおり、「天子相応」にある兜率天である。つまり、第四天界。教義を学び、そして真理との縁は外れないようにし、ある程度の欲楽があり、ね、そして、菩薩の欲界の基地であると。

しかし、これは言い方を換えるならば、これだけ極限の在家の修行をしたにかかわらず、天界であると。すると、ましていわんや、どうだ君たちは。真理というものがある。その真理の実践、これをほんの少し、ちょうどあまりうまくない

そばに、ね、ペッパーを振りかけることによって、その味が変わるのと同じように、ちょっと味つけをし、そして、自分はいかにも真理の実践をしているんだという気持ちを持って対応をしている人たちと比較してだ、このアナータピンディカそのものの修行――まあ、別名スダッタというわけだけども――スダッタそのものの修行とは、どちらの方が激しかっただろうかと。どうですか。当然、スダッタの方が激しい修行をしたわけだよね。

ということは、今この現象界において、二千五百年前よりも情報が氾濫し、わたしたちの心をけがすデータというものがたくさんある中で生きていて、そして味つけ程度にしか修行しない場合、わたしたちの行く先というのは、いったいどこだろうかと考えた場合、どうだ君たちは。どうですか。

そしてわたしは、去年の十月から今までのマスコミの流れ、その他を見て、振り落とされたんだなと。一つの選択を迫られたんだなと。つまり単に、オウム真理教の本を一冊、あるいは二冊読んで、「あ、これはちょっといいや、入ってみようか」と思ったような軽い人たちは落ちていったと。

そして、オウム真理教、この真理教の「真理」という由来、これは何かといったら、あなた方が未来においてすべての苦楽を超越する、その教えという意味だから、もしその教えが実践できないとするならば、同じように、当然落ちていくんだなと。

◉真理——煩悩を破壊する教え

わたしの説く教え、これは今の日本では大変激しい教え、狂気の教えといわれる。そしてわたしは、その狂気の教えというものを認めています。なぜならば、狂気にならない限り本当の意味での煩悩を破壊し尽くさない限り、あなた方に絶対的な自由・幸福はないと。

例えば在家において、悟る、あるいは解脱することを目的とし、あるいは天界へ行くためにあなた方が道を歩き出した以上、その道案内人であるね、わたしが適当なことをもし言うとするならば、それは適当ではない。それは、正しくない。それは、グルとして失格であると。よってわたしは、いくらマスコミに叩かれよ

うが何であろうが我が道を行くと。そしてそれが、グルの役割であると考えている。どうだ君たちは、それに対して。

今日ね、集まっている信徒さんは静かだけども、どうかな。もしそうでなければ、わたしはあなた方に真理を説くことはできない。

◉わたしたちは真理を実践している

人間が人間の限界を越えさせるとき、ね、グルの力、そして真理の力、そのエネルギーというものが、いかにわたしは偉大であるかの一つの証明であると考えています。そしてわたしは、わたしの生きている限り、真理を説き続けていきたい。

昨日、バグワン・シュリ・ラジニーシが亡くなったそうです。彼は、彼のセオリーにのっとり、そして、彼は彼の宗教的な理念にのっとり法を説き、そして死んでいった。そして彼の晩年というものは、アメリカ合衆国とぶつかり、ね、あまりいいものではなかった。

そして今、オウム真理教がいろんな形で叩かれてる。もちろん、わたしとバグワン・シュリ・ラジニーシのね、教義というものは全く別である。しかし、一つ言えることは、宗教そのものは反社会性であると。そして、反社会性とは何かと。

例えばだ。ライオンの世界においてだ、目の前を、ね、餌である、例えば鹿の群れが通ってたとしよう。それを、ライオンの一群が襲いかかり、殺し、食べたと。これはライオンの社会にとって社会性であろうか反社会性であろうか、どうだ。じゃ、もし「これは殺生である」と、「これは殺生であるがゆえに、わたしはこの殺生に参加することはできない」と考えたライオンがいたとしよう。このライオンはライオンの社会にとって、反社会性だろうか社会性だろうか。ということは、この反社会性そのものは、どうだ君たち、悪い言葉だろうか、いい言葉だろうかと。これがもし、ね、社会が悪だとするならば、社会に対して悪であるならばいい言葉である。社会に対して善であるならば、悪い言葉であると。

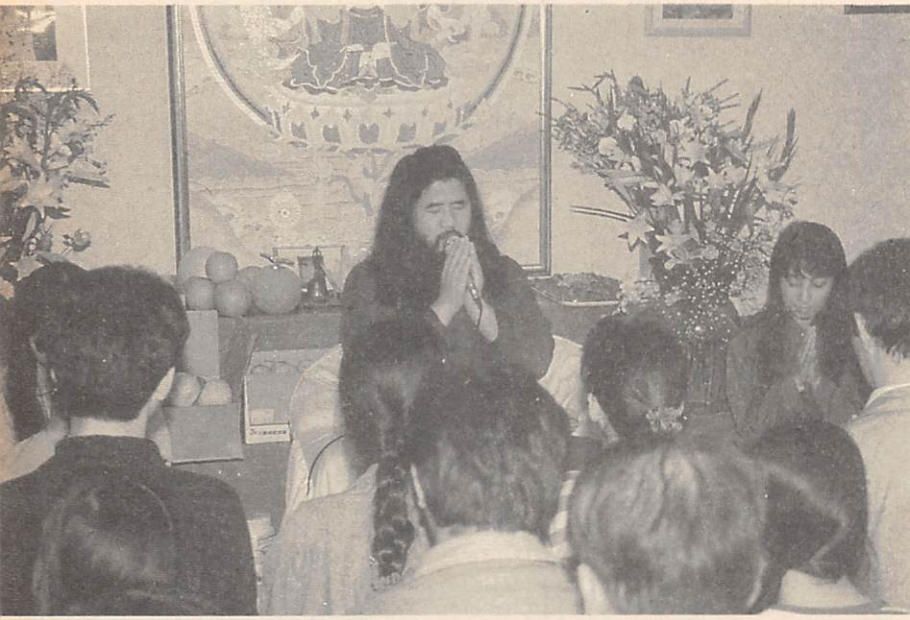
そして、この欲界を構成しているものは、煩悩だろうか煩悩でないだろうか。どうだ。執着というものを根本とし、嫉妬、ね、あるいは貪り、無智といったよ

うなものが根源にあって形成されている社会、そうだね、だとするならば、この社会に対して、そういう煩悩を壊滅する、止滅する作業を行なっている者たち、これは当然、反社会性である。しかもそれは称賛されるべきことであると。どうだ、君たちは。

◉ボーディサットヴァの役割

そして今、この東京の人たちの心というものが少しずつ変わり、応援する人たちがどんどん増えてきている。そしてわたしは、この東京を、一つのミニ日本だと考えています。ミニ日本とはどういうことか。これを土台とし、全国的にオウム真理教の布教活動を思い切ってやっていきたいと考えている。なぜならば、わたしたちは、他の者に後ろ指を指されるいわれはない。どうだ。わたしたちは真理を実践している。どうだ。そしてわたしたちは、ね、それによって多くの人たちを救済することができる。どうだ。

例えば、ここに一人の覚醒剤中毒患者がいたとしよう。いいか。この人に覚醒



剤を打ってあげることは善だろうか悪だろうか。しかし、現代のマスコミ、あるいは現代の社会そのものは、それに覚醒剤を打っているわけだね。わかるかな、言っていることは。何を隠そう、この覚醒剤とは煩悩である。

オウム真理教の信徒だろうと、あるいは悪業をなしている方々だろうと、悪をなせば悪い世界へ行く、善をなせばいい世界へ行く、これが真理だ。そして、どちらの道を選ぶか、どちらの生き方をするか。これは、あなた方が自分たちの胸に手を当てて考えなければならない。

もし、この社会がいい社会だとするならば、こんなに多くの苦しみというものが存在するだろうか。どうだ。つまり、この世の中の悪い部分は悪い部分で、死滅しなければならない。いい部分はいい部分で増大しなければならない。これが、わたしと、それからわたしの弟子、それから信徒の役割である。そしてそれこそが、菩薩——これをひっくるめて菩薩というけどね、ボーディサットヴァの役割である。どうだ。

◉未来に輝け！　オウム真理教

しかし、もうそろそろカルマも落ちていいころじゃないかと。これからは、あなた方も、そしてサマナも、そしてわたしも、真理を頒布する。ね、ここで、わたしはシヴァ大神に対して誓いたいと考えているんだ。何を誓いたいか。これから、今日を境に、真理の実践者として、もうカルマも十分に落としていただきましたから、堂々と真理というものを広く広めたいと。そして、そのためには、いろいろと思い切った手段を使いたいと考えています。

君たちは、これだけめちゃめちゃに叩かれているオウム真理教、この意味合いも含めて、どのように考えていますか。わたしは、信徒の方々、あるいは弟子衆にね、多くの、ある意味での迷惑をかけていると考えている。その点はおわびしなければならない。しかし、大乗の救済、これをもしわたしが断念しないとするならば、このいろんな現象そのものが、ちょうど膿を出すような現象とそっくりであると。

そして、膿の出切った今の真理教の状態そのもの、一つの意思にのっとり動い

ている真理教そのもの、これは、いずれ世界の最高宗教としての地位を占めるだろうと。そして、それは中身、それから中身だけではなく教団の大きさとしてもね、必ず世界の最高の宗教として占めることになるだろうと。これは、考えているのではなくて予言です。

わたしは、君たちに言ったよね。警察に叩かれるとも言ったし、社会に叩かれるとも以前から言っている。どうだ。そしてそれが現象化したにすぎないと。次は世界最高宗教と。そして、多くの人たちを真理の船のどこかのパートに放り込むと。そして、少しでも高い世界に導くように、ね、みんなで努力しようじゃないか、どうだ。

◉堂々と、そして激しく

もう一度繰り返そう。あれだけ在家の修行を一生懸命なさったアナータピンディカ長者。そして、布施の実践をなさったアナータピンディカ長者、彼ですら欲界の第四天界、兜率天にしか生まれ変われなかったと。なぜならば彼の心にはまだ

煩悩というものが若干残っていたからであると。いいね。

ということは、あなた方がどの程度激しい修行をしなければならないか。わたしは、これからよりいっそう、あなた方を叩いていこうと考えている。そしてあなた方に、できるだけ早く、本当の意味での自由・幸福・歓喜というものを与えたいと考えています。いいね。

一九九〇年一月二十一日　新東京本部にて

◆第十一話　悪業が尽きたときに得るものは

「五蘊の浄化がもたらす幸福」

◉アナータピンディカ長者の布施

これはおそらく、来月の信徒用『マハーヤーナ』に載る『南伝大蔵経』の中に詳しく載っている内容だと思うから、しっかり読むようにしてほしいんだけどね、皆さんは、アナータピンディカ長者というのをご存じだろうか。彼は仏陀釈迦牟尼のために、仏陀釈迦牟尼の救済計画のために、そうだね、今でいくとどれぐらいになるのかな、ものすごい金額をお布施なさった方だ。まあ、何十億、何百億といってもいいのかもしれない。

皆さんの考え方の中には、どうですか、これだけ布施をするといいことがどん

どん返ってくるというふうに考えないだろうか。実は、アナータピンディカ長者は、仏陀に帰依し、サーリプッタに帰依し、そしてそれから仕事をしなくなったと。仕事をしないとはどういうことかというと、財施と同時に朝、昼、正確にいうと早朝、それから朝食後、そして夕方とこの三回、奉仕作業に出向かれたそうだ。

つまり財施、それから奉仕行という二つを徹底的に行なわれた方なんだね。で、毎日五百人の比丘、つまり釈迦牟尼の弟子たちに食の供養をなさり、衣服、医薬品、それから塗香――つまり香だね――等のお布施をなさった方だ。

で、どんなに大金持ちであっても、こういう生活を続け、仕事をしなかったら、どんどん経済的に貧しくなると。しかもその上に、彼は貸したお金をいっさい取り立てない主義だったそうだから、そのお金は返ってこないと。そして、余力の財産である金、まあ、一億数千枚というふうに考えてください。これを堤防に埋めていたら川が決壊し、それが沈んだと。ここで問題なのは、アナータピンディカ長者が仏陀に帰依していたときにその現象がすべて起きていると。

◉四階の女神の話

そして、アナータピンディカ長者の家は八階建てだったそうだが、その四階に女神が住んでいたと。この女神は仏陀の弟子たちが来ると、徳の差によってその空間に生活することができず、必ずその空間から出て行かなければならないと。で、まあ、いろいろとアナータピンディカ長者の周りの者をたきつけたり、あるいはアナータピンディカ長者に対してもクレームをつけたと。ところが、そういう女神は必要ないから出て行きなさいという話になると。

このときがアナータピンディカ長者にとっては、最も経済的に悪い状態のときであると。つまり、生きていけるかいけないかわからない状態のときに、それでも彼は供養し続けたと。

そして、この女神は住むところがないから守護神、つまり地神だね、地の神にお願いして、アナータピンディカ長者に謝って、もう一回その四階に住まわせてくれと頼んでくれという話をする。ところが、地神は、仏陀あるいは比丘衆の功徳を知っているから、そういうことはできないよと。

次に四天王衆天のところへ行く。それも断わられる。次に、三十三天の王であるインドラのとこに行くと。で、インドラはそこで女神を諭すと。

「あなたよりずっと徳の高い者たちの集まりである仏陀と、そして比丘たちに対してそういう真理をねじ曲げたような難詰をしてはならない」と。

「あなたが帰る道はただ一つしかない」と。

「それは堤防決壊によって川底に沈んでいる一億数千枚の金貨と、それから取り立てることのできない金貨一億数千枚と、それからもう一つ、今持ち主がもういない一億数千枚の金貨――合わせて五億数千枚になるわけだけど――その五億数千枚の金貨をもって金庫を満たし、わびなさい」と。

で、女神はその金貨の取り立て、あるいは川底に沈んでいる金貨、あるいは持ち主のない金貨等を一夜にして回収し、そして、それをアナータピンディカ長者の金庫に満たすと。で、アナータピンディカ長者のところに行き、わびを入れると。

普通はここで凡夫だったら喜ぶ。ところがアナータピンディカ長者は法にのっ

とり、つまり仏陀釈迦牟尼のところにその女神を連れていき、そして、どのようにしたらいいかという話をご相談なさると。仏陀釈迦牟尼はそれに対して一つの法をね、もってお答えなさるわけだ。

◉仏教の長いタイムスケール

つまりそれは何かというと、例えば今現在、悪い現象が起きているから、それは悪であろうかと、それはその人にとって本当に悪い現象なのだろうかと。つまり、それは善因が満ちるまでは途中において悪い現象が起きるんだよと。あるいは、今いい状態であっても、悪因が果を生じるまではいい現象が起きてるかのように見えるんだと、ね。

つまりどういうことかというと、アナータピンディカ長者がどんどん貧しくなると。それは、仏教的見方からいうならば、今までなした悪業の清算の時期であると。それと同時に、アナータピンディカ長者が積んでいた功徳、これはいつか結果を招くであろうと。それが、女神が集めてきた金貨ということになるわけだ

けども。しかもそれだけではなくて、その徳によって、アナータピンディカ長者は第四天界である兜率天へ生まれ変わると。つまり、タイムスケールが大変長いわけだね。

◉五蘊のけがれを善因に変える

これは、わたしの修行の途上にもいろんな現象が起きている。それは、もうまさに苦しみの連続であったと。客観的に見たらね。しかしわたしは、求道心というのは全く揺らぐことがなかった。そしてそれだけではなくて、逆の言い方をすれば一つの快感すらおぼえていた。

それは何かというと、きっとわたしの中に根づいている修行者としてのカルマが、今まさにカルマを落としている時期であると、このカルマはいずれ落ち切ると。そして落ちた後には、今までわたしがなしてきた善因の果しか出てこないんだと、ね。そして、仏教というものは本質的にはわたしたちの肉体、感覚、そしてイメージ、意志、意識というものをすべて善因・善果に変えていく修行である

ということを理解しなければならない。

ということは、当然、その五蘊のけがれを洗濯するとき、特にその洗濯をするね、洗剤が強力であれば強力であるほど、その垢というものはどんどん浮き出てくる。そして、その浮き出てくるものをよしとするか悪しとするかである。一般的には、目先の利益しか考えないから悪しとする。しかし、もしわたしたちの内側に苦しみの因がないとするならば、それはいかなる状況であろうとも苦しまないはずである。

わたしが何を言いたいか。それは、本質的にはあなた方自体のカルマは必ず現象化するんだということ。そして、その現象化したカルマの状態を見て判断するのではなく、もっと原則的なものを見なさいよということである。

先程述べたアナータピンディカ長者が、なぜではそのようなどんどん貧しくなっていく過程において苦しまなかったのかというと、それはダンマ、つまり法というものが彼の中に根づいていたからである。しかもそれだけではなくて、彼のカルマがつまり前生、前々生、前前々生というカルマがそれをよしとするというか、

それこそ正しい生き方なんだということを知っていたからであるといわざるを得ない。

◉在家の八つの功徳

在家の功徳というものは八つある。その中の三つは、仏陀に対して布施し、供養すること。真理に対して布施し、供養すること。そして、仏陀の弟子たちに対して布施し、供養することである。これが三つだ。

残りの五つは何かというと、殺生をせず生き物を慈しむと。これによって徳の漏れを防ぎ、心を豊かにすると。盗みを働かず、周りを安心させ、そして布施すると。これによって心を豊かにすると。よこしまなセックスをしない。それによって心にけがれを持たず、周りとのトラブルを避け、親しみある人生を送ると。嘘をつかず真実を語り、それにより周りの者に安らぎを与えると。そして周りの者が自分自身を信頼してくれるような環境づくりをすると。酒、ビール、あるいはブドウ酒といったような穀物酒、あるいは果実酒といったようなものを飲まない

と。なぜならば、飲めばその人の心は乱れ、ある人は興奮し、ある人は沈み、そしてそれにより心の本質を見失い、周りとのトラブルを起こすと。よって、それを飲まないことにより、絶えず変わらない心の状態で周りと接すると。

そして、この前者三つは、物理的な布施、後者五つは物理的プラス精神的な布施ということになる。この八つの布施をもって、八つの功徳をもって在家の功徳ということができる。

◉八つの功徳の果報

人は必ず死ぬ。絶対死ぬ。死は避けられない。これは、いかなる者がそれを否定しようとも必ず死というものはやってくる。そして、その死に際して、何をもって最高の船、つまり最高の来世の乗り物とするかというと、在家の場合、この八つの功徳ということになる。

例えばここにある実業家がいて、五十億、百億といったような財産を所有し、死んでいったとしよう。しかし、それはちょうどこのような比喩にたとえること

ができる。その人は豪華客船を持っていたと。そして、彼の岸からこの岸までそれを使って渡ったと。ところがそこで、彼はその豪華客船から降りなければならなかったと。で、陸の上ではどうかというと、裸同然だったと。これは、この豪華客船が五十億あるいは百億といったような財産を意味する。

では、八つの功徳を積んだ者はどのような形で見ることができるのかと。それはその人は、この岸から彼の岸へ渡るときはあまりいい船で渡らなかったと。しかし、彼の岸に着いて最高の車である、ね、例えばロールスロイスのリムジンが用意されていると。それだけではなくて、着いた先には豪邸が用意されていると。そして多くの侍者、つまり多くの召使がそこに存在し、美しい恋人たちがそこに群がっていると。これが八つの功徳の果報であると。

では、期間的にはどちらの方が長いのかと。例えば三十にして立志し、つまり志し、四十にして事業が成功し、数十億、数百億の財を得たと。それから四十年間、その財宝のもとで生活したと。そして死んでいくと。そして中間状態の四十九日のうちの、そうだね、あなた方だったら四十三日、四十四日ぐらいに転生す

るだろう。ここではもう既に悪業の因が結果を出しだしているから相当苦しくなると。

そして例えば、次の生は三悪趣へ生まれ変わるというパターンと、それからもう一つは、そんなに現世的に豊かじゃなくても、一生懸命八つの功徳を積み、四十日、あるいは四十一日、四十二日ぐらいに転生し、憤怒天、あるいは四天王衆天、忉利天、夜摩天、あるいは覩史多天（としたてん）、楽変化天、他化自在天といったような高い天界に生れ変わり、何千年、何万年、何十万年という楽を享受するかどうかだね。

◉六道を実体験し確信を持つ

じゃあ、

「そんなことを言ったってわたしには見えないよ」と。

「そんなこと言ったってわたしにはわからないよ」

という人がいるかもしれないけど、それはあなた方がヒナヤーナの財施、そして

法施、安心施、ね、それから十の戒め、これを土台として瞑想技術というものがいろいろ伝授されているはずである。あるいは、伝授を受ける機会に恵まれているはずである。その瞑想を行なうことによって、どういう世界があるのかを自分自身で実体験できるはずである。

今回、マハー・ケイマは初めて地獄の経験をしたそうだ。つまり、地獄の世界へ降りていって自分自身が切断される経験、あるいは地獄の経典等を見、経験したそうだ。彼女の場合は、動物の経験、餓鬼の経験、人間の経験、あるいは阿修羅の経験、あるいは天界の経験を持っているから、一応六道の経験をすべてしたことになる。

そして、そういう経験をすればするほど、今あなた方のなしているオウム真理教の実践というものは、あなた方に確信を持たせるはずである。ところが、そういう経験をせず、現世にまみれ、現世的な価値観に翻弄され、人生の指針というものをずらすならば、あなた方にとっては、一時的、瞬間的享楽はあるかもしれないが、それ以上の喜びというものは存在しない。

◉死――現世的価値観の破壊

わたしがなぜ近ごろ、「人は死ぬ、必ず死ぬ、絶対死ぬ」という言葉を言っているかというと、あなた方の価値観を転倒させるためには、あなた方の価値観を破壊するためには死というものを持ってくるしかないんだね。

だって、必ず人間は死ぬでしょ。どうだ。永遠に生き続ける魂がありますか。もし、永遠に生き続けることができるなら、この世の財産、あるいはその他の諸々のこの世で肯定されているものというのは、あなた方に利益を与える。しかし、あなた方は必ず死ぬんだと。

もし、その死というものを前提とするならば、その利益はすべて、ちょうど氷でできたお城みたいなもんであると、ね。氷点下のときにはその氷は安定しているかのように見えると。しかし、それが五度、一〇度、二〇度、百度になってしまうと、もうその水分すら残らず、すべて蒸発してしまうと。これがあなた方のこの現世のすべての価値であると。

◉恵まれたチャンスを生かせ

人は必ず死ぬ。絶対死ぬ。そしてそのときに持っていけるもの、これを与える者、これこそが真の聖者であり、そして真のグルであり、そして仏陀であると。そして、あなた方はそのチャンスにね、今恵まれているわけだ。チャンスに恵まれているにかかわらず、それを見落とし、悪魔があなた方に提供している、あなた方に本当の意味での幸福を邪魔するようなものに目を向けてはならない。いいね。

（信徒）はい。

やはり、今返事というのは、十分の一ぐらいしか返事してないということは、十分の九は「いや、そんなこと言ったって現世がいいのよ」と考えているかもしれない。でも、それは幻影である。

はい、ではね、あまり暗いことを言い続けてもしょうがないけども、でも現実というものは暗い。現実というものは、あなた方のなした結果しか返ってこないのだということ、これをしっかりと理解して今日の講話を終わりたいと思う。

最後に、ということは、叩かれていることについて、わたしがどう考えているかよくわかったはずだ。これもすべてオウム真理教の垢落しであると。現にオウム真理教は存在し続けているし、そして、逆に叩かれ出して多くのいい現象も起きている。例えば『南伝大蔵経』の翻訳がどんどん進んでいるとかね。例えば、チベット仏教の経典の翻訳がどんどん進んでいるとか。例えば、わたし自体が瞑想ができるようになり、神通力が相当いろいろ戻ってきているとかね。そこがわたしとあなた方の視点の違いであると思います。

はい、では、最後に大乗の発願を十三回、苦の詞章を十三回唱えて終わりにしようかね。

一九九〇年十二月十五日　金沢支部にて

◆第十二話　確信をもって未来に向かえば……

「悪因を滅する八つの功徳」

◉アナータピンディカ長者の帰依

アナータピンディカ長者は、皆さんもご存じのとおり、まあ現代のお金にするならば数十億、あるいは数百億ともいえる布施をなした方である。このアナータピンディカ長者が、仕事もせず、仕事もせずというのは、早朝一回、朝食後一回、夕方一回という三回、バクティーに通っていらっしゃったわけだね。これは毎日です。そして、そのバクティーに通うときは、皆さんが、つまりサマナが期待するだろうからといって、必ず何か手土産を持って、つまりお布施の品を持って、アナータピンディカの園にある精舎にね、お通いになったそうだ。

ということは、仕事もせず、そして、その上にアナータピンディカ長者は人にお金を貸して、これも数十億という金額だけども、いっさい取り立てをしないと。そしてここは、まあ皆さんがちょっと納得しづらいとこだけども、仏陀の弟子になられて、自分の財産の数十億を川の堤防に埋められて保管していらっしゃったけども、洪水で流されたと。その他に、比丘衆を毎日五百人、食の供養をなさったわけだから、それは経済も破綻しようと。

そして、あるとき釈迦牟尼に呼ばれて、アナータピンディカ長者は釈迦牟尼のもとにいらっしゃったと。で、

「どうだ、無理をしているんじゃないか」という話のとき、

「いや、無理はしておりません」と。

「昨日の残りものの粥と、それから酸っぱい粥でしたら、今も毎日五百名の比丘に供養することができます」と。

つまり、ご馳走は供養できないけども、食（じき）の供養はできますと。で、それで、まあ続けていたわけだ。

アナータピンディカ長者が住んでいる家は八階建てで、その四階に女神が住んでいたと。子供を連れてね。で、その女神は、仏陀釈迦牟尼の弟子たちがその家に入ると、徳の差によってそこにいられなくなり、地上に降り立っていたと。で、その女神は、アナータピンディカ長者の侍者たちに対して、あるいは息子たちに対して、

「釈迦牟尼を供養したって貧乏になるだけだから供養するな」と。

あるいは、

「比丘を供養しても貧乏になるだけだから供養するな。」

という話をしたと。ところが、侍者も、そして息子も、

「お前はそういうことを言うな」と。「お前がいくらそういうことを言っても、わたしはそれに対して何ら心を動かすことはない」と。

そして、アナータピンディカ長者にもその話をしなかったと。

ところが、とうとうアナータピンディカ長者の経済が尽きて、どうしようもなくなったと。そこで女神は、ピンディカ長者のそばに行き、そして、もう一度仏

陀釈迦牟尼と、それから比丘の批判をしたと。ところが、アナータピンディカ長者は逆に、

「わたしの仏陀に対する帰依、ダルマに対する帰依、そしてサンガに対する帰依は変わらない」と。

「お前は家から出ていくべきである。」

と言われて、とうとう女神はそこに住めなくなったと。

そして、まず、地神に会いに行くと。ところが、地神も仏陀釈迦牟尼と、それから比丘の功徳を知っているから、その女神の言うことについて納得できず、そしてアナータピンディカ長者に対するわび、これを一緒に行なってくれという話があったわけだけど、それについても断わられたと。次に四天王衆天、ここでも断わられたと。次にインドラ、三十三天の王であるインドラの所に女神は行ったと。で、インドラは一緒にわびに行くことはできないと。なぜかというと、仏陀の徳、それから比丘の徳を考えると、女神に協力することはできないからと。しかし、次のことをなせば、おそらく許してもらえるだろうと。

そして、女神に対してなしたアドバイスは何かというと、まず川底に沈んでいる数十億のお金、そして人に貸した数十億のお金、これは鬼神をね、連れて取り立てなさいということで、取り立てさせたと。それだけではなくて、持ち主不明の数十億のお金――これは、埋まっているお金があったわけだけど――それも一緒に持っていってあげなさいと。そして、アナータピンディカ長者の蔵をまたいっぱいにして、わびを入れたと。

ところが、アナータピンディカ長者は、それはわたしが裁定するわけにはいかないと。あなたは仏陀と、そしてサンガについての批判をしたわけだからと。これは仏陀釈迦牟尼の所に行きましょうと。そして、仏陀釈迦牟尼の裁定を仰がれたと。

◉逆境のときこそひたすら功徳を

わたしたちが人間として生まれ、善因だけではない、当然悪の因もある。そして、その悪の因が悪の果を生じているとき、その悪の果が生じているにかかわら

ず、一生懸命功徳を積んでいたとしよう。このときに何が見えるのかといったら、悪果しか見えない。つまり、はたから見ると苦しみ、悪い現象しか見えないんだ。ところが、確実に善因は積まれている、ね。

逆に、善因が結果を招いているとき、その人は大変幸福そうに見える。例えば、現世的な言い方をすれば、素敵な恋人、たくさんのお金、高い地位等々の善果が見える。しかし、悪業をなしていると、悪因をなしていると、それは潜んだ形として現われ、そして善因が尽きた瞬間、今度は悪果が生じると。まあこれは、例えば田中角栄なんかの例がその典型じゃないかとわたしは思います。

そして、アナータピンディカ長者が貧しくなった例というのは、過去においての悪業が結果として生じたにすぎないと。しかし、功徳を積んでいるから、いずれ善果が生じてくるはずであると。そして、その善果に今度はとらわれてしまうと、とらわれ悪業をなすと、いずれその善果が尽き、また悪果が生じるのであると。この法を聞いた女神は、その瞬間、預流果を達成したそうである。

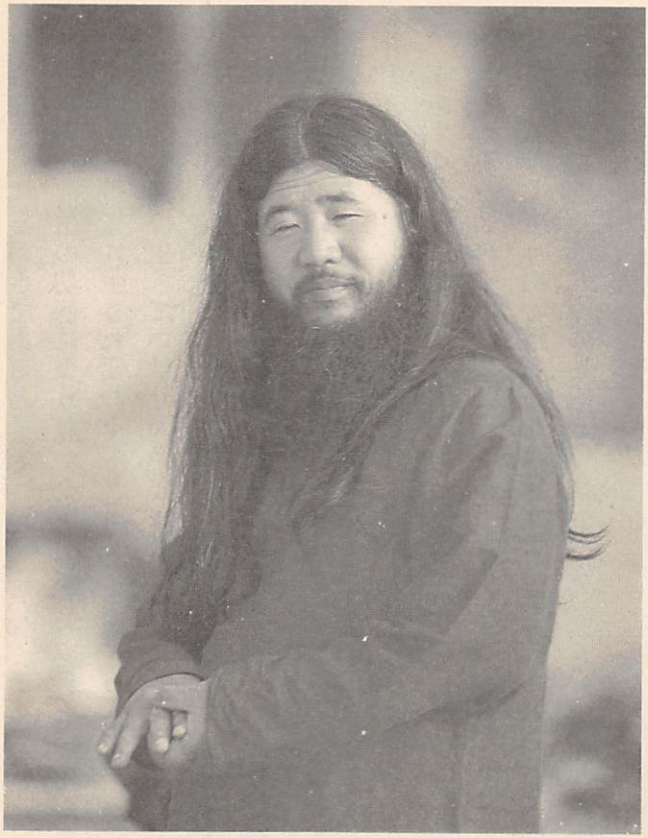
今まさに、オウム真理教の信徒という立場は、この状態とぴったりではないか

とわたしは考えます。つまり、それは何かというと、社会的に叩かれると。そして、自分自身をオウム真理教の信徒であると言えないと。麻原尊師を信奉していると言えないと。尊師のダルマを信奉していると言えないと。あるいは、師を信奉していると言えないと。

しかし、それは逆であって、こういう逆の環境のとき、あなた方が真理をしっかり学び、実践し、そして周りに対して真理を説くということは、ね、説きやすい状態で説くのの何倍も、何十倍も功徳になるということである。

◉三つの功徳——仏・法・僧に対する帰依

人は必ず死ぬ、絶対死ぬ、死は避けられないと、わたしはよく近ごろ言う。それはあなた方があまりにも生きるということに対して幻影を抱いているからである。それは、死というものを何度も何度も深く考えてこそ、初めてその生きるということが無意味なものであると、そして本当は生きるとか死ぬとかいうことなく、ひたすら善業を積み、功徳を積み、そしてひたすら持戒を守り、もっともっ



と長い高い世界を意識するべきであると。

例えば、八十年間、前生の功徳により豊かな生活をしたとして、死んだ後、悪趣である地獄・動物・餓鬼に生まれ変わるよりは、今生でそこそこ食べていけりゃいいじゃないかと。普通に生きていけりゃいいじゃないかと。あとはひたすら功徳を積み、身・口・意の善業を積み、そして来世、憤怒天、あるいは戯忘天界へ生まれ変わるという方が、ね、長い長い魂の転生から考えたら、よっぽど得であると考えなければならない。

ではいったい、何をなせば高い世界へ生まれ変わるんだと。もちろんそれは、アナータピンディカ長者のように多聞であれば素晴らしいと。多聞というのは何かというと、まあオウムの言葉では多学という言葉を使っているけど、要するによく説法を聴き考えると。あるいは、『マハーヤーナ』を読み考えると、ね。この土台ができていれば、もうあとはわたしは話すことはない。なぜならば、その教えの中に今日話すであろう八つの功徳というものが、あなた方の中に既に内在しているからである。

では、この八つの功徳とは何だろうかと。これはまず、仏陀に対して、グルに対して、あるいはシヴァ大神に対して、つまり根本的な教えの主に対して帰依をするということ。帰依というのは何を含むかというと、ただ「信じてますよ」では駄目なんだね。これは布施、そして奉仕というものが含まれなければならない。次は、ダルマに対して、法に対して、真理に対して帰依をするということ。つまり、これに対しても同じで、この法に対して布施、あるいは奉仕というものがなされなければならない。じゃあ、例えばダルマに対する奉仕とは何かといったら、それは法施であると。次は、サンガに対して、つまりオウムでは師、あるいはサマナに対して布施の実践を行なわなければならない。あるいは、奉仕の実践を行なわなければならない。これが土台、三つの功徳といわれているものです。つまり、仏・法・僧に対する功徳です。

◉五つの功徳——五戒

では次に、一般の衆生に対してはどういう功徳を積むんだと。これは、五つの

戒めを守ることにより功徳を積むんだよと。つまり、殺生を離れ、そして慈しみの心を持つと。これによって、いろいろな生き物が安らぎを覚えると。

実は、面白い例がある。サティアンビルにはたくさんのネズミがいます。そして、例えば七月、マハー・マーヤ正悟師（現ヤソーダラー正大師）が瞑想しているとき、マハー・マーヤ正悟師の膝の上で戯れたネズミがいると。あるいは、わたしが休んでいるとき、わたしの足の上でダンスを踊っていたネズミがいると。いや、これは事実だよ。ね、これは何かというと、殺生を離れ、そして慈しみのヴァイブレーションがあるから、ネズミが怖がらないんだね、全然。

第二番目は偸盗である。人のものを横取りするんではなくて、ね、そういうヴァイブレーションをやめて、そして、人にできるだけ施すと。こういうことを行なう。そして第三は、邪行を離れ、ね、よこしまな性的交わりを離れると。そして、堂々と生きると。第四は妄語を離れ、嘘を離れ、ね、そして真実を語り、堂々と生きると。第五は、ビール、あるいはお酒といった穀物酒ね、あるいはワイン、梅酒等の果実酒、こういうお酒から離れると。あるいは、タバコから離れること

によって、絶えず安定した平安な意識状態で、いつも変わらない状態で人と接すると。

こういう功徳、これは周りに対する功徳だけど、こういう功徳を達成するならば、それはあなた方の平安となり、そして安楽食となるということだ。

こういう話がある。みんなも知ってのとおり、クンダリニーというのはムーラダーラから少しずつ少しずつ覚醒していく。そして、当然師のレベルになると、スヴァディスターナの力というのは大変強くなる。なぜかというと、邪行を離れているからである。そして、戒律を守っているサマナは大変異性にもてるようになる。しかし、もうもてるときには、既にその段階を達成しているわけだから、興味を示さないと。で、ある、これは以前名古屋支部にいた師だけども、出家して異常にもてるようになったんだと。しかし、出家してしまってるから、もう関係ないよねと、ね。

わたしが何を言いたいかというと、あなた方が先程言った八つの功徳、つまり仏陀に対して、法に対して、サンガに対して、あるいは殺生を離れ、偸盗を離れ、

邪淫を離れ、妄語を離れ、そして酒を離れることによって、あなた方はこの現世において裕福に、平安に、そして尊敬を受ける人物となるはずである。

◉悔いのない実践を

ところがだ、果たしてこの中の何パーセントがそれを実践しているかということである。実践しないで、「わたしはオウム真理教の信徒だ」と、「何もいいことない」という、ね、もう無智の限りの人がいる。しかしそれは、その法を実践して、ね、初めて言える言葉であって、ただオウム真理教に入信しただけでは何の価値もないといえる。

そして、あなた方一人一人が多学の弟子となり、ね、大いに教学をし、そして瞑想し、ね、功徳を積み、戒律を守り、ね、そのステップを踏めば、必ず救済は成功するんだということをわたしはここに述べたい。なぜならば、わたしという中心の炎があって、その炎に対して、まず出家の弟子たちがもらい火をすると。そして、わたしと同じように大きな炎になると。次は信徒が同じようにもらい火

をし、ね、一人一人が大きな大きな真理を照らす炎とならなければならないわけだ。ところが、信徒という名のもとに、全く湿ったね、木の状態であるとするならば、それは、果たして真理というものは広がるだろうかと。

救済は、一人一人の自覚であると。自覚というのは口八丁の自覚ではない。それは、教学し、ね、布施をし、ね、戒律を守り、瞑想し、しっかりと神聖なヴァイブレーション、神聖な生き方を周りに見せることによってのみ、それが達成されるんだということを自覚しなければならない。

多くの例において、悪果が生じた段階で落ちるパターンが多い。これは教学が不足しているからである。あるいは、前生においての修行のカルマがないからである。しかし、前生において修行のカルマがないとしても、今生培えばいいじゃないかと。今、わたしの弟子たちの中には、わたしも含めて、次の信徒用『マハーヤーナ』に登場するカッサパ仏の弟子だった生、あるいはヴィパッシー仏の弟子だった生、ね、あるいは、それよりももっともっと以前の仏陀の弟子だった生というのが覚えている人がいます。これはどういうことかというと、今世界に、ま

さにこのオウム真理教が、真の仏教の、真実の、絶対的な真理の炎を照らすことのできるただ一つの教団であるということを証明しているからである。

そして、あなた方は、類い稀な功徳によって、今ここに集い、そして真理の実践をまさにすることができる段階に来ている。この生をものにし、ね、今から十万カルパ、あるいは三十万カルパ、あるいは五十万カルパといった長い長い時の後、グル麻原と巡り合い、あの生が、今わたしが仏陀である生であると言えるような、そういう悔いのない実践を行なっていただきたいと思います。

◉真理に対する確信を

人は生まれ、老い、病み、必ず死ぬ。人は必ず死ぬ。絶対死ぬ。死は避けられない。そしてその避けられない死に対して、ね、絶対的な答えを与えることができるのは、仏典ではない。それはあなた方が仏典をもとに学び、そして師のもとに学び、実践し、瞑想し、経験したあなた方の内側の世界、これだけである。つまり、あなた方が自分の体験によって死というものを確信し、死後の世界を確信

し、そして輪廻転生を確信し、ね、三界を確信しなければ、あなた方にとって本当の意味での真理に対する確信は生じないということを理解しなければならない。

あなた方が死を迎えるのが早いのか、それともその経験、バルドーの経験をし尽くすのが早いのか、これはあなた方が今日からどれだけ教学、布施、持戒、瞑想といったものをね、なすかで決まってくる。ここに、それを伝授することのできるグルがいる。そして弟子たちがいる。それに対して確信を持ち、しっかりと経験しなさい。そしてその経験は、あなた方の死後、その瞬間に多くの恩恵を与えることになるだろう。

もう、先月なしたポアの説明については今月はやらない。それは、ね、説法ビデオを見ればわかることだから。しっかり先月と今月の話を合わせて、一緒に学び、確信をもって、何をなせばあなた方に恩恵があるのかを考えましょう。いいね。

◉願望を成就する方法

最後に、願望成就をする方法を一つ伝授しましょう。これも、来月の仏典に載っているから、まあその説明を読めばよくわかると思うが、ひたすら布施・持戒をし、思念をし続けると。例えば現世的な願望については、最もこれは低い段階で成就します。次に、四天王衆天、三十三天、夜摩天、兜率天、楽変化天、他化自在天、梵衆天へ生まれ変わるためにも、同じ思念の仕方をすると。そして、どの程度の功徳を積めば人間界へ生まれ変わり、どの程度の功徳を積めば天界へ生まれ変わるかの説明も、そこでなされているはずです。

まあ、簡単に説明すると、あまり布施をせず、持戒を守らない人は、人間へ生まれ変わり、そして身分の低いというかね、苦しみの多い人間の世界を歩くことになると。そこそこに布施をし、そしてそこそこに持戒を守っている人は、まあ普通の人間であると。次に、大いに布施をし、そして大いに持戒を守っている人は、まあ人間界でもトップに立てると、ね。

それから、次に天に入るわけだけど、これは非凡の功徳、非凡の布施、そして

非凡の持戒の守り方をなした者が、第一天界から第六天界までの天へ生まれ変わり、そこで最高の享楽を味わうことができるとうたわれてます。ただし、その場合、思念をどこへ設定するか、例えばそれを現世へ設定するのか、あるいは来世へ設定するのか、あるいは来世の現世へ設定するのか、それはあなた方が決めること。そして、それで願望はかないます。

それは、あなた方が、もうどんなことがあっても自分は帰依するんだと、どんなことがあってもその法にのっとり生きるんだという自覚をすれば、必ずあなた方に幸福があるんだと。ただ、あまりにもその前に悪業を積んでいる場合は、その悪業がね、先に来るから効果がないように見えるが、確実に功徳の因は備わっているんだということを確信を持って実践に励んでほしい。いいね。

さあ、しっかりと教学、布施、持戒、瞑想、頑張ろうね。

一九九〇年十二月十六日　名古屋支部にて

◆第十三話　これが〝逆説の浄化

「八つの功徳の果報」

◉イニシエーションの土台となるもの

人間を構成する要素を大別すると、それは三つのパートに分けることができる。その三つとは何かというと、わたしたちのコーザル、アストラル、そしてこの肉体、現象界ということができる。そして、ある魂は肉体のみを意識し、ある魂はアストラルのみを意識し、ある魂は最も深い、わたしたちの本質に近い、コーザルを意識することができる。

この肉体からアストラル、そしてコーザルへと至る道はいろいろとある。例えば、ヒナヤーナ仏教においては、身・口・意の統御を行ない、八つの聖なる実践

を行なうことによって清め、そしてコーザルへと到達する。ところが、ナーガールジュナ――これはまあ、大乗仏教の典型的な菩薩の一人、日本では龍樹（りゅうじゅ）といわれているわけだけど――ナーガールジュナの時代に入ると、経典を学ぶこと、そしてグルが弟子に対してエンパワーメントを行なう、イニシエーションを行なうことによって、その最も深い意識状態、仏性というものを発現させる。

例えば、ナーガールジュナの場合、リンゴをグルから受けたことによって覚醒が生じたと。そして、もう少し後期になると、例えば、これはオウム真理教とも大変関係のある、カギュ派の開祖ともいうべきティローパ、このティローパが弟子のナローパに対して、数々の帰依の試みをさせ、そして最終的に、自分のはいていた靴でナローパの頭を殴りつけるということによって覚醒をもたらしている。このようなものは客観的に見ると、まあ、何が何だかわからないと、論理的でないというかもしれない。

しかし、それは深遠なタントラの教えである、管、そして風、心滴という三つの組成を理解するならば、簡単にそれについて解明することができる。

この、ナーガールジュナのときのリンゴ、このリンゴにはグルのエネルギーが込められていると。例えばそれは、今日の、あなた方が受けた飴（注：尊師のエネルギーが込められたイニシエーション用の飴）と同じである。そして、そのエネルギーは、そのナーガールジュナの風、つまりエネルギーを強め、上昇させ、そして深い意識状態へといざなう。また、ティローパがナローパになした、靴で殴りつけるといった作業は、これはその風の詰まりを取り除き、そして、そこを浄化し、風の流れを良くし、そしてエネルギーを入れてあげるといった作業になる。

そして、日本のタントリックの本には、このような特異な例のみを紹介する傾向が強い。しかし、実際は、そのイニシエーションを受ける前には、最低二つの条件が必要となる。その二つの条件とは何かというと、第一は布施・持戒といった、これは在家修行の根本ともいうべき土台である。そして、第二は何かというと、それは教学・瞑想といった、出家修行者がなさなければならない、高い世界へ到達するための準備である。この布施・持戒、そして教学・瞑想といった四つ

の柱がしっかりしている者に限って、本当の意味でのイニシエーションの効果が百パーセント発揮されるわけである。

◉カルマの理法――なしたことは返ってくる

皆さんは、布施の実践を行なうことによって、即座に幸福になると考えるかもしれない。しかし、それはカルマの理法というものを知らない、無智なるがゆえの考えである。

例えば、今日なしたことが今日返るかと。もちろん、今日なしたことが今日返る人もいる。あるいは、今日なしたことが今日返らない人もいる。この差は何かというと、それを現象化するスピード、つまりこれをヨーガの言葉を使うならば、タマスだとかサットヴァだとかいう言葉を使っているが、要するにカルマを現わすスピードを速める特質のある魂であるか、あるいは遅らせる特質のある魂であるかによって違ってくる。そして、もちろん速める方がステージは高いといわれている。

それはちょうどこのようなことである。例えば、ここにいらっしゃる方々のある程度の人たちは、多くの殺生・偸盗・邪淫……、これを一つずつ説明すると、生き物を殺す、盗む、そして淫らな性的行為を行なう。嘘をつく、そして酒を飲むといったような、在家の修行者がなさなければならない五つの戒めというものを守らないで生活しているはずである。そして、そのカルマというものは蓄積され、教学をし、瞑想し、ザンゲをしている人はそれが即座に返ってくる。

即座に返るということはどういうことかというと、例えば殺生のカルマの顕現である痛み、あるいはケガといったような形で返る。あるいは、偸盗のカルマは盗まれる、あるいは貧しくなるといった形で返る。邪淫のカルマについては、対人関係が悪くなるといった形で返る。嘘については、信頼を失うといった形で返る。そして、酒については、とっぴな失敗を行なうといった形で返ると。こういう現象が返るはずである。

そして、返ったならば、そのときその人は後悔する。わたしはオウム真理教なんかやらなければよかったと。なんでわたしはオウム真理教をやったんだろうか

と。他の人は、悪いことをしても返らないでいると。そのとおりである。他の人たちは、殺生をなし、偸盗をなし、邪淫をなし、妄語をなし、そして酒を食らったとしても、そのカルマは返らない。いや、正確にいうならば、彼らの借金の許容量は大変大きいということができる。

◉凡夫と修行者の違い――苦しみの器の大きさ

これはちょうど、このような比喩で表現することができる。ここにAという者とBという者がいて、Aという者は一億円まで借金することができると。Bという者は百万円しか借金できないと。そうすると、この一億円借金できる者は、ひたすら借金をし続けると。百万円も同じであると。

ところが、百万円しか借金できない者は、百万円以上借りられなくなってくると。そして、借りられないということはどういうことかというと、その借金が返ってきたとき、苦しまなければならないと。

ところが、一億円借金できる人は、一億円まではひたすら借りることができる

と。そして、一億一円になったときに、借金を返さなければならないと。ところが、借金を多くできるということは、その人のポテンシャルが大きいわけじゃなくて、その人が徳がないからそうなっているわけであるから、当然、返すときに苦戦しなければならない。

前者は、来世三悪趣に生まれ変わる魂であると。後者は現世果報、現世によって苦しまなければならないカルマの持ち主であるということができる。

「麻原、お前の言っていることはおかしいんじゃないか」と。「なぜそういえるんだ」と。例えば、一つの証明として、オウム真理教の修行をやっている人と、それから凡夫とでは、苦に対する許容量が違うと。苦に対する許容量が違うとは何かというと、先程言ったとおり、絶えず借金を返し続けて、あるいは、信徒の中でも徳のある人は徳を積んで、逆にプラスの、預金の状態にあるから、苦しみの形成されているこの五蘊の状態が、苦しみではなく楽の方に傾いてきていると。

ということは、この修行を始めて悪い現象が起きるということは、マイナスではないんだということである。いや、修行の大原則であるザンゲと供養という二

大の柱の中の、ザンゲを行なうことによって出てくるこの苦しみというのは、わたしたちの内側に潜んでいる、来世わたしたちを悪趣へと導く、悪趣へと転生させるカルマを切るためには、出してしまわなければならないことであると。ところが、どうですか、皆さんは。それをそう考えて実践しているかな。

◉アナータピンディカ長者の布施と奉仕

では、このザンゲと供養、供養の最も典型的なもの、それは布施と奉仕であると。これについて有名な話がある。

覚者サキャ神賢（仏陀釈迦牟尼）の在家の一番弟子であるアナータピンディカ長者、彼は覚者の教団に何十億、何百億という布施をなした人である。そして布施だけではなく、まず早朝に一回、朝食後に一回、そして夕方に一回、つまり一日三回奉仕の活動に祇園精舎へと出向いた人である。そして、いっさいの家業を放棄し、ひたすら布施、ひたすら奉仕を尽くした人である。

当然、いかなる長者であっても、サキャ神賢の救済計画に対して多くの布施を

なしたわけだから、そして仕事をしないわけだから、経済的にピンチになると。そして、実際、供養できないぐらいのピンチの状態に追い込まれても、彼はひたすら供養し続けた。そして、最終的には彼の功徳が勝り、彼が布施をした分と同じだけの財が、また戻ってくるわけである。

ここでポイントになるのは、なぜ布施をした金額と同じだけ戻ってくるのかと。それ以上戻ってこないのかということである。これは、彼が財に対して興味がなかったからである。彼はその財と同時に、次の生で、皆さんもよく知っている兜率天、つまり第四天界へと転生している。つまり彼のなしたカルマは、財に還元されるのではなく、戯忘天界第四位である兜率天へと生まれ変わることで、その功徳は果報となったわけである。

◉布施と持戒の徹底を

人は死ぬ。必ず死ぬ。絶対死ぬ。死は避けられない。無智なるものは死を見ない。しかし、死は存在している。その死に対して、ただ一つの答えを持っている

オウム真理教、そして日本でただ一人、生と死のすべてを経験し、見、話すことのできるグル、それがわたしである。あなた方はその教えのもとに、今真理を実践している。だとするならば、まず、在家の戒である五つの戒め、そして在家の功徳である三つの功徳、これを実践しなければならない。そして、教学をし、瞑想をし、イニシエーションを受け、早く自分自身とは何であるか、自分は何のために生まれたのか、自分は何のために死ぬのか、どこへ生まれ変わるのか、こういうことをすべて見、聞き、知り、経験できるようになりなさい。

十九九〇年十二月二十二日　札幌支部にて

※オウム真理教では、本来の意味を正確に表わしていない既製の仏教用語は用いず、パーリ語原典を忠実に翻訳し、吟味した結果、決定した訳語を使っています。以下に、代表的な言葉の対比表を掲げますので参照してください。また、仏教・ヨーガの言語対比表も参考までに掲載しました。

◆言語対比表

欲界→愛欲界
無間地獄→超期間激苦地獄
叫喚地獄→号叫激苦地獄
鉢特摩地獄→紅蓮華のような状態になる激苦地獄
阿修羅→不飲酒天
憤怒天→意識堕落天
戯忘天→戯れ堕落天
地居天→地上愛欲神天
四天王衆天→四大王天
持国天→堅固王国天
増長天→成長天
広目天→統治変化自在天空天
毘沙門天、多聞天→守庶民外傷天
夜叉→人食い鬼神
忉利天→三十三天
帝釈天→有能神
夜摩天→支配流転双生児天
閻魔王→支配流転双生児王
兜率天→除冷淡天
楽変化天、化楽天→創造満足天

他化自在天→為他神以神通創造欲望満足従事天

悪魔→破滅天

色界→形状界

梵天→神聖天

梵衆天→神聖衆愛欲神天

梵輔天→神聖臣天

大梵天→大神聖天

浄天→美天

遍浄天→総美愛欲本質神天

広果天→偉大果報愛欲本質神天

浄居天→清潔居住天

無煩天→超空間愛欲神天

無熱天→超燃焼愛欲神天

善現天→善安楽愛欲神天

善見天→善現象愛欲神天

色究竟天→超越童子愛欲本質神天

無色界→非形状界

空無辺処→空間無辺境

識無辺処→識別無辺境

無所有処→無所有境

非想非非想処→非認知非非認知境

想受滅→認知経験滅尽

須弥山→完全無欠山

東勝身洲→東の高貴なる身体を得る大陸

南贍部洲、閻浮堤→南のバラリンゴの大陸

西牛貨洲→西の願いがかなう牛の大陸
北倶盧洲→北の悪しき音の大陸
成劫→再生期
住劫→継続期
壊劫→還元期
釈迦牟尼→サキャ神賢
如来→真理勝者
応供→供養値魂
正等覚→最上正覚者
明行足→智徳成就者
善逝→最上善逝
世間解→世間解（変更なし）
無上士→無上士（変更なし）
調御丈夫→丈夫調御者
天人師→天人師（変更なし）
仏陀→覚者
世尊→世尊（変更なし）
菩薩→到達真智運命魂
比丘→向煩悩滅尽多学男
比丘尼→向煩悩滅尽多学女
優婆塞→帰依信男
優婆夷→帰依信女
僧伽→出家教団
長老→高弟
声聞→多学の弟子
沙門→出家修行者
沙弥→少年出家者

遊行者→托鉢修行者

バラモン→祭司
クシャトリヤ→武人
ヴァイシャ→庶民
シュードラ→奴隷

四双八輩→四対の人々ー八つの宗教的特性を持つ人々

預流→真理の流れに入ること
一来→（愛欲界に）一度だけ再生すること
不還→不還（変更なし）
阿羅漢→供養値魂
四預流支→四つの真理の流れに入る段階

四聖諦→四つの絶対的真理
苦聖諦→苦しみの絶対的真理
集聖諦→苦しみの生起の絶対的真理
滅聖諦→苦しみの滅尽の絶対的真理
道聖諦→苦しみの滅尽に至る方法の絶対的真理

四念処→四つの記憶修習述

四正断、四正勤→四つの正しい努力

四如意足→四つの如意の基礎
欲如意足→決意如意の基礎
精進如意足→精進如意の基礎
心如意足→思念如意の基礎

観如意足→観慧如意の基礎

五根→五つの潜在性
信根→信の潜在性
精進根→精進の潜在性
念根→記憶修習の潜在性
定根→サマディの潜在性
慧根→智慧の潜在性

五力→五つの能力
信力→信の能力
精進力→精進の能力
念力→記憶修習の能力
定力→サマディの能力
慧力→智慧の能力

七覚支→七つの覚醒段階
念覚支→記憶修習覚醒段階
択法覚支→検討覚醒段階
精進覚支→精進覚醒段階
喜覚支→喜覚醒段階
軽安覚支→静寂覚醒段階
定覚支→サマディ覚醒段階
捨覚支→無頓着覚醒段階

八正道→聖なる八段階の道
正見→正見解
正思惟→正思惟（変更なし）
正語→正語（変更なし）
正業→正行為
正命→正生活

正精進→正奮闘
正念→正記憶修習
正定→正サマディ

三苦→三つの苦しみの本質
苦苦→苦しみの苦しみの本質
行苦→悪い構成要素の苦しみの本質
壊苦→悪化の苦しみの本質

三受→三つの感覚
楽受→楽の感覚
苦受→苦しみの感覚
不苦不楽受→不苦不楽の感覚

四無量心

慈→聖慈愛
悲→聖哀れみ
喜→聖称賛
捨→聖無頓着

五取蘊→五つのとらわれの集積
色取蘊→形状・容姿のとらわれの集積
受取蘊→感覚のとらわれの集積
想取蘊→表象のとらわれの集積
行取蘊→経験の構成のとらわれの集積
識取蘊→識別のとらわれの集積

五蓋→五つの障害
貪欲蓋→愛欲の衝動による障害
瞋恚蓋→害心による障害

惛眠蓋→頑固と愚鈍による障害
掉挙蓋→興奮と後悔による障害
疑蓋→疑念による障害

五妙欲→五つの愛欲の構成部分
色→形状・容姿
声→声（変更なし）
香→香り
味→味（変更なし）
触→接触

五下分結→五つの下位に結びつけるきずな
有身見→有身謬見
疑→疑念
戒禁取→戒誓のとらわれ

貪欲→愛欲の衝動
瞋恚→害心

五上分結→五つの上位に結びつけるきずな
色貪→形状愛著
無色貪→非形状愛著
慢→慢（変更なし）
掉挙→興奮
無明→非神秘力

八解脱→八つの離解脱
八勝処→八つの克服境
十遍処→十全境
十波羅蜜→十の徹底

十二縁起の法→十二の条件生起の段階
無明→非神秘力
行→経験の構成
識→識別
名色→心の要素・形状・容姿
六処→六つの感覚要素と対象
触→接触
受→感覚
愛→渇愛
取→とらわれ
有→生存
生→出生
苦→苦しみ
信→信（変更なし）
悦→歓喜
喜→喜（変更なし）
軽安→静寂
楽→楽（変更なし）
三昧→サマディ
如実知見→如実精通見解
遠離→現世否定
離貪→離愛著
解脱→離解脱
涅槃→煩悩破壊
般涅槃→完全煩悩破壊
中般涅槃→中完全煩悩破壊
生般涅槃→滅少完全煩悩破壊
無行般涅槃→形状界にて経験の構成がなく功徳の果報を受けつつあ

る完全煩悩破壊
有行 般涅槃→形状界にて経験の構成があり真理の実践による完全煩悩破壊

一種者→一種者（変更なし）
家家者→徳の高い家から家へと転生する者
極七返→最高七回流転者

正智→正精通
正解脱→正離解脱
心解脱→心の離解脱
慧解脱→智慧の離解脱

殺生→殺生（変更なし）

偸盗→与えられないものを強奪すること
邪淫→愛欲における邪悪な行為
妄語→嘘
綺語→軽薄語
悪口→悪口（変更なし）
両舌→中傷
貪→愛著
瞋→邪悪心
癡→迷妄
愁→不運な出来事
悲→悲嘆
苦→苦しみ
憂→激痛
悩→悩み

五趣→五つの方向
善趣→幸福に向かうこと
悪趣→悲痛に向かうこと

カルマ→要素の蓄積
法→法則
梵行→神聖行
布薩→戒誓行
波羅提木叉→約束維持解放
頭陀→断修行障礙
袈裟衣→赤っぽい黄色の衣
衆生→生命体
四大種→四大元素
本生経→輪廻転生談

◆仏教・ヨーガ　言語対比表

愛欲界―現象界
形状界―アストラル世界
非形状界―コーザル世界
愛著―サットヴァ
邪悪心―ラジャス
迷妄―タマス

麻原彰晃の世界シリーズ

人はなぜ麻原彰晃を尊師と仰ぎ、彼のもとに集まるのか？
その答えがこの本に集約されている。
麻原尊師の多彩な魅力を満載したファン待望のシリーズ。

絶賛発売中!!

PART-1
幸福に至る四つの実践

PART-2
尊師、麻原彰晃が斬る！

PART-3
真実！六道輪廻

PART-4
宗教にだまされるな！

霊障、水子供養、先祖供養、守護霊……。この世にはびこる間違った観念を打ち破り、正しい道を説き示す麻原彰晃尊師。本当の幸福と心のやすらぎを得たいあなたに。

B6判　定価980円

PART-5
絶対の真理

善業も悪業もなしたことが必ず返ってくる——幸福・不幸の根本原因であるカルマの法則を多くの実証例を交えて説く。

B6判　定価980円

PART-6
願望成就の秘法

安全で確実な願望成就の秘法とは？仏教の教義にのっとった正しい願望成就法により、この世での願望は本人も気付かぬくらい自然とかなってしまう……。さらには、解脱・悟りにまで至れる方法を惜しげもなく公開。

B6判　定価980円

PART-7
仏教真理 八正道

最終解脱者のみが語り得る八正道の真の意味合い。高い解脱・悟りへ至る道を、具体的に、現代でもすぐに実践できる方法として説き明かす。

B6判　定価800円

PART-8

仏教真理 六波羅蜜

大乗仏教における在家信徒の最も重要な修行法の一つ、六波羅蜜。この修行プロセスを着実に実践しさえすれば、在家でも必ず解脱へと至れる！巻末には、高弟たちの体験談の特別付録付き。

B6判　定価800円

PART-9

尊師、聖地インドを行く

尊師がインドを行く。不思議な神秘の力によって、様々な過去の事実を明かされる尊師。第一部では、信徒と共に行かれた巡礼の旅の全記録を、そして第二部ではなんと、今まで部外秘だった直弟子用奥儀説法を満載！

B6判　定価750円

PART-10

仏教真理 五蘊無我

わたしたち本来のものではない五蘊（形状・容姿、感覚、表象、経験の構成、識別）を我と錯覚し、迷妄に苦しむ人間。この五蘊を証智し超越することによって、わたしたちは人間を超え、神に至れるのである。

B6判　定価650円

PART-11

自己を超えて神となれ！

――大人気を呼んだ尊師大学講演会特集――。東大、京大をはじめ、九一年の大学祭で尊師が若者に、現代における宗教の存在意義等について語られた模様を一挙掲載。

B6判　定価820円

PART-12

仏教真理 十二縁起

サキャ神賢が初転法輪でお説きになった「十二縁起の法」。魂の落下と上昇のプロセスを克明にえがき、人間がこの世に生を受け、絶対的な自由の世界へ至る道程を明らかにする。

B6判　定価620円

PART-13

これが尊師！

雑誌・テレビ・ラジオにと、今大人気の麻原尊師。尊師の人気の秘密は何か？雑誌社からの取材を中心に、様々な角度から尊師の魅力を探る。

B6判　定価570円

PART-14

宗教の条件

今、本物が明らかになる！　真の宗教の条件とは？第三次宗教ブームと呼ばれる現在、様々な宗教の中から間違いなく本物を選び出すための条件を、あますところなく説き示す一冊。

B6判　定価570円

PART-15

絶対幸福への道

最終解脱者、麻原彰晃尊師が、幸福になるための最速・最短の道をあなたに伝授する！　あなたを確実に幸福へと導く秘法が満載の、在家修行者座右の書。

B6判　定価620円

（価格にはすべて消費税が含まれています。）

●全国の有名書店にてお求めください。弊社に直接お申し込みの場合は下記まで。

オウム出版　本　社　〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17 TEL 03(3439)6043 振替 東京2-109325
営業部　〒168 東京都杉並区宮前3-8-11 TEL 03(5370)1598

マハーヤーナ・スートラ

MAHAYANASUTRA

麻原彰晃 著

解脱——それは光を超えて

魂は彷徨する、自由を求めて。
魂は飛翔した、歓喜の世界へ!!

解脱それは、一言では表現することのできない深遠で、広大な世界。今まで、曖昧に定義されていた解脱の段階と状態について、この本はわかりやすく解き明かします。真理の最終地点を目指すあなたにとって、欠くことのできない宝書。

B6判296ページ(巻頭カラー8ページ) 定価3090円

●ご注文は書店にてお願いいたします。直接弊社にお申し込みの場合は下記まで。

オウム出版 (本 社) 〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17
TEL 03(3439)6043 郵便振替 東京2-109325
(営業部) 〒168 東京都杉並区宮前3-8-11
TEL 03(5370)1598

MAHA YANA SUTRA

マハーヤーナ・スートラ PART 2

あの『マハーヤーナ・スートラ』の続編、待望の発刊！

私は現代人に欠けているもの、それは絶対的真理の実践、四つの預流支の実践だと考えている。
この『マハーヤーナ・スートラ PART 2』は、まさにその目的のために編集された経典である。
オウム真理教は伝統的な仏教、ヨーガを根本とした教団である。
特にこの仏教の教えについては、後世に作られた仏陀釈迦牟尼の教えてないといわれている大乗経を排し、

麻原彰晃 著
定価2100円(税込)

あくまでも仏陀釈迦牟尼の口から出たといわれている原始仏教の教えをとっている。
そしてこの教えの実践は、まさに現代の多くの悩みを解決する妙薬と言わざるを得ない。
さあ、あなたは真の灯明を見た。
この灯明を生かし、
あなたの心に真理の灯明を点火していただきたいと思います。
麻原彰晃

お経は読むためのものではない。
読んで、考え、実践するためのものである。

〈本書の構成〉

◆八つの功徳
南伝大蔵経「布施品」
尊師説法
体験談

◆四預流支
南伝大蔵経「預流相応」
尊師説法
体験談

◆八正道
南伝大蔵経「道相応」
尊師説法
体験談

ご注文は書店にてお願いいたします。直接弊社にお申し込みの場合は下記まで。(送料300円)
オウム出版 〒154東京都世田谷区世田谷2-6-17 TEL.03(3439)8043 郵便振替 東京2-109325

仏陀の智慧が光を放ち混迷の時代を照射する

INITIATION

イニシエーション

麻原彰晃著

この名著はすべてを語っていた！

「解脱」「悟り」のプロセスを細やかに説き明かし、最高の修行法を伝授する。

本来、選ばれた弟子にのみ明かされる秘儀――

ヨーガ・仏教の奥儀を極めた修行の正しさは、誕生した三五〇名の解脱者が証明する。

さらに、自民党の大勝と大敗、円高の進行、農作物輸入自由化など、

今日の世界と日本の動向を正確に予言している、驚くべき記述の数々！

◎「解脱」「悟り」の真実／現代の仏陀麻原彰晃が最高の修行法を公開。

◎タントラ・イニシエーションの全貌／チベット密教・ゲールク派とオウムの秘儀を比較する。

◎確実に核戦争だ！／日本と世界の近未来を予言する。

◎総勢三十一名の体験談／「クンダリニーが覚醒する」「過去世が甦る」「悟りのプロセス」など、これが修行プロセスと霊的ステージの真実だ。

武田 健さん（東京都／学生）
「未法の時代は終わった」ということを確実に感じさせる本である。

松岡謙次さん（愛媛県／警備員）
読めば読むほど、「頑張ろう、やるぞ」と思わせるような素晴らしい本です。

山本 勇さん（石川県／会社員）
解脱するまでの心の状態が、多くの例を挙げてわかりやすく書いてある。

大森恵子さん（山口県／店員）
他の書では得られない絶対なる真理に触れることができた。

武田葉子さん（熊本県／主婦）
「人間として最高の、最終の目的は何か」ということがはっきり示されています。

本間智加子さん（東京都／経理事務）
宗教に対する偏見がいっぺんに吹き飛んでしまいました。

定価2163円 ご注文は書店にてお願いいたします。直接弊社にお申し込みの場合は下記まで。(送料300円)
オウム出版 〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17 電話03(3439)6043 郵便振替 東京2-109325

絶対幸福の鍵を解く

生死を超える

現実生活の苦悩から修行を志し、ついに解脱するに至った麻原彰晃尊師の貴重な体験をもとに、釈迦牟尼の「縁起の法」が、実はクンダリニー・ヨーガのプロセスそのものであったことを説き明かした名著「生死を超える」。

改訂

八十六年十二月発売以来、宗教、精神世界に関心を持つ読者に絶大な支持を受け、解脱を目指す修行者にとって、手放すことのできない〝バイブル〟となっております。新たに八人の体験談をまじえて贈る全面改訂版。

麻原彰晃

◎誰にも書けなかった知られざる世界が今ここに！
◎真実を求めるあなた、人生の悩み、苦しみを乗り越えたいあなたに贈るヨーガ、仏教の真髄！
◎修行者二十一人の豊富な体験談も満載！

麻原彰晃著／B6判／定価1854円（本体1800円）

●ご注文は書店にてお願いいたします。直接弊社にお申し込みの場合は下記まで。（送料300円）

●オウム出版 ●〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17 電話：03(3439)6043/郵便振替：東京2-109325

眼ある人は目覚めよ!

タターガタ・アビダンマ

麻原彰晃 著 B6判 550円

Tathāgata Abhidhamma

真理勝者 絶対最勝の法則

原始ヨーガ、キリスト教、ユダヤ教、イスラム教などすべての真理を内在した史上最強の法則。日本で初めて、サキャ神賢（釈迦牟尼）が説いた全体系が示される。

第一誦品　大宇宙の実相
第二誦品　真理勝者の救済計画

以下続刊

●ご注文は書店にお願いいたします。直接弊社にお申し込みの場合は、下記までご連絡ください。

オウム出版　本　社　〒154　東京都世田谷区世田谷2-8-17　TEL 03(3439)6043　振替 東京2-109325
営業部　〒168　東京都杉並区宮前3-8-11　TEL 03(5370)1598

オウムについてもっと詳しく知りたい……
教義その他について、いろいろと聞きたいことがある……
オウムの人たちの生の声を聞いてみたい……
そんなあなたに最適な情報ネットワーク

好評！あなたとオウムをつなぐ パソコン通信、"オウム真理教ネット"

面倒くさい手続きは一切ありません。オウムに興味をお持ちの方、聞いてみたいことがある方は、今すぐお気軽にご利用ください。

"オウム真理教ネット"のご紹介

TEL番号	03-5370-1726
通信速度	1200/2400bps
通信条件	BITS-8 PARITY-NONE STOP-1
プロトコル	X-MODEM Y-MODEM(-G)
ゲストID	GUEST
運用時間	24時間
入会方法	ゲストログイン後、SYSOPあてメールにて申請

●なお、その他詳細は下記までお問い合わせください。

〒168 東京都杉並区宮前3-8-11
"オウム真理教ネット"事務局
TEL 03-3335-4965

笑顔の明日を予感させるライフクリエートマガジン

Enjoy Happiness

えんじょい・はぴねす

月刊『えんじょい・はぴねす』

――主な内容――

◆ Voice of Buddha
最終解脱者が贈る幸福メッセージ
「光を超えて――えんじょい・はぴねす」
麻原彰晃尊師

◆ Special Lecture
精神世界ファン必読の特別講義！
「宗教は一つの道」 麻原彰晃尊師

◆ JĀTAKA Stories
「仏陀釈迦牟尼からの贈り物
――釈迦牟尼の輪廻転生に見る真実」

◆ Science and Truth
仏教の真理を科学の視点で斬る！
「真理を科学する」

◆ あなたもわたしも創造主

などなど、他の雑誌では絶対に見られない興味深い情報が満載！

「幸せになりたい！
でも、信徒になるのはちょっと……」
そんなあなたに贈る
最高のプレゼント！

『えんじょい・はぴねす』の定期講読を申し込まれた方は、様々な特典が受けられる〝EH会員〟になることができます。EH会員は信徒ではありませんが、自由にオウムのイベントに参加できますし、全国や海外の本部・支部をいつでも利用できます。
お気軽にオウムをのぞいてみませんか？

特典の一部を紹介すると……

- ◉オウム主催のイベント、説法会等へ自由に参加可。
- ◉幸福情報を満載したEH会員手帳をもれなくプレゼント！
- ◉成就者との対面および電話による悩み相談。
- ◉各種販売物を信徒価格で購入可。

〝えんじょい・はぴねすの会〟会員（EH会員）になるには？

※入会金無料。月刊『えんじょい・はぴねす』の定期購読を申込み、料金の払い込みが確認されるとEH会員となります。
なお、定期購読の申込みは6カ月単位で郵送料込み6000円です。

※詳しくはお近くのオウム真理教本部・支部までお問い合わせください。

至福の未来をあなたの手に

オウム真理教 AUM SHINRIKYO

心身の悩みを解決したい
超健康体を得たい
豊かな生活を送りたい
素晴らしい人間関係を築きたい
スーパー・パワーを身につけたい
来世も幸福に生きたい
解脱し、永遠の至福を得たい

……などなど、様々な願いで頭がいっぱいのあなた。日本でただ一人の最終解脱者・麻原彰晃尊師率いるオウム真理教は、完璧な教義に裏付けられた最高の修行法で、あなたの夢を早く確実に実現します。素晴らしい未来を見つけに、あなたも気軽にオウム真理教の門を叩いてみませんか?

※資料請求券を貼付したハガキ、または電話にて最寄りの本・支部までご連絡ください。入信案内等、詳しい資料をお送りします。

キリトリ線

麻原彰晃の世界 PART16

資料請求券

◆各道場のご案内◆

富士山総本部　0544(54)1267
〒418-01　静岡県富士宮市人穴381-1
東京本部　03(3327)8565
〒156　東京都世田谷区赤堤2-42-5 杉田村松ビル1F
新東京本部（杉並道場）03(3396)9393
〒167　東京都杉並区下井草4-4-4　井口ビル2F
大阪支部　06(397)1022
〒532　大阪府大阪市淀川区西宮原1-8-14 八光ビル2F
福岡支部　092(474)2877
〒812　福岡県福岡市博多区博多駅前2-6-15 第一渡部ビル6F
名古屋支部　052(252)0709
〒460　愛知県名古屋市中区栄5-8-14 万国ビル3F
札幌支部　011(241)4938
〒060　北海道札幌市中央区北2条西2丁目19-1 チサンホテル本館2F
京都支部　075(371)3759
〒600　京都府京都市下京区堀川通り松原上ル五軒町384 松本ビル2F
仙台支部　022(268)3904
〒982　宮城県仙台市若林区河原町1-4-20 十全会ビル2F
金沢支部　0762(51)8457
〒920　石川県金沢市京町25-20 ソフトオフィスビル2+4 2F
高知支部　0888(84)8286
〒780　高知県高知市はりまや町2-8-8 安藤ビル2F
広島支部　082(264)6250
〒732　広島県広島市南区西蟹屋4-4-18 和田ビル3F
横浜支部　045(243)8079
〒231　神奈川県横浜市中区若葉町3-41-2 コスモ伊勢佐木長者町ビル204
和歌山支部　0734(24)2859
〒640　和歌山県和歌山市駿河町42 和歌山酒販会館2F
水戸支部　0292(26)8044
〒310　茨城県水戸市中央2-2-1 HDビル6F
船橋支部　0474(66)4965
〒274　千葉県船橋市新高根6-26-18
那覇支部　098 (869) 7707
〒902　沖縄県那覇市安里2-4-12 嘉数グラビアハイツ5F
埼玉出張所　0485(74)6205
〒366　埼玉県深谷市荒場441-8
渋谷出張所　03 (3476) 5065
〒150　東京都渋谷区道玄坂1-15-3　プリメーラ道玄坂317号
〈海外支部〉
ニューヨーク支部　212(421)3687
8 East 48th St.＃2E (2nd Floor), New York, N.Y. 10017 U.S.A.
ボン支部　(0228)616647
Auf dem Hugel 48, Endenich, 5300 Bonn 1, S.R.Germany

麻原彰晃の世界 PART16
『麻原彰晃 方便品』
1992年 4月19日　初版発行
定　価　720円（本体699円）
発行者　松本知子　石井久子
編　集　オウム出版広報編集部
発行所　株式会社オウム
〒154 東京都世田谷区世田谷2—8—17
電話　03（3439）6043　振替　東京2—109325
©Shoko Asahara 1992
ISBN4—87142—040—X　C0014　P720E
※乱丁・落丁がありましたらお取り替えいたします。

麻原彰晃の世界 PART16

麻原彰晃 方便品

ほうべんぼん

ISBN4-87142-040-X C0014 P720E 定価720円(本体699円)